
15歳。

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

15歳。

【Nコード】

N7456A

【作者名】

霜月 沙羅

【あらすじ】

ハブられないために皆と同じように流れてゆく女の子、明。彼女は素行の悪いいわゆる『不良』の里恵を少し尊敬していた。里恵の幼なじみの優等生の直史は言う、「あいつ、本当はいい奴なんだぜ」。そして里恵の大人しくて真面目そうな友達、斐羅の隠された事実とは。恋愛、友情、受験、いじめ、不登校……中学三年生の一年間の物語。

第1章 流れてゆく。

流れてゆく。

皆と同じことをして、流れに取り残されないようにしばしば自分を偽って。こんな生活心底嫌なのに、結局皆と同じように流れてゆく。不可抗力だ、と明は思った。そうだ、これは不可抗力。クラス替えて騒然とした新しい教室の中、そんなことを考えていた。こんな風に思っていたのは、おそらくずっと前からだろう。

「スマイリーとまた同じクラスだねー」

休み時間、ナツキは明の机に寄ってくると満面の笑顔で言った。スマイリーというのは明のあだ名だ。名字の『えがわ』と『笑顔』をかけて、そう呼ばれるようになった。

「だね。良かった、知ってる人がいて」

「うんうん、あ、そうだ。紀子！」

ナツキが後ろに向かって手招きをする。すると、ショートヘアの肉付きの豊かな少女が嬉しそうな顔をして寄ってきた。これが紀子か。

「うちの友達」

ナツキが紹介する。

「えっと、江川さんだよ。確か去年の合唱祭で指揮やってた」
「うん」

うなずきながら、明は頭の中で必死に紀子の名字を思い出そうと
していた。見たことはある、目立つ体型だし。でも、どうしても名
字が出てこない。

「ね、早速なんだけど多分明日頃に係決めするじゃん？で、うちら
一緒に係に手挙げようよ」

ナツキが目を丸くしながら提案すると、明と紀子は

「そうだね」
「うん」

と快く了解した。知らない人と同じ係をやるのは嫌だったので明
は嬉しかった。

でも、ああこれでグループが固まるんだなと思う。去年は違うグ
ループに属していたナツキが寄ってきた時点で明は確信していた。
紀子だってほら、こんなに嬉しそう。今日までまったく親しくない
者達と同じグループなんて、異質なようで普通なのだ、学校という
ものは。もし、グループからはみ出したりしてしまったら二度と入
れない。どこのグループにも。

自分は大丈夫だ。はみ出さないコツを、これまでの学校生活の中
で明は身に付けていた。

「今井さん、同じクラスなんだよね」

明がぼそつと言うと、ナツキと紀子の目が輝いた。

「そうなんだよねえ」

「そうそうあの人が、結構ヤバイことしてるらしいよー。由紀達が学校サボって遊んでる時に見たんだって、あの人がオジサンと二人つきりで話してるの」

「マジで？ それってもしかして援助交際ぽくない？」

と、機関銃のごとく二人はまくし立てた。明も一緒に驚いたりしてみせる。こういう話題を提供してやると、お喋りは一気に色気立つ。そして、一人一人が自分と同じことを思っていたんだと喜び、結束力が高まってゆく。分かっていた。

「あの人ってギャル系の由紀達と違ってノリ悪いんだよね。何かイヤ」

紀子が大きさに眉をひそめる。分かる分かる、と明とナツキは口を揃えた。すると紀子は安心した顔付きになる。もし、二人と考えが違っていたら致命的だからだ。考えが異なる人は次々とグループからはみ出す運命にある。

だから、私今井さんのこと少し尊敬するんだよね、他のそういう人と違って一人で頑張っている感じだから。とは、口が裂けても言えるはずがなかった。

今井さんは、始業式の日なのに学校に来ていない。

そして今日も流れてゆく。明るい女の子『スマイリー』を演じながら。

第2章 今井里恵。

今井里恵。それが彼女のフルネームだった。垂らしたままの肩にかかる長さ髪は茶色く、スカートは他の生徒より短い。細かく挙げるとYシャツの裾だつてスカートの外に出しているし、上履きのかかとは踏みつぶして履いている。見た目、コワイ人。

そういう外見をしている女子達のことを指すのに、皆はギャル系という言葉を用いていた。ただの不良じゃないか？ と明は内心思っていたが、ギャル系には真面目な人もいるし、クラスを盛り上げたりして多くの人に好かれるギャル系もいるので、そう呼ぶことは避けているらしい。

ギャル系の子達は好き。でも今井さんはイマイチ。

ナツキと紀子はそう言っていた。それは分かる。里恵と話したことはないが、楽しい会話になるとはあまり思えない。

ギャル系 例えば由紀と話していると面白い。もっとも、ギャル系が苦手な人は里恵も由紀も同じだろうけど。

里恵は、始業式から三日後に登校してきた。まだ名前の順の席順なので里恵は明の一つ前の席だ。これは、キツイなあ。そう思いながらも、明は元来人見知りをしないたちだ、なので朝学活の前に話しかけてみた。

「あの、今井さん」

席についたばかりの里恵はいぶかしげに振り向く。

「私、江川明っていうんだけど、よろしくね」

「うん」

えくぼを浮かばせて言うと、里恵も口元をほころばせた。どんな反応をされるかドキドキしていたので、笑ってくれたことが嬉しくて明は更に話しかけた。

「あ、私のこと知ってる？」

「知らない」

今度はにこりともせずと言われた。明は心なしか緊張する。

「去年合唱祭で四組の指揮をしてただけど……覚えてないよねえ」

紀子も覚えていたことを口にしてみたが、言うてからこれは失敗したと思った。だって里恵は、あまり学校に来ていないのだ。声はだんだん小さくなる。

「アタシ、行ってないし」

口の中が苦くなった気がした。それでも明は笑顔を顔面に貼り付けて

「そっか」

と明るい声色で返す。

その時、教室の一角でどつと笑いが起こった。明と里恵は笑いのあがった方を向く。そこには、後ろにある生徒用ロッカーの前で不自然な格好をして倒れている一人の男子生徒がいた。うずくまってるようだが右足と右手は伸びている、そんな格好。彼の周りには数人の男子達が立って馬鹿笑いをしていた。明は倒れている男子生徒が誰だかすぐに分かった。あの、マッシュルームのようなお洒落のかけらもない髪型。クボタだ。

「お前、馬鹿じゃねえの？」

なおも笑いがおさまらない様子で、ジャージ姿の杉沢という男子が言った。

「何もないところで、そんな派手にすっ転ぶなんてさあ。カッコわるい」

その言葉に、ただ見ていただけの女子もくすくすと笑い出した。しかし明は、杉沢の言葉よりも、更にはクボタがむくりと起き上がったことよりも、ジャージのズボンを下げすぎて履いているせいでちらりと見える杉沢の下着が気になっていた。

青地に黒いペンキで落書きしたかのような模様。みつともない、そう思っているのに初めて見る同級生の男子の下着から目を離せない。段々とそれをじっと見ている自分が恥ずかしくなって目をそらした。

クボタはもう立ち上がっていた。可哀想なほどに顔を真っ赤にして。そして足早に一番前の自分の席についた。ナツキと紀子の様子をちらりと窺うと、二人とも同じように忍び笑いを浮かべている。

しかし明は笑えなかった。どうしてみんな笑えるんだろう？ 理解し難かった。

「ばっかみたい」

里恵がつぶやいた。明は思わず彼女に顔を向ける。里恵は杉沢に冷やかな視線を向けていた。そして教室全体を一瞥した後、

「ばっかみたい。クラスの奴全員」

「えっ」

明は驚いてみせたが、本当はうなずきたい気持ちだった。これが今井さんなんだ。自分というものを強くもっていて、私が密かに尊敬する今井さん。嬉しさが身体の中を駆け巡る。

チャイムが鳴り、担任が出欠をとり始めても胸が熱くなるような興奮はおさまらなかった。

第3章 くずだらけの空間。

「クボタには本当笑わされたねー」

「あんなダイナミックな転び方、紀子でも真似できないよね」

「ちょ、それどういう意味ー？」

紀子はわざとらしく頬を膨らませた。それを見てナツキが笑う姿に明は寒気を覚えた。そんな風に演じ合って、馬鹿みたいだ。けど自分だって人当たりの良い明るい女の子を演じている、他人からどう見られているのかと考え出すと怖くなった。でも明は言う。

「クボタって目が細いから、視野が狭くて見えなかったんじゃない？」

「あ、そっか！ スマイリー頭良いじゃん」

あはは、とナツキと紀子は笑った。結局明は、笑いをとるために彼を使っている。こんな自分が一番嫌なのに、どうしてもやめることができない。窓際にある紀子の机に手をつくると、窓から溢れる春の陽光で温もりを帯びていた。窓辺に立つナツキと紀子の髪の毛はいつもより茶色く見える。この儂げな感じが明の心に深く食い込んだ。この光景を大事にしよう、そう自分に言い聞かせた。

「今更だけど、今井さん、今日学校に来たね」

ナツキが里恵の空いた席を見つめて言った。

「来なくていいのに」

紀子が低い声でつぶやく。彼女はナツキと目を合わせ、くすつと笑った。悪寒のようなものが背中に走る。明は何も言わずに窓をにらんで爪を噛む。初めて、本当の『悪意』が里恵に向けられた瞬間だった。

自分はまた今井さんの悪口を言ったり聞いたりしなければならぬんだ、そう思うとどうしようもない無力感に襲われた。

絵の具のにおいが鼻をつく。美術室、ここが明の班に割り当てられた掃除場所だ。同じ班の里恵は気だるげにごみを掃く。明の持ちたちりとりにごみが入れられてゆく。まだほこりがちりとりに沿って線のように残っていたが、里恵は何気無い素振りではこりを上履きでこすった。

「あとは男子が雑巾かけるんだよ」

里恵はぶっきらぼうな口調で言った。男子達は少し不満気な顔をしながらも、無言で床を拭き始める。

教室に戻ろうとして背中を向けた里恵を明は呼び止めた。

「何？」

不機嫌そうに振り向く。そんなきつい目つきを向けられるとたじろいでしまう。

「うーんと」

話題くらい考えとけよ！ と明は自分を叱った。視線を宙に漂わせていると、ふと思いついた。

「今井さん、高校どこ行くの？」

明はにこにこして尋ねた。男子達のぞうきんをかける手が止まっていることからして、聞き耳をたてているのだろうと思った。里恵は明に身体を向け、目を見据えて言い放った。

「こんなくずだらけの空間をまた三年間過ごすなんて、ただの時間の無駄だ。それでも行こうとする奴は、よほどのくずか低能だね」

明は思わず息をのんだ。男子達も驚いて里恵を見つめている。

「ちょっと、廊下に出て話そう」

里恵は言い捨てると、乱暴に戸を開けた。慌てて明もついてゆく。

「何か言いたいことある？」

里恵は壁にもたれ髪の毛先をいじりながら尋ねた。

「ある」

「何？」

「人を馬鹿にして、そんなに楽しいの？」

明は里恵をにらんだ。高校に進学しようとするもの全員を、里恵はののしつたのだから明は怒りを覚えていた。そしてののしられたことよりも、里恵には他人の悪口などを言わない、そんな人दैいてほしかった。明は何だか裏切られた気持ちでいっぱいだった。

「馬鹿になんてしてないよ。眞実を言っただけさ」

「今井さんみたい人には、友達と学校を過ごすことの楽しさとか分からないだけじゃないの」

「アタシみたい人って？」

里恵は明をまっすぐ見つめた。ナツキから聞いた援助交際疑惑が頭をよぎる。しかし口に出すことはせず、負けじと見つめ返す。

「だいたい、江川さんは楽しいの？」

里恵が質問してきた。うっすらと笑みを浮かべている。何だか馬鹿にされているようだと思った。

「楽しいよ」

でも、正直疲れる。という言葉は飲み込んだ。ここで肯定したら負けだ。

「じゃあ何でアタシに構うんだよ」

明は答えられなかった。密かに尊敬していたということを口に出したら、彼女の思考を肯定することになる。

「江川さんなら、と思ったのにな」

里恵はそう言い残し、くるりと背中を向けてその場を立ち去った。もう、明には引き留める気力も残っていなかった。

「惨敗、お疲れ様」

後ろからいきなり声をかけられた。ゆっくりと振り向くと、そこにいたのは、同じ班の和泉直史いすみなおふみだった。背が異常に高く、目もとでも大きいから明はよく覚えていた。

「……見てたの？」

「いや、聞いてた。つーか、聞こえた」

直史のさわやかな笑顔が恨めしい。すると直史は真剣な顔になり、言った。

「あいつ、本当は良い奴なんだぜ」

一瞬、周りの音が全てなくなったような気がした。

第4章 和泉直史。

「俺、小三の時からずっと同じクラスなんだよ。あいつと。家もかなり近い。結構優しい奴だった。中学生になってからだな、あなっただのは」

明は、里恵の幼い頃の姿を思い浮かべてみた。黄色い通学帽をかぶり、髪の毛の黒い彼女。しかしそれは、果てしなく今の姿からは想像出来ず、そして控えめに聞いてみた。

「……好きなの？」

直史は一瞬驚いた表情になり、すぐに弾けたように笑い出した。

「江川、幼なじみの男女だからって幻想を抱いちゃいけないよ。あいつは、恋愛対象外だな、俺とタイプが違いすぎる」

それは納得だ。直史は過去に学級委員をを務めていたこともある、気さくでみんなからも好かれていた男の子だった。

「それで、今井さんは何であんな風になっちゃったの？」

「江川、それは間違っているよ」

「え？」

耳にかけた髪の毛がぱらりと落ちた。

「口も素行も悪くなったし、決して見た目の印象も良くない。でも、あいつはあれで良かったんだ」

「……和泉の言ってること、分からないよ」
「分かるのは今井だけだと思っな、俺は」

意味の分からないつばやきを残し、直史は教室へ戻ってゆく。薄暗い廊下には明だけが残された。もうみんな何を考えているのか分からないよ、何だか泣き出しそうな気持ちになった。

「あ、スマイリー！ 今井さんがひどいこと言っただって？」

教室に戻るなり、目を大きく見開いたナツキが聞いてきた。

「ひどいこと？」

「掃除の時間だよ！ くずだらけとか高校に行くのは低脳だとか言っただけ聞いたけど。紀子なんか泣いちゃってるんだから！」

最後の方は小声で言った。明は机に突っ伏している紀子を視界にとらえた。どうして紀子が泣く必要があるのか明には分からなかった。呆気にとられる明をよそに、ナツキは紀子に歩み寄り背中に手をあてて、

「大丈夫だよ、うちは紀子の気持ち分かってるから。ほら、他の人に泣いているのがバレちゃうよ？」

紀子のはつとして顔をあげた。少し鼻は赤くなっていたが、もう涙は出ていない。明も紀子に近寄り、優しい声色を作る。

「大丈夫？」

「うん」

紀子は小さくうなずく。里恵の発言の何が彼女を涙へと走らせたのか尋ねようとすると、ナツキが口を開いた。

「仕方ないよね、紀子はとっても頭が良いから。あんな頭からっほの人にくずだとか高校に行く奴は低脳だとか言われたら傷つくよね」

すると紀子は救われたような表情になり、

「だよね！ 何で私がくずなんて言われなきゃいけないのか分からないよ……」

と言った。おいおい、別に紀子ちゃんが名指しで言われた訳じゃないでしょう、と思わずつつこみを入れたくなった。デリケート？

違う、これは。

「スマイリー、ちょっと一緒にトイレ行こう」

ナツキの顔は険しくて、嫌と言える雰囲気ではなかった。

「ナルシスト」

廊下に出るなり、ナツキがつぶやいた。それはさっき自分が思ったことだ。何も言わないでいると、

「『だよね！』って何なの？ 自分のこと完璧だとか思っちゃっているのかなあ」

明は即座に理解した。紀子はとっても頭が良いから、と言われてあっさりと肯定したことがナツキは氣にくわないのだ。きつと『そ

んなことないよ、ナツキの方が頭良いつて』みたいな返答を期待していたのだろう。」

「うちの方が紀子よりは頭良いと思うんだけど、どう思う？」

そんなこと口に出さずに心に閉まっておけよ、と明は心の中で毒づいた。しかし無理に笑って言うてあげる。

「私、紀子ちゃんのことまだよく知らないからなあ。でも、ナツキはすごく頭良いと思うよ」

「だよー！」

ナツキは大げさに喜び、さすがスマイリー、ありがとね、と笑顔で明の背中を叩いた。そして何事もなかったかのように本当にトイレに行った。場所は違うものの、また明は置き去りだ。自分では気づいていないんだろうな、紀子ちゃんと同じ言葉を口走ってたこと。思わずため息がもれる。

その時、どこからか物が割れるような音が鳴り響いた。

第5章 ……落ちてるよ。

教室にいた生徒達が驚き顔で廊下へ出てくる。ざわめきが廊下を支配し、やがて右に向かう生徒、左に向かう生徒。まるで避難訓練をしているときのようだ。明はその場から動けなかった。今の音何なのー？ と甘ったるい声で紀子が話しかけてくる。明は紀子の方は見ずに首を振った。ナツキが人ごみをかき分け、無事トイレから戻ってくる。

「きつとヤバイよ！」

と言い出した。落ち着きのない様子で、瞳をせわしく動かしている。主観性のない言葉だが、明は何となく分かるような気がした。ただ事じゃあ、ない。

突如、悲鳴がほとばしる。

明の心臓が縮み上がった。悲鳴は下の階からだ。生徒達は一瞬固まり、内心いつもと違う日常にわくわくしていたであろう人達も青ざめてゆく。金切り声の余韻が止んだ頃、男子数人が見に行く、その後。恐怖を覚え、床にぺたりと座り込む女子。奇妙な静かさをもったその空気に明は息苦しさを覚えた。しゃがみ込んだ紀子が明のスカート裾を握っていた。その手は小刻みに震えている。もしも振り払ったら、彼女はどんな顔をするだろうか？

見に行つた男子の何人が走つてくるのがうかがえた。意外にも、その中の一人は直史だった。みんな、彼らの言葉を待っている。一瞬、ざわめきが止んだ。一番早くこちらに着いた男子が息を切らせながら、

「ヤベえ……窓突き破つて、……落ちてるよ」

と、とぎれとぎれに言った。明の身体が熱くなった。自分は今動揺している、だってこんなにも身体が火照っているのに、乾き始めた汗で背筋は冷たい。ああ、嫌な汗だ。鳴り響いた音と悲鳴の真相を知る人達の声は、ばらばらに喋り出す生徒に紛れてもう聞こえない。

でも、そんな、落ちているだなんて。とにかく、知っている人でなかったらいい、願うのはそればかりだ。紀子はパニックで泣き出している。先ほどまでは『頭がとっても良い』彼女が弱さを見せる度に皮肉を言いたくなる明だったが、今はさらさらない。

落ちているだなんて。

その内、見に行く人が多数現れた。見たいというナツキに明はついて行くことにした。何があつたのか、明も知りたかつたのだ。

「嫌だ、そんなの見たくないよお」

と泣き顔でぐずる紀子は置いてゆくことにした。この頃には教師も来ていて、じっとしているように言っているが混乱したこの状況では効力をなさなかつた。

早足で階段を降り、三階。すぐそこに、その光景はあった。一年一組の教室の前に、小さな人ばかりが出来ている。割れた窓ガラスの破片にこびり付く血、人と人との間から見えたのはそれだけだった。ナツキは手前の窓から下を見た。目を大きく見開いて、声にならない悲鳴を上げる。

「何が見えた？」

「見てみたら分かるよ」

見るのが怖いから聞いているのに。そう思いながらも、唾をごくくと飲み込んで窓から下の方をのぞき込む。その光景に、明は思わず顔を歪めた。せめて、うつ伏せで着地してくれればいいものを。無駄に視力の良い自分を今だけは恨んだ。

男子だ。大柄な体型で、ジャージの色からして三年生。左足が変な方向に折れ曲がっている。生きているのかは判断できない。緑色のジャージのズボンのウエスト部分から、鮮やかな青が見えていた。嫌な予感が明の頭をよぎった。

「ナツキ、落ちた人って誰だか分かる？」

「分からない、うち、目悪いし」

人だかりの中から聞こえてきた声に、愕然とする一方やっぱりなという思いがあった。

「落ちたの、杉沢なんだったな」

第6章 青ざめた顔。

ナツキは詳しいことを聞き出す為に人だかりに寄っていった。明はもう一度窓の下を見る。

正直、杉沢のことは好きではなかった。問題はよく起こすし、口も悪いし。同じクラスになったのは初めてだった。

なのに、苦しい。

本当は良いところもあつたのではないかとか、そんなことを考え始め、いやいやまだ死んでいるとは限らないぞと思ひ直す。その内何故か気持ちが悪くなつてきて、人のいない所に行けば少しは落ち着くのではないかと思ひ、トイレへ行くことにした。

うつむいたまま人だかりの横を過ぎ去り、しばらく進むと左側にぼつかりと空いた二つの空間があつた。女子トイレ、と書かれた方へ入ろうとする。しかし、明の歩みは入り口で止まった。トイレの中にある手洗い所にある誰かの影。手に水をくみ、顔を洗っている。明は隠れるように入り口からその様子を窺った。心臓が高鳴っているのが自分でも分かる。

その誰かは頭上にある棚へ手を伸ばし、新品のトイレットペーパーを取り出した。そして何ロールか手に巻き取ると、ブレザーを強くこすり始める。使ったトイレットペーパーは紅く染まっていた。明の顔がこわばる。新しくトイレットペーパーを巻き取り、次はスカート裾を持って拭きだした。やはり紅くなっている。そして、汚れたそれらを流そうとトイレの個室まで歩いてゆく。

その際、顔が見えた。
真っ青な顔色をした彼女。

うつろな目で、明の姿に気付いていないところからして周りが見えていないようだ。耳元で心臓の鼓動が聞こえる。見てはいけないものを見てしまった気がした。浴びていた血は、きつと杉沢のものだろう。事が起きたとき現場にいた者でなければ、制服に血が付着するはずがない。それは、何を意味するのか。

明は大きく息をはいた。ナツキの元へ戻ろう。とにかく、人がいる所へ。何も考えたらいけない。そう思い、明はきびすを返した。

トイレには、今井里恵だけが残された。

杉沢は生きていた。複雑骨折などで全治四ヶ月の怪我を負い、しばらくの間入院することになったがそれでも命に別状がないだけまじだった。打ち所が悪くなかったことと、彼の身体の柔らかさが幸いしたらしい。何故、あんなことになったのか。大体のことを明は耳にしていた。

『何か他の男子とふざけて遊んでいたら、あんなことになっちゃったらしいよ』

しかし明は納得がいかなかった。話の中に里恵の名前は全く出てこない。しかし、あれ以来彼女が学校に出てこないのが気にかかった。いつものことだと皆は思い特に気にしていないみたいだが、トイレでの彼女の青ざめた顔が頭から離れない。今井さん、どう

しているだろう。そんな矢先だった、直史が話し掛けてきたのは。

第7章 小さなシャープペンシル。

「…何？」

「放課後、あいてるか」

掃除の時間。辺りには誰もいない、二人きりだ。明は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、

「えっ、もしやあれ？ よく少女漫画で見る、『放課後、中庭に来てください』とかいう……」

「馬鹿、違うに決まってるだろ。大事な話があるんだよ」

直史は呆れた様子で笑った。

「だから大事な話っていうのは……」

にらまれた。「冗談が過ぎたと思い、明は口を閉じる。

「部活、何入っているんだっけ」

「吹奏楽」

「悪いけど今日は休んでくれ」

「ええー」

明は不服の声を上げた。だって、コンクールが近かったのだ。引退前の、最後のコンクール。だから少しでも多く練習をしておきたかったのに。

「部活終わってからじゃ遅くなるし、人も多いから変な噂立てられ

たら困るだろ。それに　今井の話なんだ」

はっとして直史の顔を見た。いつもより真剣な顔、そして里恵の話。明は首を縦に振った。

放課後、直史の数メートル後を明は歩いていた。校舎の中で二人きりだと、もし同級生に目撃されたら誤解を生んでしまう。なのでとりあえず公園で話そうと言うことになった。

「ねえ、まだ？」

直史の背中に声をかけた。もう十分以上歩いているような気がする。

「ここを右に曲がればすぐだよ。　ほら、見えてきた」

ブランコとジャングルジム程度の遊具しか置いていない、小さな公園が少し先にあった。

「ちっちゃ！　てか、誰もいないじゃん」

「穴場だぜ。独りになりたい時とかに使えるし」

そう笑って公園に入ってゆく直史に、明も続く。

「ブランコに乗るの久しぶりだなあ」

地面を蹴り、少しだけこいでみる。手に握る鎖はひんやりとしていた。直史は隣のブランコに座り、雲一つない空を仰いでいる。

「で、今井さんの話って？」

彼の方を向く。少しの間、沈黙があった。

「……杉沢の事故、あっただろ。それで、俺見に行ったじゃん」

明はうなずいた。

「それで、そこに……これが落ちていたんだよ」

おもむろにブレザーのポケットから何かを取り出した。明に見えるよう、ゆっくりと手を開く。

手に握られていたのは、動物の足跡の絵がプリントされた、小さなシャープペンシルだった。

「シャープペン……だよねえ」

十センチメートルくらいの、持ち歩きが便利そうな黄色を基調としたシャープペン。いかにも女の子が好みそうなものだ。

「これ、今井の物なんだ」

ぎょっとした。どうしてそんな物が落ちているのだろうか。

「何で、今井さんの物だって言い切れるの？」

心の底では里恵のことを怪訝に思っているのに、いざ真実を知るのは怖かった。心に重いものがのしかかる。

「見たことがあるんだよ。あいつが持っていたの。ほら、そういうの使ってる女子は少ないから、印象に残ってた」

直史は早口で説明した。

「とりあえず、返しに行こうと思う」

「え、今井さんに、」

驚いて言ったので途中でせき込んだ。直史はブランコから立ち上がり、前を向いて言った。

「このままだと、あらぬ疑いまで持つてしまう。だから、本人に真相を確かめるのが一番良いと思うんだ」

和泉は、今井さんを一人の人間として気にしているんだ、と明は少し感動した。自分は彼女を疑うばかりで、何もしようと思わなかった。

「そうだよ。……私もついて行っていい？」

言うてから恥ずかしくなった。自分は直史と親しい間柄ではない。その点、里恵と直史は幼なじみだ。なのに、ついて行っていい？ だなんて何を考えているのだ。しかし彼は振り向いて言う。

「もちろん。その為に、江川にこの話をしたんだ」

名前を呼ばれて明の顔の赤みが増した。直史は男子なんだ、今更

らしく意識する。

「何で、私だったの？」

「そりゃあ、友達には言えないし、他の女子には疎まれているだろ？」

確かにそうだ。

「じゃあ、ここから歩いて二、三分だから」

そして直史は歩き出す。明はジャンプしてブランコから飛び下り、彼の背中を追いかけた。

第8章 屋上。

少し歩くと、十階建ての立派なマンションが見えてきた。

「ほら、あそこだよ。俺んちの下の階にあいつの部屋があるんだ」

「へえー。いいなあ、大きくて。……もしかして、杉沢の家って金持ち!？」

「馬鹿、ローンだよ」

直史が真面目な顔をして言い返すので、思わず明は吹き出した。マンションに入ると、直史はオートロックを解除するための部屋番号を入力する機械にある鍵穴に、制服から取り出した鍵を差し込んだ。ドアがすうっと開く。明は彼の後を付いてゆく。

「ここだ」

直史が立ち止まった部屋の表札には『I M A I』と書かれていた。すぐ隣にある格子のついた窓には、里恵の物と思われる青色の傘が掛かっている。生活感を漂わせる光景を見せつけられて、彼女も家族の元で育った一人の人間だという当たり前のことに今初めて気付かされた。

直史は少しも躊躇せず呼び鈴を押した。明は緊張した面持ちで制服のリボンを正す。しばらくしてドア開かれ、顔を覗かせたのは茶色い髪を一つに束ねた三十代後半と見られる女性だった。

「あら、なおくん？ 久しぶりだねえ」

女性は、目尻に細かいしわの刻まれた目を細めた。この人が母親か。意外と普通の人だ。

「そうですね。あの、里恵はいますか？」

明は愛想笑いを浮かべる直史に視線を向けた。彼女の名前を呼び捨てするなんて、と驚いたからだ。「ごめんねえ、今いないのよ。どこへ行ったんだか」

と、すまなそうな顔をする。そうですね分かりました、と直史は言い帰る様子を見せたので明は彼の後ろで軽く頭を下げた。

「どこに行くの？」

マンションのエレベーターに乗り込む直史。返事が返ってこないで、仕方なく明もエレベーターに乗る。直史は『10』と書かれたボタンを押した。

「何しに行くの？」

「屋上だ」

短く答える。屋上に何しに行くの？ と聞きたくなかったが、エレベーターはどんどん上昇して行き、既に五階を過ぎたので着けば分かることだと思いい何も言わなかった。

上昇する時特有の、耳鳴りが止まった。エレベーターは一瞬がくんと揺れ、その後ゆっくりと扉が開いた。直史は降りるとまっすぐ階段の方へ向かい、屋上へと上ってゆく。明は黙って彼の後を付いていった。上り終わると、上部が曇りガラスになったドアが現れる。直史がドアノブを回すとギイッと音が鳴った。

屋上に入ってゆくと、里恵の後ろ姿が明の目に入った。

ラフな普通の格好だ。灰色のパーカーに長めのGパン。落下防止の柵に組んだ両手を乗せている。足音で気付いたのか、里恵は振り向く。明と直史の姿をとらえると予想していなかったのだろう、驚いた顔になった。里恵のすぐ目の前まで歩いてゆくと、直史は

「よっ」

と軽く右手を上げた。里恵は明のことをちらっと見たが、彼に向き直り不機嫌そうな顔で言う。

「何でいるの」

「お前に用があつた」

すると里恵は鼻で笑つた。

太陽の下、彼女の目の下に出来た青黒いくまが目立っていた。あまり健康そうには見えない。その姿が色々と無理しているように思え、明はつい声をかける。

「今井さん、」

言うてからしまった、と思つた。また、話の内容を考えていない。「あの、怪我はしなかつた？」

言葉が口をついて出て来た。里恵は明を見つめ自嘲気味に笑う。

「なーんだ、見られちゃつたのか」

失言した、と思った。彼女の、あの血を浴びた姿を見てなければ
言えないことだ。明がうるたえていると、

「あの血は、確かに杉沢の物だよ。しばらくして野次馬しに行った
時、ふとした拍子に付いちやったからトイレで拭いたのさ。ただ、
それだけ。他は何もないよ」

そのことを知らない直史にも分かるように詳しく喋った。

「お前に、渡したいものがある」

ちょうど良いタイミングだと思ったのか、直史は口火を切った。
明が横目で見ると、彼は既にあのシャーペンを後ろに握っている。

「何？」

「杉沢が落ちた場所に、これが落ちていたんだ」

里恵に見えるように手を開く。それがすっかりと見えるようにな
った時、里恵の顔色が変わった。

第9章 他人同士。

直史の手にあるシャーペンを無言で見ている里恵の目は、大きく見開かれていた。怯えているように見える。

「なあ、教えてくれよ。どうして今井のシャーペンがあそこに落ちていたんだ？ 野次馬、っていうのは嘘だよな。だって、それならすぐ気付いて拾うはずだ。移動教室もないのに筆箱から落ちた、っていうのも有り得ない。多分制服のポケットから落ちたんだろう。よほど急いでなければ、落ちることはない、そうだよな？ 今井」

直史はさすがのような目つきで里恵を見ていた。里恵は足元に視線を落とし何か言おうと口を開くが、返す言葉が見つからなかったのだろう、再び口を閉じた。直史は無理矢理里恵の手にシャーペンを握らせた。

里恵は無言でシャーペンを目線の位置まで持ってきてまっすぐと見つめる。明は戸惑って何も言えなかったし、何も考えられなかった。隣の直史の顔をうかがうと、切実な眼差しを里恵に向けていて、やはり否定してほしかったのだろう、本人の口から。

「疑っている訳じゃないんだよ。ただ、今井の口から真実を語ってほしいんだ。ちゃんと、説明してほしいんだ。事故が起きた時、今井は杉沢のそばにいた。違うか？」

里恵は顔を上げる。直史と目が合うと、切羽詰まった顔から一変、観念したかのようなあきらめの表情になった。

「そつだよ」

うなるような声で認める。

「でも」

すつと息を吸うと、一息で言った。

「アタシは杉沢を落としたりなんかしてにいない。あの事故と関係ないのかついたら嘘になるけど、何もやっていないんだ」

明は無言で彼女を見つめる。里恵と直史は小さい頃から知っている、きつと仲も良かったのだろう。自分が発言するところではない、そう思っていた。

「そつか」

直史が言った。

「分かった。じゃあ、これ以上は何も聞かない」

明はびっくりした。まだ、分からないことはたくさんある、なのにこれで終わり？ そんな宙ぶらりんの状態でいいというのか。

「うん」

里恵が小さく言っ。

「帰ろう、江川」

明は曖昧にうなずいた。

「じゃあな」

と直史が短く言い里恵に背中を向けたので、明は慌てて彼女に

「またね」

と声をかけて彼についてゆく。その時、後ろから里恵に声をかけられた。

「ねえ！」

明と直史は振り向く。

「……また、来てくれる」

明は一瞬嬉しくなったが、すぐに自分に言ったのではないと思いき直す。和泉に言ったんだろっな。そう思うとちよっぴり哀しくなる。

「江川さんもさ」

里恵は白い歯を見せる。どういう意味なのか理解したとき、明はすごく嬉しくなった。だから満面の笑みを浮かべ、思い切りうなずいた。

「ここから帰れるか？」

「大丈夫、ほとんど一本道のようなものだし」

エレベーターを降りた一階のフロアで、直史は明に言う。

「どうもな、付き合ってくれて」

「うん。でも……和泉は気にならないの？ 本当のことが」

自分は気になる。昔から、知らないことがあると明は不安になるのだ。直史は宙を見つめながら、

「そりゃ、気になるよ。でも、今井は何もしていないって言うし、信じてるから。あいつのこと」

と言い切った。そろそろ帰ろうとした時、直史は表情を曇らせてぼつりと言った。

「何か、あったんだと思うよ。誰にも言いたくないことが」

思いつめた顔で、うん、とうなずく。ただ、何かあったのか分からないと、生ぬるい水のような不安が胸に押し寄せきて、たまらず直史に聞いた。

「和泉は、このままでいいと思ってるの？ 知らないままで」

「俺は逆に、このまま知らない方が良いと思う。というか、知りたくない」

「何で!?!?」

明は思わず大声を出した。

「今井自身が誰にも知られたくないことなんだから、知らない方が幸せだと思うし、聞きたくない。……俺は、あいつの苦しみまで背負いたくはないんだよ」

「そんなのって……」

しかし続く言葉がなかなか出て来なくて明は目を伏せ、コンクリートとの床にある直史の大きなスニーカーをじつとにらむ。里恵を気遣って聞かなかつた訳じゃない、直史は知るのが怖かったんだ。知ってしまったら、彼女が感じたであろう負の感情が自分の心にも流れてきてしまうから。

その内やつと湧き上がって来た感情を表す言葉が見つかり、彼と目を合わせると鋭く言い放った。

「そんなのって、自分勝手だよ……!!」

「そんなものさ。所詮他人だし」

直史がため息まじりに言う。別れの言葉も交わさず、明は逃げるようにマンションを飛び出した。

明日は敵になっっているかも分からない人と喋って、遊んで、それらあまりにも刹那的で無駄なこと、でもそんなものなのかもしれない、と人生に見切りをつけ始めていた明にとって、直史と里恵の関係はある意味衝撃的だったのだ。派閥も何もなく、天真爛漫に遊んでいた子供の頃に知り合った彼と彼女は、例え何十年も話さなくても、深い絆で結ばれていると思っていた、けれど。

「結局、他人同士なんだ」

屋上で見たものと変わらない青い空を仰ぎ見ながら、明はつぶやいた。

第10章 第一回進路希望調査。

杉沢のいない教室は平和だ。問題も起きず、授業も妨害されることなく穏やかに進む。あまり嬉しいことではないが。退院するのはまだまだ先のことだろう。里恵はもう十日以上学校に来ていないし、直史とはあれ以来口をきいていない。もうすぐ五月がやってくる。

「……死んだ」

机にあごを乗せたナツキが先ほど返された数学の答案用紙を見ながらつぶやいた。

「こらこら、まだ死ぬのは早すぎるぞ」

明はおどけて言った。点数はそこだけ紙が折り返されているので分からないが、教師の口から出る正しい答えを書き写した赤字の多さからして、事態は深刻だ。

「気にするなって。ナツキ数学以外は良い点数だし」
「でも内申がなあ……」

明の胸がちくり、と痛んだ。内申、それは受験する高校へ送られる通信簿。

「ナツキ、高校どこ行くの？」
「市立川田、とか出来れば行きたいねえ」

そう言って答案用紙を適当に机の中に入っ込む。明は意外の感に

うたれた。自分の席で提出期限の過ぎたノートにナツキから借りたノートを見て写す紀子に目をやる。

「紀子ちゃんもそこ行きたいって言ってたよねえ」

「そうだった」

今回の実力テストで、ナツキと紀子は五十点以上の差があったらしい。市立川田は普通より少し頭の良い高校だった。紀子はともかく、ナツキはきわどいような気がしたが、口には出さなかった。それにしても紀子は本当に頭が良かったなんて、いつも眠たそうな目をした彼女からは想像が出来ない。前に里恵の言葉で泣き出した時、ナツキが言った『すつごく』というほどではないが。

「スマイリーはどこ行くの？」

頬づえをつきながらナツキが聞く。明は一瞬固まり、返答につまる。ようやく無理に笑みを浮かべ、

「まだ、分からないな」

とだけ答えた。考えていなかった訳ではない。どこにも受からないほど頭が悪い訳でもないと思う。ただ、行きたいところが見つからなかった。高校を卒業し、その後のこともまったく分からなかった。自分はいつたい、どこに行くのだろうか？ そう考える度、先の見えない不安が押し寄せてくる。こっそり直史に視線を移す。笑って男子と話す彼、きつと偏差値の高い高校に行くんだろうな。

明の視線に気付いたのか、ナツキも直史を見ながら言った。

「和泉とかは、どうせ浦高辺りに行くんだろうね」

公立では県内トップの浦吉高校のことだ。頭の良い大学に行つて、給料の良い仕事に就く、まるであらかじめルートが決められているかのような幸せな人生がきつと彼には待っている。羨望と少しばかりの妬みが交じつた眼差しでもう一度直史を見た。

それが配られたのは翌日のことだった。

「進路かー」

『第一回進路希望調査』と書かれたわら半紙を明は見ながら鉛筆を手でもてあそぶ。斜め前に座る直史に目をやると、彼はもう書き始めていた。提出日は三日後だ、その言葉を聞くと明は丁寧に二つに折り、クリアファイルに挟んで机の中にしまった。

提出日前日、担任が言った。

「誰か今井の家を知っている人はいるか？ いたら進路希望調査の紙を届けてやってほしいんだが」

しかし手を挙げるものは誰もいない。直史を見たが、だらんと下げた右手はまったく挙がる様子が見られないので遠慮がちに明は手を挙げた。

掃除の時間、明は直史をつかまえた。

「ねえ、何で手挙げなかったの？」

自分のとがった声が耳につく。

「他の奴の目もあるし、江川はもう行けるだろ？」

他の奴の目って……。明は手に持つほうきで彼の頭を一撃してやりたくなった。

「そんな目で見るとよ。ごめん。でも、無理なんだ」
「もういいよ」

明はそう吐き捨てて直史から離れた。そしてふと気づく。女子にはあんなにはつきり言ったことがないなあ、って。

わずか数日前のことなのに、やけに懐かしく感じる。あの無人の公園や、そびえ立つマンション。今日は一人だから前より緊張する。深呼吸をして呼び鈴を鳴らすと、里恵の母親が出て来た。

「あの、里恵さんと同じクラスの江川ですけど、これを渡すように頼まれて」

進路希望調査の紙を差し出す。しかし母親は受け取らず、

「あら、わざわざありがとねえ。里恵は今自分の部屋にいるから、どっぞ上がって行って」

と言つので明は驚いた。

「いいんですか？」

「直接渡した方がいいでしょう。きっとあの子は呼んでも来ないから。友達が遊びに来てみるみたいだけど」

友達、か。里恵の友達とはどんな人だろう。明は気になった。だから、

「じゃあ上がります」

はつきりとそう告げた。

第11章 安藤斐羅

おじやまします、と言って明は黒いスニーカーを脱いで端に揃えた。両端にダンボールが置かれた狭く薄暗い廊下を、母親の後をついて行く。リビングの手前にあるドアを母親はノックした。

「里恵、入ってもいい？」

返事が返ってくると、彼女はドアを開けて首を入れ、明のことを簡単に説明した。

「入ってどうぞ」

と促され、明はどきどきしながら部屋に入る。里恵は小さなテーブルの前に座っていた。テーブルの上にはコーラが入った二つのコップが置いてあった。そういえば友達の姿がない。

「あの、これを先生に渡すよう頼まれたの」

「あ、後ろ閉めて」

明は慌てて背後のドアを閉めた。

「何の紙？」

そう聞かれたので里恵の元まで歩いてゆき、進路希望調査の紙、と言って差し出した。

「ふうん」

里恵は受け取るとまじまじとその紙を見た。

「いつ提出日？」

「明日」

「江川さんはもう出した？」

「まだ」

明の進路希望調査の紙は空白のままだった。母親にも相談したが、『そんなのお母さんには分からないよ』と言われてしまったのだ。

その時、いきなりドアが開いた。現れたのは、すらっとしたとびつきり肌の白い少女。切れ長の目に長い漆黒の髪。美人だ。淡いメイクもしているだろうか、明は言葉を失った。

「あ……」

少女は戸惑いの色を見せた。明が何か言おうとすると、里恵が説明した。

「この人は、アタシのクラスメイト。先生から頼まれてこれを届けに来てくれたの」

手に持った紙をぴらぴらと揺らした。

「江川です」

明はぺこりとお辞儀する。

「あ、安藤です」

少女が頭を下げると長い髪がさらりと揺れた。彼女の頬は紅潮していた。明はそろそろ帰ることを里恵に告げようとしたが、

「江川さんもコーラ飲む？」

と聞かれた。

「でも……」

「ああ、別に気にしないで。斐羅いぶ、いいよね？」

斐羅と呼ばれた少女はうなずく。だから明は遠慮がちに腰を下ろした。里恵はテーブルに手をつけて立ち上がると、コーラとコップを取りに部屋を出て行く。斐羅は明に一礼すると、テーブルの前に座った。彼女は黒い服に白いGパン、大人っぽい服装だ。

「安藤さんって、何歳なんですか？」

「あ、里恵と同じ年です」

彼女がうつむき加減に答える。高校生かと思っていたので、明は少し驚いて聞いた。

「そうなんですか。え、じゃあどこの中学校？」

「芝山中学校……」

ドアが開き、里恵がコーラの注がれたコップを手に入ってきた。器用に足でドアを閉めると、明の前に、

「はいよ」

とコップを置いた。

「ありがとうー」

両手でコップを持つとぐびぐびと飲む。炭酸がのどを刺激し、明は少し涙ぐんでしまう。

「それで斐羅さあ、本当にいるの？」

「うん。塔のカードも出ていたし、私には見えた。空想の産物かもしれないけど」

「いや、斐羅は能力があると思うから実際にいたんだろうけどさあ、でもやっぱりアタシには信じられないなあ」

「あの、何のお話を……？」

明は目を白黒させながら二人の会話に入り込んだ。

「ああ、アタシの部屋に幽霊がいるかいなかった話」

「この部屋に、ユーレー……？」

「何ですと!?!」

思わず声を出していた。

「ちよっ、そんな怖いこと真面目な顔して討論しないでくださいよ！ 幽霊って、あのヒュードドロドロ……って出るやつでしょ!?!」

言いながら膝をついた体勢で相手に手の甲を見せ両手をぶらぶらと揺らす動作をする。

「江川さんって面白い奴だなあ」

里恵が高らかな笑い声を上げた。実際、明には笑い事どころではなかった。

「安藤さん、幽霊見えるの？」

控えめに笑っていた斐羅は真顔になるとこくんとうなずいた。

「幽霊、今どこにいる？」

明は膝で歩き斐羅に密着する。すると彼女より先に里恵が声を作り答えた。

「後ろにいるよお……」

「やだやだやだ！」

「ほら、髪の毛長い女の子が……」

「里恵、悪ふざけはいけないよ」

あきれた声で斐羅が言った。

「だいたい、髪の毛長い女の子じゃあまるで私じゃない」

「あ、確かに」

「安藤さん、今はいないの？」

明が知りたいのはそれだけだ。斐羅は部屋全体を見渡すと、小さく言った。

「いないと思う」

その言葉に安堵する。急に力が抜け、先ほどの会話を思い出した。

「今井さん、おどかすなんてひどいよー。私本当に幽霊とか苦手な
んだから」

「いいじゃん。夏だし」

「……まだ春です」

「それよりも、そろそろ斐羅から離れたら？」

気が付けば明は斐羅の服の裾をつまんでいた。彼女の髪が明の喉
元をくすぐる。

「あつ、ごめんなさい！」

「ううん」

明はすぐさま斐羅から離れた。彼女の顔面は真っ赤になっていた。
赤面つながらで前教室で派手に転んだ時のクボタを思い出した。そ
れにしても、こんな大人しそうな人が里恵の友達だなんて。斐羅に
ついて知りたいと思った。こんな気持ち、里恵と初めて喋った時以
来だ。

窓を見ると、いつのまにか日没が始まっていた。

第12章 小石は死ぬ。

「直史、どうしてる?」

和泉直史だよ、と言い直されるまで誰のことか分からなかった。彼の顔が浮かび、明は里恵の背後にかけられた黄ばんだ世界地図を見つめた。

「和泉かあ」

複雑な気持ちになる。里恵は、直史のことをどう思っているのだろうか。

「なおくんか」

ぼつりとつぶやいたのは斐羅だった。

「え、和泉のこと知ってるの?」

「だって斐羅とアタシ同じ小学校だったもん」

前髪をかきあげながら里恵が説明する。わざとらしいその仕草、少しだけ彼女を身近に感じた。

「いつから友達なの?」

「小四くらいじゃん」

「そうなんだ……」

幼なじみに入るだろうか、うん、きつと入る。里恵と斐羅が厚い

膜で包まれているようで、明はこの部屋にいるのが少し息苦しくなった。自分とは場違いかもしれない。まるで天井が迫ってきてそう。でも、これだけは聞いておきたかった。先ほどの幽霊議論の中で気になった言葉。

「塔のカード、って何？」

「ああ、タロットカードの話」

さらりと里恵が答えた。明はまだ話が飲み込めない。

「タロットカード？」

「知らない？」

「いや、知ってるけど……」

「そのタロットカードで斐羅がこの部屋について占ったわけ。そして塔のカードが出たんだよ」

「それって、どういう意味を持ったカードなの？」

「さっきから質問ばっかだな」

里恵が歯を見せて笑う。だって、ここは自分の知らない世界なのだ。少し変わったギャル系少女に、見とれてしまうほどの美貌を持った靈感少女。この廃れたような四角い部屋に射し込む夕日陰は里恵が背中さえぎられていて、彼女の顔に出来た陰影がとても美しい。

「塔のカードが持つ意味は、災難や危険とかなんです」

斐羅が不安を帯びた声で言った。テーブルに視線を落としながら髪を手ぐしですいている。明はそうなんだ、としか言えなかった。たかが占い、などと笑い飛ばせる雰囲気ではない。

「大丈夫だよ。アタシは」

「分かってる」

「斐羅は大丈夫？」

「大丈夫」

淡々とした会話。明は心の中でうなる。分からない、つかめない、自分が入ってゆけない。壁にかけてある時計が、聞いたことのあるようなメロディーで六時をまわったことを知らせた。

「あつ、じゃあ私そろそろ帰るね！」

明は明るい声を出す。実際、帰らないといけなかった。腰を上げると里恵もすつと立ち上がり、

「そっか。じゃあ」

「うん。……今井さん、明日は学校来てね」

言った瞬間、彼女の顔に険悪なものが漂った。

「言うなよ。アタシはそういう言葉が大っ嫌いなんだ。もっと考えろよ！斐羅がいるんだし」

とつさに謝ろうとしたが、言葉がのどにつまって出てこない。視界の端に斐羅をとらえる。彼女は背中を向けたまま、微動だにせず。SOS信号を必死に送ったが、振り向くことはなかった。

「……ごめん」

「許さない」

「……っ」

明は言い返そうとしたが、斐羅の手前みつともない、止めておく。里恵に、

「帰る」

と一言言い、背を向ける。ドアノブをひねって廊下へ出る。閉めるために身体の向きを変えた時、ドアの隙間から部屋をちらりと見る。縮こまった斐羅の背中に里恵が手を当てている。何故だろう。湧き上がる疑問を頭の中で整理しながら、明は今井家をあとにした。

明は道端に落ちた小石を蹴る。小石は宙を舞い、やがて道路に飛び出した。一台の車がやってくる。しかし、丁度信号機の近くだったので小石の手前で車はとまった。信号が青になったら、明は横断歩道を渡り、小石は死ぬ。

外はもう薄暗い。煮えたぎった落陽が落ちてゆくその時、明はその部屋で時を過ごした。そしてあの部屋の主を怒らせた。今、里恵は何を思っているのだろう。からすが鳴きながら明の頭上を通り過ぎた。あれほど怒るようなこととは思えなかった。そして冷静になった今疑問に思う言葉、『斐羅もいるんだし』。斐羅の背中に当てた手。つながるようにつながらない。

「あの言葉は安藤さんにも失礼だったのかな」

辺りに誰もいないので声に出してみる。すると余計分らない、明は首をかしげた。今井さんてキレイやすい、のかな。直接怒りの言葉をぶつけられると明は腹ただしいというよりも不安になる。気が付かない内に、怒らせるようなことを自分が言っていたなんて。里恵も結局、自分とは他人同士なのだろうか。直史の言葉がよみがえる。

そこまで考えた時、信号が青に変わった。とまっていた車は排気ガスを吐き出しながら走り出す。タイヤがあの小石を踏み　跳ね上がった。小石は向こう側の歩道に落ちる。

小石は、死ななかった。

第13章 サンキョ。

放課後、教室に残るのは里恵と明、そして担任。無精ひげをはやした担任が椅子に座ったまま、

「進路指導の先生が集計を取らないといけないんだ。だから、明日には提出してもらわないと困るんだよ」

「……分かりました」

もういいや。適当に近くの高校名を書いて提出すればいいじゃないか。明は妥協することにした。しかし、隣に立った里恵は食い下がる。

「だって高校行く気ないし」

「なら就職希望に丸を付けて提出しなさい」

「就職？　しないよ」

里恵がそう言って鼻で笑うと、担任の眉がぴくりと動いた。

「じゃあどうしたいんだ」

担任が机に身を乗り出した。すると里恵はそっぽを向いて何も答えない手段に出たようだ。本当に強いな、この子は。

「とりあえず江川はもう帰って良い。明日は必ず持って来るんだぞ」

あごを触りながら担任は少し困り果てた顔をする。里恵の扱いに悩んでいるらしい、新米教師じゃあるまいしと明は毒づいた。机の

上の通学バッグを持ち、さよーならと挨拶をし教室を出る。振り返ると、担任がぐだぐだと高校へ行かなかつたらどうのこうのと世間論を語りだしたのが目に入り、里恵にはそんなの通じないのと少しだけ笑った。

「そんなならもう部活に来なくていいから！」

部活動のため音楽室の扉を開けると、いきなり怒声が明の耳に飛び込んできた。ピアノの前で、部長が一列に並んだ三人の一年生に對して何やら怒っているらしい。

「ねえ、どうしたの？」

楽器を持ち出しこれから廊下で練習に入るところであろう部員に聞いた。

「何か、うちらへの態度が悪いんだって」

かったるそうに答える。うちら、というのは三年生のことを差す。一、二年は三年生に對して敬意なるものはらわないといけない、それが暗黙のルールだった。明も去年までは敬語はもちろん、部活の先輩を見かける度に頭を下げ、何か言われたら大きくハイと返事をする、そんな日々を送っていた。小さなことで叱られる度、私達は優しい先輩になろうと言ったものだった。その会話には今の部長もいた、なのに。

「だから、先輩に会ったらちゃんと返事をする。分かった？」

大分怒りの冷めた声で部長が言う。涙混じりの小さな返事が二つ

聞こえた。

怒る人もいれば、慰める人もいる。共通するのは酔いしれているのだ、『先輩』という肩書きに。

「元氣出してね」

音楽室を出た一年生に三年生の一人が声をかける。

「部長、性格キツいところあるから」

廊下でチューニングをしていた明は、ちらりと一年生を見ると、彼女達がジャージの裾を折っていることに気が付いた。本校のジャージは、ズボンの裾がすばまっていて何とも格好悪い。だから、折りたい気持ちもよく分かる。しかし、吹奏楽部には決まりがある。ジャージの裾を折らないこと。それは校則でも禁止されているが、無視している人がほとんどで三年生ともなると折らない人を見つける方が難しいのだった。

だが、吹奏楽ではそれがかたくなに受け継がれてきていて、少なくとも部活中に折っているものは皆無。

明は無性に腹が立ってきた。自分は守っているのに、一年生の際でと思ってしまふ。チューニングを再開するがトランペットの音はよく出てくれない。ふと、些細なことに怒る自分が情けなく思えてきた。

「よっ」

部活の帰り道、自動販売機でジュースを買う里恵がいた。思わぬ人の登場に明は驚き、

「今井さん、何でここにいるの!？」

と聞いた。

「ジャスコ行った帰り、のどが渴いたから。こっちだってまさか江川さんがいるとは思わなかったよ」

確かに里恵のすぐ横には自転車がとまっている。彼女は部活に入っていない、しかもこの道の先にはジャスコがあった。

「でも今井さん、ムカついてるんじゃないの」

尖った明の声に、里恵は少し小馬鹿にしたようないつもの笑い方をする。

「ああ、別に。こつちにはこつちの事情があるんだよ。ムカついてなんかいないよ、けどさ」

そこまで言うと里恵は買ったジュースを開けた。プシュツという音が人気のあまりない道に響く。

「ガツコに行ってないやつがそう言われてどういう思いをするのか少しは考えてみたら？ 何もそいつのことを分かっちゃいけないのに、あんな軽薄に『学校来てね』ってさあ」

別に軽い気持ちで言った訳じゃない。しかし、確かに自分は彼女のことをほとんど知らなかった。安藤斐羅という友達がいるという

ことだけ。でも、今日学校に来てくれたこと、それが明には嬉しかった。これも口に出したらきつと怒られる。だから、誰にも聞かないよう、

「サンキユ」

とつぶやいた。ちょっとだけ、里恵口調で。

第14章 パーリン。

「江川さん」

顔を上げるといきなり缶が飛んできた。とっさに目をつぶりながらも、どうにかキャッチする。それは、りんごジュースだった。しかも、まだ未封の。

「やるよ」

里恵は自分のジュースを一口飲んでにこりと笑った。

「あ、ありがとう」

戸惑いながら缶のラベルに目を通す。

「賞味期限は切れてないから安心しなよ。たった今買ったやつだし」「そついう訳じゃないけど」

すると、このジュースはわざわざ自分のために買ってくれたのだろうか。里恵を愛おしく想う気持ちが明の心に広がる。明は上を向いて一気に飲む。冷たい液体がのどを通り胃に落ちるのをしっかりと感じた。

「江川さんてさあ」

後ろにある自転車のハンドルに手をかけて言う。

「バージンなの？」

明はむせかえった。水が入ったときのように鼻が痛くなる。

「ちょっと、いきなり何言うの！」

なおも咳き込みながらポケットティッシュを取り出して口を拭いた。

「あ、意味通じた？」

「当たり前だよ」

里恵は悪気のなさそうに、

「いや、もう中三だし彼氏とかいるのになって」

「だからって何故そこから聞く！」

まるでコントのようだ、と明は思った。にじみ出た涙も拭き取ると、ティッシュを丸めて自動販売機の横にあるごみ箱めがけて放り投げた。

ゴール。

「まだに決まってるよ」

言いながら顔が火照っているのを感じた。今井さんは？ と聞くほどの勇気は持ち合わせていなかった。だって、援助交際疑惑は晴れていないから。

「何だ」

里恵も飲み終わった缶をゴミ箱にぽいと投げ入れて笑った。

「斐羅、人見知り激しいんだよね」

「みたいだね」

斐羅の赤くなつた顔を思い出す。彼女は赤面性の気があるのかも
しれない。

「美人だよなあ」

そう呟くと、里恵はブレザーのポケットに手を入れて、

「でも、昔はダチに『目が小さい』とか言われたりしてたんだよ」

「えっ」

「まあ、今は目がデカいやつがもてはやされる時代だからね、斐羅
はそう言われる度へこんでた。でも、普通に可愛いよな、特に化粧
し始めてから」

確かに斐羅の目はさほど大きくはない。だけどああいうのを和風
美人というのか、とにかく綺麗だと思う。

「化粧、いつから始めたの？」

「今年に入ってじゃん」

「へえー」

明はまだ化粧をしたことがない。しかし少しだけ興味はあった。
自分が化粧をしたら、どういう顔になるのだろう。

「もししてみたかったら、今度斐羅に言ってみれば？」

考えを見透かしたかのように里恵が言う。その後、付け足した。

「まあ、江川さんはそのままでも十分可愛いけど」

「いや、そんなことないよ。全然」

とつさに否定する。褒められたらそんなことないと答える、それは長年の学校生活で身に付けた『技』だ。しかし里恵は突然ごみ箱を蹴った。倒れはしなかったが、大きな音が鳴り響く。明はびくりと肩を動かした。

「何かさあ、そういうのやめない？」

「そういうの、って？」

「わざと否定するの。何で、お前らはあるがとらって素直に受け止めることが出来ないのさ？」

里恵の視線に圧倒され、明は押し黙った。お前ら、っていうのはきつと私みたいな建て前ばかりの人のことだろうな。そして、それはほとんどの人に当てはまる。里恵は少し優しい口調になって、

「せめて、アタシの前くらいでは本音で話してもいいじゃん」

里恵は、自分を認めてくれたのだろうか？

「……いいの？」

彼女は返事をしなかった。そっぽを向いている。照れているのだろうか、そう思うと自然と笑みがこぼれた。

「また、安藤さんに会わせてくれる？」

「うん」

風になびく髪を押さえながら返答する。

「結構暗くなってきたね。そろそろ、帰らないと」

「あ、どうすんの？ 進路希望の紙」

自転車の鍵を開けながら里恵が聞く。

「適当に書くよ」

「ふうん。アタシは出さないけど」

低く笑う。

「また、担任がうるさく言ってくるんじゃない」

「ほっとくぞ」

里恵の意志の強さに明は感心した。でも、こういうのを世渡り下手と言っているのではないか。

「じゃあ」

自転車にまたがり手を上げる。

「ふうん、」

また明日、と言おうとして明は口をつぐんだ。彼女は、明日来るのかどうか分からないのだ。

「またね」

と言い直す。明は少し歩いたところで振り返った。里恵はただ前を向いて自転車を飛ばす。遠ざかる茶色い髪。他人同士、でもただの他人じゃないと漠然と思った。

第15章 三者面談。

午後二時をまわったところだ。明は廊下に置かれた椅子に座っていた。隣にはスーツをまとった母親も座っている。目の前には明の教室があつた。その時教室の扉が開き、背の低い厚化粧の女性が出てきた。続いて出てきたのは、

「あ、和泉」

直史は扉を閉め、明の母親に一礼すると、

「よし」

と言った。

「江川が次なんだ。三者面談」

「うん」

「頑張れよ」

そう言つて笑みを浮かべるが、どことなくぎこちなかつた。江川さん、と教室の中から声が聞こえ、母親と明は腰を上げた。

「江川は、川田総合高校だよな」

手元にある明が出した進路希望調査の紙を見ながら担任が言う。

「はい」

「どうしてそこがいいんだ？」

言葉につまる。何度も志望動機について考えてみた。しかしあそここのことは何一つ知らなく、教室の本棚にある高校情報誌を読むのも、クラスに誰かいると気が引けた。だって、皆まだ真剣に考えてはいない。

「近いからです」

苦悶の末そう答えると、担任はあからさまに眉をひそめた。隣に座る母親の視線が痛い。

「まあ、まだ高校のことをあまり知らないのは仕方ないからな」
「娘は、そこに入れるんでしょうか」

たまらず母親が口を挟んだ。母親に視線をうつした明は、短い髪の毛に白髪があるのを発見する。

「まだ五月ですからねえ。この先まだまだ偏差値なども変動するでしょうし。ただ、今のままだと少し厳しいかもしれませんね」

と言ってあごをかく。そうか、厳しいのか。しかしさほどのシヨックは受けなかった。ここ川田市には高校がたくさんあるから、自分の行けるところに行けばいい。

「実力テストの結果から考えると、川田工業などなら余裕があると
思うな」

担任の口から出た高校名に明は愕然とした。川田工業……確か、川田市で一番偏差値が低い公立の高校とかいう。自分が、そんなに頭が悪いなんて知らなかった。明は思わず、

「私って馬鹿なんですか？」

と聞いた。すると担任は小さな目を見開き、

「いや、そんなことないぞ。江川は授業態度も良いし、内申も悪くない。ただ、成績の波が激しいんだよな」

どういう基準で悪くないと言っているのかは不明だが、波が激しいというのは明も分かっている。平均そこそこの時もあれば、ぐんと三十番以上順位を落とすこともある。

「とりあえず、中間・期末テストが終わってみてからだな」

担任は話を切り上げる。暑いわけでもないのに、明は背中に汗をかいていた。

70

「あんたさ、真面目に勉強した方がいいんじゃない？」

帰り道、母が不機嫌そうな声で言った。

「担任のあの言い方じゃあ、あんたの言ってた高校は受からないよ」

断言されてカチンときた、何にも分かっていないくせに。足元の小石を蹴り飛ばすと、小石は路上駐車された車のボンネットに当たった。やばいと思ったが、気にしないようにと明は口を開く。

「大丈夫だよ。まだ先のことだし」

しかし母親はぴしゃりと言う。

「大丈夫大丈夫って言っている内に、受験は来ちゃうんだからね。二期期までには志望校が決まる子が多いんですよ。早めにコツコツ勉強したら？」

「うるさいなあ」

つい声を荒げた。不穏な空気が漂う。

「私、ちょっと約束してる友達がいるから先に帰ってて」

明はそう告げると、母親の返事も待たず逃げるように来た道を引き返した。

約束してる友達なんて、いやしないんだけどね。明にはもう行く場所が決まっている。迷ったが、エレベーターで最上階まで上る。降りると階段を上り、目の前に現れたドアを開けた。そこには、髪の毛の長い女の子と長身の男の子が一つ高くなったコンクリートの上に座っていた。

第16章 信じ合える。

「あれ、江川」

直史が声をかける。明はやあ、と挨拶し二人がいる落下防止用の柵の前まで歩み寄った。

「オハヨ、安藤さん」

斐羅ははにかんだ。えくぼが可愛いと思った。

「おはよう」

「今はこんにちはじゃないか？」

直史が突っ込み、明はそうだったねと頭をかく。本当は分かっていた。でも、同年代に『こんにちは』というかしこまった言葉をかけるのが苦手なのだ。背中がむずがゆくなってしまふ。明は二人の前にぺたりと座った。

「どうして来たんだ？」

「親にムカついて」

「つーことは、三者面談の内容があまり良いものではなかったと」

「イエス、アイドゥー」

思いつきり日本語の発音で明は肯定した。

「俺と一緒にじゃん」

直史は乾いた笑いを漏らす。

「え、だって和泉頭良いじゃん」
「でも、上には上がいるんだよ」

頭が良い、ということに否定はしない。だから里恵は、直史と仲良くやってこれたのかもしれない。明は斐羅に尋ねた。

「安藤さんの学校も三者面談期間なの？」

普段ならこの時間はまだ授業中だ。三者面談期間中は、午前で帰れることになっている。

「うん」

斐羅は明の目を見ずに小さくうなずいた。そういえば今日は敬語を使わずに話してくれてる、何だか明は嬉しくなった。

「そういえば、今井さんは？」

「まだ三者面談だと思っぜ。……にしても遅いけど」

「じゃあ今頃、先生にしばらくられているんだ。『将来どうするんだ！』とか言われて」

その光景はリアルに想像出来た。それでも里恵は涼しげな顔をしているだろう。だからきつとなかなか釈放されないな。

「ねえ、そういえば安藤さん、どういうきっかけで今井さんと友達になったの？」

明は興味津々に尋ねた。彼女はどう見ても真面目そうで、里恵と接点がないように思えたからだ。斐羅は赤くなりながらも、思い出

すかのように宙を見つめて話し始めた。

「四年生の時初めて同じクラスになって、なおくんが私に声をかけてきたの。それで、里恵となおくん、仲が良かったから」

「何て言っただんだっけか」

直史が話をさえぎった。

「確か……『給食当番代わりにやってくれ』じゃなかった？」

「えっ、俺そんなこと言わないって」

「言っただでしょ」

斐羅は冷ややかな視線を直史に向けたが、目は笑っていた。

「それで、いつの間にかなおくんとも里恵とも、親しくなったのかな。多分」

「へえ……」

言い終わると昔を懐かしむように目を細めた。優しく吹く風が心地よい。

「和泉は、どこの高校に行くつもり？」

明は伸びをしながら聞いた。そして足を放り出す。

「一応、浦高だけど」

出た、県内トップ高。あまりにも予想通りなので明は笑うしかなかった。

「安藤さんは？」

その問いに斐羅は目を伏せた。聞かれたくなかったのだろうか？
気まずい空気が流れ、明は下唇を噛んだ。

「そついつお前はどこに行くんだよ」

直史がぎこちない笑みを浮かべて聞く。だから明も無理に笑って、

「それが、行きたいところないんだよねー」

と頭をかきながら答えた。

「おいおい。そりゃマズいだろー」

「やっぱり？」

二人の笑いが尾を引いた。

「江川、さん」

斐羅が小さく呼んだ。何やら深刻げな表情で、口は真一文字に閉じていた。

「何？」

だから明も真顔で尋ねた。斐羅は視線を泳がせ、言うか言わないか迷っている様子だ。

「安藤」

直史が心配そうに声をかける。彼には、斐羅が何を言おうとしているか知っているのかもしれない。

「大丈夫」

そう答えた声は震えていて、全然大丈夫そうではない。その時、屋上の扉が勢いよく開かれた。入ってきたのはもちろん彼女だ。

「三人ともおそろいじゃん。本当、うざいよあの担任。しつこいったらありゃしない。……ん、何皆して暗い顔してんの？」

里恵はきよんとした顔をしながら大股でこちらへ歩いてくる。明と直史の隣に腰を下ろすと、コの字のような形になった。

「何の話？」

直史は斐羅の方にあごを動かした。その意味が分かり、斐羅と目を合わせる。彼女はこくりとうなずき、

「あのこと。江川さんに、」

「何だよ」

里恵が泣きそうな顔をして言ったので明は驚いた。彼女もこんな顔をすることがあるんで。

「そつだよ。無理すんなよ」

直史も止める。明は不安になってきた。自分の知らないことが増えてゆく。

「和泉、他人同士とか言ったくせに……」

今の状況に関係ないと、自分でも思う。しかしこの憤りを口に出さずにはいられなかった。

「ああ、言ったださ」

直史に見つめられ、明はたじろいだ。ここで黙り込んだらいけない、

「なのに、何でそんな顔してるの？ 安藤さんだって他人でしょ」

口が滑った。気を悪くさせたと思い、斐羅の顔色をうかがうが表情に変化はない、少し安心した。直史が断言する。

「他人だからこそ、俺達は信じ合えるんだよ」

第17章 最低な子供。

明には分からなかった。風が吹き、髪の毛が口の中に入る。

「分かんないんだけど」

「俺達の、モットーみないなものかな」

ますます分からない。ちゃんと説明してよ、と明は言った。

「小さい頃はさ、誰でも悪いことをしたことがあると思う。正直だし、世間のことを何一つ知らないからさ。でもその悪いこと、親だけはいつになっても覚えてたりするよな。あなたあの時はあだつたとか、そんな小さい頃の悪事を蒸し返されたって本人は苦しいだけだろうな。子どもは成長するにつれ変わっていくっていうのに、あまりにも身近な存在すぎるから気付かないんだろうけど。自分のしたことが消えてしまえばいいのに、と黙っていても」

「……それ、誰の話なの？」

「別に、誰の話ってわけでも……。それなら、江川は何にも思い出したくないようなことないのかよ」

後悔すること、あった。苦い記憶がよみがえってくる。確か、あれは小学三年生の頃。明はクラスメートの男の子に髪型を揶揄されたことがあった。泣きたい気持ちになり、だからその子の下敷きを盗った。しかし黙り通す根気がなく、つい他の子に漏らしたら担任にバレてしまいこっぴどく怒られた。

他人が聞いたら些細な出来事、しかしこの話を他人に話したことはない。いつか、笑って話せる日が来たりするのだろうか。

「アタシは、クラスメートのやつ泣かせたことあるよ」

そう言って鼻で笑った。

「ムカつくやつだったんだよ。大人しくてか細い女の子に悪口をよく言ってきてさ、仕返しに突き飛ばしたんだ。ちょうど雨上がりで地面ぐちゃぐちゃでさあ、そいつの顔は泥だらけになったよ」

笑いながら暴露できる里恵はすごいと思う。これは絶対に、思い出したくないことなどではない。ふと明は気が付いた。

「ん？ 大人しくてか弱い女の子って誰」

「アタシに決まってんじゃない」

真顔で自分を指差した。すると斐羅が横目で里恵を見ながら、

「たくましい腕だったし、体育の時間は人一倍騒がしかったような気がするんだけど。私の思い違い？」

「それはきつと勘違いだよ」

里恵は首を振った。二人のやり取りって面白いよな、と直史がこぼし、明は笑いながらうなずいた。

「ま、そういうことだよ」

穏やかな笑顔を明に向ける里恵の姿に何か引っかけた。斐羅に目を向けると、とつくに笑顔は引っ込んでいて口を真一文字に結んでいる。そうだ、斐羅は何かを話そうとしていたんじゃないか。たか。心の声が聞こえたかのように、斐羅は口を開いた。桃色の唇が綺麗だと思う。

「私……。最低な子供だった」

「え？」

思わず明は聞き返した。里恵も直史もうつむいているところから、どうやら知らないのは自分だけみたい。仲間外れにされているような感覚を取り払うために明はわざと明るい声色を作った。

「え、安藤さんはいい人だだと思うよ。頭良さそうだし、それに、

「そんなことない」

斐羅の声に遮られる。哀しそうな表情で、膝に置かれた自分の白い指先を見つめながら言った。

「……学校に、行ってないんです」

第18章 ……いじめ？

一瞬、時間が止まったように感じた。明は目を見開いて斐羅を見つめる。斐羅はうつむいたまま何も言わず、唇を噛んでいた。里恵が何度か口を開いたり閉じたりしているのが目に入ったが、斐羅は自分に話してくれているのだから自分が何か言わなければと思った。

「……いじめ？」

一番始めに頭に浮かんだ言葉だった。大人しそうな彼女のことだからあり得ると思ったのだ。しかし、斐羅は小さく首を振り、

「違うの」

と言い切った。明はますます分からなくなった。どうして真面目そうな彼女が？ 困惑したまま直史に目をやる。しかし彼は明の方を向いておらず、まっすぐ斐羅を心配げな瞳で見つめていた。

沈黙が重い。明はいつも、沈黙にならないよう一生懸命に会話をつなげてきた。そのためなら時には嘘だって言ったりもした。でも、今ばかりは嘘を言うことなんて出来ない。斐羅が何か言い出すのを待つしかなかった。

「斐羅はさ、すごく真面目なんだよ」

里恵がぼつりと言った。触っている髪の毛を見つめたまま、言葉を続ける。

「だから、仕方ないんだよ」

「どついつ意味？」

明は眉根を寄せた。真面目なのにどうして学校に行っていないのか、理解が出来なかった。

「真面目な奴は学校なんて腐った場所には行かないんだよ」

里恵は明に視線を移した。

「何それ。じゃあ、学校行っている奴は馬鹿だってこと？」

たまらず明は口にした。こんな風に学校を見下してばかりで、ただ単にあまり学校に行かない自分を正当化しているだけのようない気がしたのだ。

「やめろよ」

直史が口を挟む。里恵が他人を馬鹿にするかのような発言するのはよくあることだから、さすがに呆れているようだった。

「学校に耐えられなかったの」

明は斐羅に視線を移した。横を向き遠くを見ているかのような視線で、慎重に言葉を紡ぐ。長いまつげが綺麗だと思った。

「行事をするのも辛かったし、友達と喋るのも嫌だった。だから「何で辛かったの？」

「うん……」

斐羅は曖昧な返事をするともた口を閉じてしまった。

「だからさ、学校って馬鹿ばっかじゃん。斐羅はそれに耐え切れきれなくなっただよ」
「違うよ」

斐羅が否定した。里恵は意外そうな表情になり、

「だって斐羅、学校が嫌になったから行ってない訳だろ？」
「そうだけど、馬鹿ばかりだからって訳じゃない。あくまでも、私が耐えきれなくなっただけ」
「ていうかさあ、やっぱり行った方がいいって。受験生じゃん」

そう直史が言うと、斐羅はとても哀しそうな顔になった。

「なおくんも分かってくれてなかったんだ」

明は直史と同じ気持ちだった。学校は面倒くさいところだけど、絶対に行っていた方がいい。行かないのは単なる逃げだと思う。けれど、斐羅の目が赤いことに気付いていたから口にすることは出来なかった。

「お前、馬鹿じゃねえの。学校なんて人を駄目にするだけじゃん。教師みたいなこと言うなよ」

里恵は立ち上がって声を荒げた。明は不安な気持ちで里恵を見上げる。彼女は隣に座る直史をにらんでいた。

「アタシは、斐羅は間違っているとは思わない」

明は斐羅を盗み見た。彼女の目はうるみ、しかし涙をこぼさぬた

めだろう、唇を強く噛んでいる。

最低な子供『だった』と過去形で話した訳も、学校へ行っていない理由も、何一つ分からなかった。なのに里恵は分かっているように、明は仲間外れにされたようで少し寂しかった。

第19章 もう駄目だな。

明はふと以前直史が言った言葉を思い出し、不機嫌そうな表情をあらわにしている彼に言葉をかける。

「ねえ、和泉。前、『あいつはあれで良かったんだ』とかって言ってたよね？ 今井さんは良いつていうの？ それって矛盾じゃない？」

「何、アタシのこと何か言ったのかよ」

里恵が口を挟むと、直史は『しまった』という顔になった。

「今井の場合は、ほら、全然来てないってわけじゃないし」

「でもあまり良くないんじゃないの？」

「そうだけどさ……」

里恵はイライラした様子で身体を揺すっていた。

「つまりさ、アタシが昔酷かったからでしょ？ マシになったってことを言いたいんだろ。つーか、勝手に人のこと分析するなよ」

どういふ風に酷かったかというのだろう。明は気になったが、里恵がまた喋り出したので黙っているしかなかった。

「マシだからっていうなら、斐羅だってそうじゃなか。学校に行っていた頃よりはずっと良いと思っよ」
「でもさあ」

直史は、あぐらをかいている足の組み方を入れ替えて反論する。

「今の安藤、あんまり楽しそうには見えねえよ。体調を崩すことだって多くなっただし」

言い終わると斐羅をちらりと見た。斐羅の背中はどうどん曲がり小さくなってゆく。あまり自分の話はされたくない、そんな様子だった。

「でも今の方が精神的には絶対マシだって。斐羅も何か言い返せよ」

里恵の言葉に斐羅は顔を上げた。右目を隠す長い前髪を脇に分け、

「なおくんは正しいよ。私は、もう駄目だな。浦高に行けるといいね」

首を傾げ、直史ににこりと笑いかけた。斐羅はどういう気持ちで諦めの言葉を口にしたのか。考えるとその笑顔も痛々しく感じてしまい、明は思わず言った。

「大丈夫だよ。色々な道があるし、諦めることなんてないよ」

すると斐羅の笑顔はしぼんでいった。マズいことは言っていないつもりなのに、と心拍数が速くなるのを感じた。

「お願いがあるんだけど」

無表情で明を見つめながら里恵は言った。

「……何？」

「もう、ここには来ないでほしいんだ」

そう冷たく言い放った。直史に視線を移し、

「直史もだよ」

と言う。

「え、どうして？」

笑って尋ねてはみたが、頬の筋肉がこわばっていて泣きそうな顔になってしまったかもしれないと思った。

シヨックだった。

「お前ら、分かってねえよ。所詮、学校に毎日通って先生の言うことを聞く操り人形なんだ。だから斐羅のことなんて分からないんだ」
「何だよそれ」

直史が立ち上がった。止めて、と斐羅が小さい声で言ったが二人には聞こえない様子だった。

「先生の言うことも聞かないで遊び歩いている自分を正当化しているようにしか聞こえねえよ」

直史の言っていることは合っていると思う。だけどこんな風に言

い合っている姿、明は見たくなかった。明は中学生になってから一度も言い合いをしたことがないし、見たことだつて皆無に等しかった。散々陰口は言つても本人には決して言わない、そんなものだ。

「正当化なんて感じるのは凶星だからじゃないの」

里恵は鼻で笑つた。どう見ても挑発しているようにしか見えない。

「もう止めて」

今度は二人にも聞こえるように斐羅が叫んだ。みんなの視線が彼女に集まると、斐羅は背筋を伸ばし、

「なおくん達が正しいよ。だから、もう止めて」

『達』ということは自分も含まれているのだろう。

「そんなことないよ」

里恵の言葉にも斐羅は首を振る。

「私が止めるよ。ここに来ること」

口元に微笑をたたえ、優しく言った。

第20章 泣いてた。

何言っただよと言おうとしたのかもしれない、里恵は口元を歪ませた。

が、頬の筋肉がつってしまったかのような不自然な形で口の動きは止まっていた。斐羅の強い眼差しが本気で言っているのだということをも物語っている。それくらい斐羅ははっきりと言った。

「うん。私が止めるよ」

斐羅がもう一度言った。自分に言い聞かせるようにうなずきながら。

「……何言っているんだよ」

「ごめんね、里恵」

斐羅は立ち上がってお尻をはたく。このままじゃ本当に来なくなるかもしれない、謝るのは自分だと思った。でも、どんな風に謝ったらいいのかどうしても分からない。グループからはみ出さないコツはよく知っていたけれど、そんなの今は全く役に立たなかった。

「逃げるのかよ」

苦々しく呟いたのは直史だ。ポケットに手を入れたまま斐羅を見据える。

「うん」

そう言って微笑むと視線をアスファルトの地面に落として、ごめん、と再び同じことを口にした。

「じゃあ」

斐羅はみんなに背を向ける。少しだけ振り向いたその時、彼女と目が合った。行かないで。そう明は言おうとしたが、斐羅は顔を前に戻して歩き始めた。

「待つてよ!」

里恵が落下防止用の柵を叩いて叫んだが、斐羅の歩みは止まらない。明は唇を噛みながらどうしてこんなことになったのかと考えていた。悪いのは、私？

里恵が走った。

扉を開けかけた斐羅の腕をつかみ、前に回り込む。

「斐羅、」

しかし言葉はそこで途切れ、次の瞬間には二人の手は離れていた。斐羅は里恵の横をすり抜け、やがてこちらからは見えなくなった。

「……斐羅、泣いてた」

里恵は戻ってくると、抑揚のない声で言って振り向いた。里恵が勢いよく閉めたため、扉はまだ揺れていた。泣かしたのも自分のなのだろうか。

「マジかよ」

「嘘なんて言うわけないじゃん」

「だってあいつ、泣いたことないじゃん」
「だからびっくりしたんだよ」

もうここには来れない、明は思った。自分がいなければこんなことにならなかつたはず。一方で自業自得だ思う自分もいて、そんな自分が汚らわしくて、醜くて、本当に嫌になる。ソックタツチできちんと止めたはずの白い靴下は、とつくにずり落ちてたるんでいた。

「お前が俺達にもう来るなって行ったから帰っちゃったんじゃないの」
「元は直史が悪いんじゃない」

小さな言い争いが始まる。責任の押しつけ合いみだだった。全部を引き受けて去っていった斐羅。自分に真似出来るものではない。今井さんと、和泉と、私。

斐羅に会う前に戻っただけかもしれないが、自分は知ってしまった。会ってしまった。髪長い人見知りの女の子と。もう、本当に来ないのかもしれない。

「斐羅がマジで来なくなったらどうする気？」

か細い声で言った。

「……ここに来てるからって学校に行くようになるわけじゃねえじゃん。逆に悪影響のような気がするんだけど」

そして、尖った直史の声。

「お前、そんなこと思っていたのかよ。何が他人だからこそ信じ合

えるだよ。アタシのことも斐羅にのことも、信用なんてしてないじゃん」

「信用とは別問題だって。何で分かんないのかなあ……」

「いいよもう。やっぱり優等生には分からないよね。……もう、お前来るなよ」

里恵の溜め息混じりのその言葉に明は固まった。本当に、もう駄目なんだ。今後、直接来るなどは言われなかったとしても平然と遊びに来れるほど明はタフじゃない。

「あ、あの私そろそろ帰るね」

こんな空気の中よく言えたと明は自分を褒めたくなった。集中する二人の視線を振り払うかのように明は元気よく立ち上がるとスカートの皺を伸ばす。

「俺も帰る」

顔を上げると既に直史は歩き出していた。うるさく感じるほど勢いよく扉を閉め、大きな音が立った。

「……あ」

二人で話すというのはどうだろうか。そしたら修復出来るかもしれないと思ったのだ。

「……ごめんね」

安藤さんの気持ち、本当は少し分かるな。和泉って酷いよね。ああいう言い方は最低だよな。何であんな奴と友達になったの……？

そう言おうとしていた。しかし里恵は柵まで歩くと明に背中を向けたまま、

「帰るんでしょ」

と冷たく言った。拒絶だ。いつもはぶつかり合いがあっても、すぐに謝ったり他人の悪口にすり替えたりして平和を保ってきたから、こんな言葉を浴びせられるのには慣れていなかった。心音が耳に響くを感じながら、無言で明は走り去った。

そうやって、少しずつ壊れてゆく。

第21章 嫌だなあ。

空いている二つの席は、明達にとって見慣れた光景になりつつあった。教師は出席簿に目を落としたまま欠席と記入する。近くの席の生徒はさも当たり前のように、自分机のスペースを確保するために二人の机を利用する。あれから里恵は一度も学校に来ていない。杉沢の太い声も、もう一カ月以上聞いていなかった。

直史がクラスの男子とふざけ合っているのを見かける度、明は嫌な気持ちになった。あんな風に斐羅、そして里恵と別れて、何とも思っていないのだろうか。彼女達をその程度にしか思っていないかったのだろうか。だけど本人に尋ねられる勇氣なんて、自分はいにく持ち合わせていない。

「スマイリーはどう思う？」

いきなりナツキが話を振ってきた。明は黒板を消す直史を観察していたので当然聞いているはずもなく、

「ごめん、聞いてなかった」

と素直に答えた。ナツキと紀子から失笑が漏れる。ジャージに着替え終わったナツキはズボンの裾を折り、制服を畳んで自分の席の椅子の上に置いた。しかしスカートは単に丸められただけでぐしゃぐしゃ、ブレザーは片腕が飛び出していた。大ざっぱな性格なんだろう。ナツキは髪の毛を手櫛でとかしながら言った。

「修学旅行の班さー、うちら三人じゃ一人少ないじゃん。だからどうするって話」

「あまつてる人って誰いたっけ」

近くから移動させた椅子に座っている紀子は、明とナツキを交互に見る。

「うーん、あ、野崎さん達って六人グループだから二人あまるよね？」

明が言った。バレー部とテニス部が合体した、このクラスでは一番大きいグループだ。教室に姿が見えないことから、今日も中庭で遊んでいるのだろう。

「でも歩美とかメグと一緒にになりそうじゃん。他のグループの人ってうちのグループに入ってくれそうにないしさー」

他のグループから一人だけ抜けて明達の班に入るなんて、誰が好き好んでするだろう。解決策は一人ぼっちの人を引き入れることしかないような気がした。

「修学旅行っていつだっけ？」

「六月一四日」

でも班を決めるのは明日だ。部屋割りも決めることになっている。一部屋につき二班で三日も過ごすのだから、苦手な人とは一緒になりたくない。

「やっぱりさあ、今井さんを入れることになるんじゃない？」

そう言った紀子は心なしか沈んだ表情だ。

「えー、超ヤなんだけど」

とナツキは言い、

「嫌だなあ」

と明は呟いた。あんな別れ方をしてしまった以上、同じ班で寺を回ったり、土産物屋をぶらぶらしたりするのは避けたいところだ。仲直りなんて出来るはずがない。

そう考えたところで、どうして直史はともかく自分までもう屋上に来るなど言われたのか分からなくなった。斐羅を傷付けることは言っていないはずだし、むしろ励ましの言葉をかけたと明は記憶している。だったらどうして。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「あ、そろそろ移動する？」

言いながら紀子は立ち上がった。五限は体育、校庭で持久走をすることにしている。授業が始まるまであと五分ほどあるが、体育の教師は時間に厳しかった。授業に一秒でも遅れると、校庭一周というペナルティが課されるのだ。

ガシャン！ と背後で音がしたので振り向くと、ナツキの左斜め後ろの机の側に蓋の開いたアルミ製のペンケースが床に落ちていて、数本のシャープペンシルが散乱していた。

「やべっ」

落としてしまった犯人が言った。直史だ。

「ここの席ってクボタだろ？ 大丈夫だって。早く行こうぜ」

直史は悪戯がバレたような表情で落下したペンケースを見つめていたが、他の男子の急かす声に従い教室を出て行った。

「……うちらも早く行こ」

「あ、うん」

明達も教室を後にした。廊下を駆け下りている最中、ナツキが「和泉も悪い奴だね」と冗談めかして言った。

「でも拾ってたら間に合わないもんね」

相変わらずのんびりした口調で、紀子は直史を庇う。一段抜かして先頭になって階段を下りる明にもちゃんと二人の会話は聞こえていた。

「いや、あいつも普通の人間なんだなって思ってさ」

「頭は普通じゃないけど。偏差値七 くらいあるらしいよ。そういうのって遺伝なのかなあ」

「そうじゃない？ 和泉のママ、塾の先生やってたらしいし」

明は三者面談の時に会った直史の母親を思い出していた。ふうん、そうなんだ。

ようやくくげた箱に着いたところで授業開始のチャイムが鳴った。もう喋っている暇はない、明達は急いで上履きを脱ぎ、スニーカーを出すのとほぼ同時に上履きを入れる。明は土足厳禁なもの構わず汚れた白いスニーカーに足を入れ、外へ飛び出した。

第22章 来てたんだ。

「スマイリー置いてくなく！」

ナツキの声が聞こえたが、ここは気のせいということにしておう。

明はぎりぎりでチャイムが鳴り終わるまでにクラスの女子の列に並ぶことが出来た。昨日雨が降ったせいで地面の色はいつもより濃くなっていて、時折生ぬるい風が吹く。

大抵はジャージの上だけを着ていて、ナツキのようにズボンまで履いている人はあまりいなかった。間に合わなかった生徒は、ナツキと紀子を含め六人いた。

「はい、お前達は遅刻ー。校庭一周走ってきなさい」

体育教師の町田先生は校庭のトラックを指差した。

「殺す気かよー」

と言いながらも彼女達は走り始める。大変だなあ、と明は他人事のように思った。

「スマイリーって持久走何分？」

隣に並ぶメグが訊いてきた。彼女も吹奏楽部だが、あまり会話をしたことはない。同じクラスになったのも今年が初めてだから、メグが速いのか遅いのか全く分からなかった。

「えーっ、遅いよお。メグは？」

「あたしも遅いよ。何かスマイリー速そうな気がする」

実のところ、明は速い方だった。でもやっぱり本当のことは言えない、謙遜するのが当たり前で、ルールだから。前ならえの号令がかけられたが、真面目に両手をぴんと伸ばしている者はあまりいなかった。この年になって前ならえなんて恥ずかしい。明もいかにもだるそうに片手を伸ばすだけだった。

「…………あれ」

メグが声を出した。喋っていると教師に怒られるので小声で。何？ という意味合いでメグに顔を向けると、

「今井さん来てたんだ」

と言った。メグの視線を辿ると、昇降口の入口にあるコンクリートが一段盛り上がった場所に、他の見学生徒に混じって里恵は座っていた。茶色い髪と着崩したジャージのおかげで、遠くからでも彼女だとよく分かる。

「本当だ。でも今日来てなかったよね？」

メグの発した言葉を聞いていたのだろう、メグの後ろにいる女子が言った。

「うん」

「いつ来たのかなあ」

「さあ」

「そこ、お喋りするんじゃない」

先生がこちらを見ながら注意したため、明達は口をつぐんだ。遅刻した生徒全員が走り終わったところでやっと体育委員による号令がかけられる。そして準備体操、ウォーミングアップとしてのトラック一周。その間も明は里恵の方をちらちらと窺っていたが、彼女は爪や髪の毛をいじっていたりして、一度もこちらを見ようとはしなかった。

持久走は何度やってもきついものには変わりなく、三周もするとどうして仮病なりなんなり使って見学にしなかったのかと考えてしまふ。スタート地点を通るとまだ走る番が来ていないナツキに、

「頑張れー」

と声をかけられるがそちらをちらつと向くので精一杯だった。笑顔を向けられるのはせいぜい二周までだ。息がとつても苦しくて、こめかみを流れる汗は冷たく感じた。しばらくしたところで振り向いてさり気なく里恵の様子を窺うが、やっぱり彼女は下を向いて自分の爪を触っていた。ここまで見てくれないというのは哀しかった。そんな風によそ見をしていたものだから、

「あっ」

周りの風景が上へ流れてゆく。転んでしまったのだ。反射的に手をついたので顔面を地面にぶつけることはなかったものの、急いで起き上がるうとしたら膝に鋭い痛みを感じた。

「おい、大丈夫か？」

ストップウォッチを持った町田先生が近寄ってきた。脇を通り過ぎる生徒はみんな自分のことを見ていて恥ずかしかった。

「大丈夫……だと思います」

明は立ち上がってジャージについた砂を払う。膝を見てみると血が出ていた。

「あー、怪我してるね。保健室に行つてきなさい」

「え、大丈夫ですよ。水で洗えば」

「なーに変な遠慮しているんだよ。菌が入ったら大変だから行つてきなさいって」

町田先生は笑って明の背中を叩いた。先生は女性、しかも結婚もしているのに男みたいな口調で話す。だけど、そういうところが明は好きだ。町田先生は、この学校で一番好きな教師だった。

走る人の邪魔になるのでトラックから出ると、膝についた砂を軽く払う。血痕が手に少し付着した。洗ってから保健室に行こうと思つて水道の方に視線を向けたら、心臓がびくりと大きく跳ねた。

水道を囲むコンクリートに里恵は寄りかかっているのだった。

第23章 アタシの家に来い。

あのまま水を出したら里恵は水しびきで濡れてしまう。でも、わざわざ声をかけなくても察してどいてくれるかもしれないし、保健室で洗うという方法だってある。だけど……明は迷っていた。

今し方走り終わった生徒の、荒い息づかいが後ろから聞こえてきた。自分も里恵のようなはつきりした性格になりたかった。こんなことで迷うなんてくだらない。

明は意を決して、湿った地面へ一步を踏み出す。その間も心臓はどきどきしていてうるさかった。怪我をした方の足を引きずるようにして、水道までの距離は短いから歩みはゆつくりと。一度だけ里恵がこちらを見た。が、すぐに目をそらしてしまう。もう水道は目の前だった。

こんなに里恵に近付いたのは屋上で話した以来だ。里恵は明より五センチほど背が高い。だから里恵のつむじを見たのは初めてだった。髪の毛の生え際が黒くなっている。

明が水道の蛇口に手を伸ばしかけても、里恵が移動する気配はない。水道は里恵の後ろにあるのだから明が何をしているのかは見えないのだが、水道へ向かう姿は絶対に視界に入っていたはずだ。わざとだ、と明は理解した。無視される可能性も踏まえながら思い切った声をかけることにする。

「あの、水跳ねちゃうから」

里恵が振り向いた。その顔は無表情で、心なしかいつもよりくす

んで見える。そして怪我をしている明の膝をじっと見つめた後、

「だから？」

と訊いてきた。その言葉に明はうるたえた。

「えっと、ちょっとどいてくれる？」

「イヤ」

里恵が即答する。明は益々困惑して、身体の温度が下がってゆくような感覚を覚えた。イヤと言われたらどうすればいいのかなんて考えてもいなかった。とりあえず、

「え……どうして」

と訊いてみることにする。膝がキリキリと痛みの悲鳴を上げていた。

「何かそういう態度ムカつく」

「そういう態度って？」

「被害者ぶってるところだよ。アタシが悪いって思ってるんでしょ」

「え、そんなことないよ。何言ってるの今井さん」

罵声を浴びることなんて思ってもいなかったもので、明は焦っていた。ホイッスルを吹く音が聞こえ、しばらくしてトラックを駆ける複数の足音が後ろを通り過ぎた。

「そういうのがウザい。アタシとあんまり話したくないって思ってるのが分かるんだよ」

「でも」

明は反論した。「それは今井さんだって同じだと思っただけど。私と目を合わさないようにしてたじゃん」

突然里恵が声を出さずに笑い出した。

「江川さんも結構言うようになったじゃん。前は気ままずくなくても笑って流す『スマイリー』だったのにさ」

皮肉のつもりだろう、里恵は『スマイリー』のところを強調して発音した。数メートル離れた所に座る他の見学生徒達の視線が自分達に集中していることに気付き、少し緊張した。

「……そろそろ洗わせてくれる？」

「やっぱりそうなんだよね」

「え？」

里恵は立ち上がって少し離れた場所に移動したが、そんなことを言われたら洗えなくなるではないか。

「結局斐羅のことなんかどうでもいいんだ」

「……」

「いいよ、気にしないで洗って」

明は気が引けながらも蛇口をひねった。水はふくらはぎを伝って靴下に染みてゆき、傷口はすぐに綺麗になった。

「直史に言っというてよ」

周りの生徒に聞かれても構わないと思っているのだろう、里恵は

音量を上げて言った。

「今日、アタシの家に来いって」

一瞬、聞き間違いかと思った。あんな別れ方をしたというのに自宅に呼ぶ神経が理解出来ないし、何よりもどうして自分は誘われないのだろう。

「んじゃ、よろしく」

そう言つと里恵は授業中だということにも構わず校門へ歩いていった。途中で町田先生が気付き呼び止めたが、歩みを止めることはなかった。里恵が授業中に抜け出すことはよくあるらしいから、先生はまたかと言つ風な顔をした。

「……江川さん、今井さんと仲良いの？」

完全に里恵の姿が見えなくなると、見学生徒の一人が好奇の目で訊いてきた。

「ううん」

明は首を振り、保健室へと歩いていった。仲間外れにされた気持ちを噛みしめながら。

第24章 この弱虫が。

保健室から教室に戻る途中、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。階段を一段ずつ上がっていると、数人の体育着に身を包んだ生徒が明の脇を駆け足で通り過ぎていった。

「あ、スマイリー。大丈夫？」

振り向くとナツキと紀子がいた。さすがに暑かったのだろう、ナツキは脱いだジャージを手に持っていた。前髪が額にへばりついている。

「大丈夫。擦りむいただけ」

「そっか。持久走疲れたよー」

そう言った紀子の頬は今も紅潮していた。最後まで走らなくて済んだのだから自分はラッキーだったのかもしれない。ちよつと痛いけれど。

ナツキ達と一緒に教室に行くと、クボタが床に散乱したシャープペンシルを兎跳びをしている人のような格好で拾っているのが目に入った。直史の姿を捜すが、まだ彼は教室に帰って来ていないみたいだ。自分の持ち物が落とされている状況を、クボタは何て思っているのだろうか。

明は自分の机の上に置いたスクールバッグから、ミッキーの柄が付いた青いハンドタオルを取り出して顔を覆った。三分近く保健室にいたのだから汗なんてかいていない。けどタオルというのは肌触りが良くて、このまま机に突っ伏したかった。

「おい、和泉」

後ろで男子生徒の声がした。教室はみんなの喋り声で騒がしいはずなのに聞き取ることが出来たのは、和泉という言葉に対して敏感になっていたのかもしれないと思った。タオルをどかしてそつと振り向くと、直史と他の男子がクボタの方を見つめている。クボタはやつと全てのシャープペンシルを拾い終わった。

和泉は、きつと言わない。自分が落としたなんて、絶対に言わない。明は直史の様子を見て思った。

「いじめに合ったって勘違いしちゃうんじゃない？」

と笑いながら友達は直史を小突いていたが、彼はあからさまにクボタからも、友達からも視線をそらしていた。

……何故だかは分からないが、急激に怒りがわいてくるのを明は感じていた。それほど正義感が強いわけじゃないし、クボタに好意を持っているわけでもない。でも、今手に持っているタオルを投げつけたくなるような乱暴な感情が芽生え、全身の体温が一気に上がるような感覚がした。ふざけんな、この弱虫が。明は心の中でそんな汚い言葉を呟いた。

「あ、俺トイレ行ってくる」

その言葉を明は聞き逃さなかった。考えるよりも先に身体が動いていて、明は廊下へ飛び出して直史を待ち構えた。

「和泉」

「何だよ。いきなり」

まさか入口で声をかけられるとは思っていなかったのだろう、口調は冷静でもその瞳はこぼれ落ちそうなほど見開かれていた。明は思わず笑ってしまう。怒りを覚えていたというのにこんなことで笑ってしまうとは。悔しかった。

「おい、人の顔見て吹き出すなんて酷くねえか」

「だって……あ、伝言。今井さんから」

「今井から？」

駆け足で教室を出てきたために傷口がちよっと痛むが、表情には出さないようにする。

「今日アタシの家に来いだって」

「え、お前いつ会ったんだよ」

「体育の時。今井さんは見学していて、私が保健室に行く時にちよつと喋ったの」

「保健室？」

「別に大丈夫だから」

直史が心配そうな表情をしたため、明は苛々していた。

「そっかよ」

ムツとした表情で直史が言ったので明は余計に苛々した。多分、直史に対する妬みのような感情もあったのかもしれない。直史はクボタに本当のことすら言えないくせに里恵の家に招かれているのだ、自分を差し置いて。

「もういいだろ」

うん、と小さく返事をしてうなずくと直史は背を向けて廊下を歩いていった。

「バカ」

誰にも聞こえないように明はつぶやいた。
二人は何を話すのだろう。

* * *

翌日、直史は学校に来なかった。皆勤賞を狙うって、友達と話していたくせに。

胸騒ぎがした。

第25章 引つかかれた。

さて、修学旅行の班を決める時間がやってきた。直史は欠席でもいつも遊んでいる男子達のグループに入れられるのだろう。既に決まって黒板に名前を書き込んでゆく男子の学級委員を明は横目で見ただ。男子はすぐに決まっとうらやましい。

「じゃあ、とりあえず人数は気にしないでグループを作って」

学級委員の野崎さんは、滑舌が良く声量もあるので全員に指示が行き届きやすい。しかしそれほど大きな移動をする者がいないのは、クラスの女子が集まった時には、既にグループで固まっていたからだ。

「じゃあ、そっちは丁度四人だから決まりだね。じゃあ後は……」

そうして野崎さんは手際良く班分けを進めてゆく。ジャンケンをするのを指示したり、他の子の意見を聞いたり。自分達のグループに言われることはもう分かっていた。

「明ちゃんとは三人かー。うーん……人数的に今井さんを入れてもらえれば助かるんだけど、入れてくれる？」

ほら、来た。ちょっと困ったような笑みで言う野崎さんの願いを断れる雰囲気ではなかった。女子全員が明達に視線を向けていた。

「……どうしても？」

口を開いたのはナツキだった。紀子が心配げな表情でナツキの顔を見つめる。それは明も同じだった。野崎さんはうーんとうなり、

「そうしてもらえると嬉しいなあ。早く決めないとうるさいし、担任」

と答えた。里恵を自分達のグループへ入れる方向へ話が進んでいると明は感じたが、皆も視線からしてそれを望んでいるようで、ここで嫌と言える空気ではない。勿論、ナツキも。

「……うん、いいよ」

渋々ナツキが了解すると野崎さんの顔がぱつと明るくなった。皆もほっとしたような表情をしている。丸く収めるには誰かの犠牲が必要なのだ。

「ありがとう。じゃあ私書いてくるね」

野崎さんの姿が遠ざかると明はため息混じりにつぶやいた。

「はあ……どうしよう」

「今井さん来るのかな？最近あんまり来ないし、もしかしたら来ないんじゃない？」

ナツキは貧乏揺すりをし、明らかに苛々している様子だ。明は知っている、どうやらナツキは野崎さんのことがあまり好きではないということを。

「来なければいいなあ……。私、今井さんと会話したことないんだけど」

先ほどまで無言だった紀子が不安そうに言った。やっぱり、明のグループは里恵と同じ班になったということを誰も快く思っていないのだ。他のグループは耳につく高い声で私語を交わしている。耳をすますと、京都に行ったらどこを回るう何をしよう、そんな内容ばかりだった。

確かに、来なければいいと思う。でも、修学旅行を機にまた元のように屋上で喋られる日々が戻るんじゃないかと淡い期待を抱く自分もいた。

そういえばクボタは誰と一緒にの班になったのだろう。彼と仲の良いものはいなかったはずだ。そう思って黒板を見ると、直史のグループに入っていた。班のメンバーを知ったら、直史も里恵を入られた自分のような心境になるのだろうか。そう考えると何故かほっとした。

和泉、風邪でもひいたのかな？

彼が来たのは丁度昼休み、明が満腹と春の陽気のせいであつらつらうつらとしていた真つ最中だった。

「あ、和泉だ」

先ほどまで明の肩を突っついていた紀子が言った。明がぱっと机から顔を上げると、視界の脇を誰かが通り過ぎた。

「おー和泉。お前、その目どうしたんだよ」

直史のすぐ近くの席に座っていた彼の友達が笑った。既に背を向けていたので顔は見えない。

「ああ、猫に引つかかれたんだよ」

答えながら、直史は机の脇に通学バッグをかける。その時に横顔がちらりと見えた。右目にはガーゼが当てられていた。

「マジかよー。ダサくね？」

「うるせえっ」

直史は笑って友達の頭を小突いた。あんなに身体の大きい男の子が、猫に引つかかれた……それは確かに間抜けだ。明もくすりと笑った。しかし紀子は素直に受け取らなかつたらしい。

「和泉って猫飼ってないよね」

「え？」

「だって、マンションじゃん」

でもマンションでもペット可の所はあるし、秘密で飼っている人だって沢山いるよと明は言おうとしたが、紀子の続けた言葉に口をつぐんだ。

「それに、『お前、猫なんて飼ってるんだ』って前男子と喋ってた。飼っているならそういう言い方はしないと思わない」

「あー、確かに」

なかなか観察眼が鋭い。紀子はまるでアニメの中の、犯人を探す探偵のような眼差しで直史を見つめている。明も頼杖をつきながら直史を観察した。もしもこの場にナツキがいたら、直接本人に訊いていたかもしれない。彼女は今給食委員の仕事をしていて教室にはいない。

「あ、でも野良猫に引っかかれたのかもよ？」

思い付いて言ってみた。すると紀子は名探偵のごとく、

「それはないね」

と立てた人差し指を振りながら否定した。推理ドラマの探偵に成りきるかのような彼女に、明だけでなく紀子自身も吹き出してしまった。

「それで、どうしてないと言い切れるの？」

「猫『なんて』って言うていたから。猫が好きなら『なんて』なんて言うのかなあ？ あ、シャレじゃないからね。あんなに背が高い和泉にジャンプして猫が届くとは思えないから、抱いて飛び降りるときに引っかいたしか有り得ないでしょ？」

「ほお……確かにそうだねえ」

筋の通っているような気の上ってしまう推理に明は納得してしまう。最後に紀子は、

「それに、和泉が猫を抱いている姿なんかあまり想像したくないもん」

と言い、明はノツポで頭の良い直史が、にやにやしながら名前通り猫なで声なんか出して猫を撫でている光景を想像してしまい、吹き出してしまった。

第26章 責任。

もしも紀子の推理通り猫に引つかかれたわけではないのなら、何故嘘をついたのかということだ。隠したい理由なのだろうか？ そういうことを考えると、直史の笑顔も仮面を被っているだけのように見える。

「……ま、どうでもいいや」

直史の怪我を負った理由なんて、明はあまり興味がなかった。

「えー、気になんないの？ スマイリー訊いてきてみてよ」

「やだよー。何で私が訊きにいかなきゃならないの」

「だって結構仲良さそうじゃん。たまに二人きりで喋ってるしさあ」

耳にへばり付くような声にはっとして直史から紀子に視線を移した。明の視線に気付いたのか、

「そんなんじゃないそんなじゃない。面白いなあって思っただけ」

「面白いつて何だよー」

「そういえば、和泉って小学生の時は結構モテてたんだよねえ」

「えっ」

それは初耳だ。紀子はぶっくりとした頬にえくぼを浮かばせている。

「私、和泉と同じ小学校だったんだよね。友達も言ってた、和泉のことが好きだった」

明はもう一度直史を見た。机から教科書を出す彼の後ろ姿は、隣の今井さんの机に腰掛けている他の男子よりも頭一つ分高く、きつとこのクラスで誰よりも目立つ。人は目立つ者に惹かれる本能がある。だから今のこの瞬間、直史に想いを馳せる人がいてもおかしくはなかった。

* * *

明から訊かなくても、直史は自分からカミングアウトした。

「この怪我、本当は猫に引っかけたわけじゃないんだよな」

掃除が終わり教室に戻ろうとした時に呼び止められ、美術室の前の廊下に二人きり。直史と初めて喋ったのもこの場所だったなあなんてふと思った。ロマンチックのかけらもないというのが残念なところだ。やっぱり恋愛とかには憧れてしまう。

「じゃあ何で怪我したの？」

相変わらず明は怪我の原因になんてあまり興味がなかったが、建て前として訊いておく。

直史が口を開きかけた時に後ろから足音が聞こえ、振り向いてみると音楽教師がこちらに歩いてきていた。

今日は、と明と直史が言うと教師は微笑みを浮かべ満足げにうなずきながら挨拶を返した。……ああ、これは絶対に誤解されている。

私と和泉はそんな関係じゃない、と心の中で言ってみたとこで、勿論教師に伝わるはずもなかった。つくづく人間って複雑だと感じる。

教師の姿が見えなくなってから直史は口を開いた。

「それでさ、実は……今井にやられたんだ」

苦笑しながら目にあてたガーゼを指差す。明は目を丸くしてガーゼを凝視した。どの程度の怪我なのかは知る由もないが、病院に行ったらしいしそれなりの傷なのだろう。

「マジで？」

「マジ」

「……どうして？」

直史は言うのを少しためらっているようだ、唇をなめて「うーん」とうなった。話すつもりがないのならわざわざ話しかけてこないですよ……なんて言えるはずもない。

「屋上に行って顔を会わせた瞬間、『お前のせいだ』って。そう言うって殴られたよ。顔面パンチなんて女のすることじゃねえよなあ」「凄っ」

思わず声を上げてしまう。里恵が直史を殴るシーンを想像してみようとしたが、そんな光景はドラマくらいでしか見たことがないのでうまく頭の中に描けなかった。

「あいつの爪でぱっくり切れちゃってさ」

「痛たたた」

「こういふ話は苦手だ。聞いているこちらまで痛くなってくるようだ。雑巾を持った二人の女の子が黄色い声をあげながら明達の脇を通り過ぎていった。」

「ていうことは、やっぱり安藤さんあれから来てないの?」

鼻から息を吐き出しながらうなずく直史。

「でも、別に私達のせいじゃないよね?」

「俺とお前を一緒にするなよ」

直史はムスツとしたような表情になった。自分でもこんな言葉が出るとは思っていなかった。明は直史の考えに大筋賛成をしていたから、責任を感じていたのだと思う。だから、私達だなんて言葉が出てきたんだ。

明はうつむいて自分の爪先を見つめた。上履きにマジックで書かれた『江川』の二文字はお世話にも綺麗な字とは言えなくて、何度か手洗いをしたせいでにじんでいた。

「正しかったのかどうかとかは置いて、少なくとも俺と江川の責任はあると思う」

責任、という言葉は心にずしりと来た。重い、言葉だった。

「でも私は安藤さんに酷いことは言ってないと思う」

「お前はそうでも向こうは違うかもしれないじゃんか」

嫌なことをいう奴だ。人の柔らかくて触れられたくない所をつつくような、そんな物言いを直史はする。

「とりあえず、今俺達が何をしても無駄だつてことだよ」

明は両手に拳を作り強く握った。何でそんな風に言い切れるの？
そんな風にすっぱりと割り切られるの？ でも口に出すことなん
て出来ない、明は黙ったままだった。

「あいつ、修学旅行には行くつて言つてたからさ。ま、頑張れ」

何を頑張れと言つているのかは分かっている。待ち遠しかった修
学旅行も、暗雲のような重い気持ちに心に垂れ込めることとなった。
話した内容も具体的に言つてくれないし、私は誰を信用したらいい
のだろう。

どんなことがあつても毎日は過ぎてゆく。時間が止まることなん
て有り得なかったのだ。修学旅行は刻々と近付いてくる。

第27章 修学旅行。

昨日はなかなか眠れなかった。楽しみな気持ちと里恵と同じ班だという緊張感が交錯し、布団に入っても頭は冴えたままだった。

只今の時刻は、午前五時を少し過ぎたところ。明は赤色の大きな旅行バッグを抱えながら駅まで歩いていった。静かな町中には朝もやがかかっており、冷たい空気が身体に染みる。まるで自分しか存在していないみたいで、何だかすごく気持ちが良かった。車の通りもほとんどない。

駅前まで来ると、数人の背広に身を包んだサラリーマンや地味な色のスーツをまとったOLなどが、カツカツと足音を響かせながら歩いていた。自分と同じように旅行バッグを持つ人も何人か見かける。あまりにも同級生らしき人がいないため時間を間違えたのかと心配になっていたので、その姿を見て安心した。

駅の階段付近には数十人の生徒と教師が立っていた。明はナツキ達の姿を捜す。ほどなくして、電柱に寄りかかるナツキの姿を発見した。

「おはよー」

明は駆け寄って挨拶をした。

「オハヨ。てか死ぬほど眠いんだけどー。スマイリー何時間くらい寝た？」

「私だつて眠いよお。ナツキは何時間寝た？」

「うーん……四時間くらいかな？」

「じゃあ私の方が短いや。三時間半くらいだもん」

四時間も三時間半も大して変わりはないのだが、負けたくないと思ってしまう自分がいる。明は旅行バッグを地面に置いてあくびをした。

「紀子ちゃんはまだ来てないんだ」

「うん、あいつはよく寝坊するからねー。あの人は多分来ないだろうし」

再び出ていたあくびが途中で止まってしまった。あの人、というのは彼女のことだ。

「今井さんは来るらしいよ」

「え、何でスマイリーが分かるの？」

ナツキが目をくりつとさせて訊いてきた。まさか和泉が言ったなんて言えないし、マズいなあ。明はめぐるましく頭を回転させて適当な理由を探した。しかし良い理由が見つかるはずもなく、仕方なくとっさに思い付いた言葉を口にしてみる。

「……占い」

「は？ 占い？」

思った通り、ナツキは怪訝そうな表情になった。何か付け足さなければと再び頭を回転させて、

「あの、えっと……タロット占い！ 私の友達がそれ得意で結構当たるんだ、それでこの前占ってもらって今井さんは来るかもしれないって結果になったの」

自分でも何を言っているのかと思いつながら明はいつぺんに喋った。

こんなことを口走ったのは斐羅のことが頭にあつたからだ、と気付いたのは後に落ち着いてからだ。

「……ふーん。そうなんだ」

どうにか納得してくれたようでほっとした。スカートで手のひらにかいた汗を拭う。

「スマイリーって今井さんと喋ったことあるの？」

「……うん、少しはね。同じ班だし」

半分ホント、半分嘘。喋ったことがあるのは事実だが、学校外で何度か会話をしていたのだから『少ない』とはとてもじゃないがいない。

その後数言言葉を交わすと会話は途切れ、明は黙って他の生徒達を観察した。段々人数は増えてきていて、班員全員が集まり駅へ入ってゆく生徒達もいる。掲示板の前に集まった三人の女子の中に二年生の時の友達がいた。そこからちよつと離れた場所に、一年生の時に初めて隣の席になった男子が一人でいた。

もしも、一年生の時のクラスで、または二年生の時のクラスで修学旅行に行っていたら……。何年生の時が一番良かったらどうか。いつだって友達と過ごすのは楽しかったし、気を使ったり多少嫌な思いをすることもあった。だから比べられるものではないだろうし、答えは出ない。

「あ、来た」

考えるのを中断してナツキの視線をたどると、車から降りた紀子

の姿があつた。腕時計に目を落とすと、待ち合わせ時間より七、八分過ぎていた。

「ごめんね！ アラームかけ忘れちゃってさあ」

明達の元まで小走りで来たせいで、紀子の呼吸は少し乱れていた。

「まあ、別にいいよ。じゃああと一人か……」

「来ないんじゃない？」

「でも明の友達がやった占いで出たんだよね？ あの人は来るって話を蒸し返されて少し戸惑ったが、うなずいておくことにする。続々と駅に入つてゆく生徒が増えていた。明より後に来た班までも出発してしまっている。班員全員がそろわないところを動くことは出来ないのだ。」

「うち、先生に訊いてみる」

返事も待たずにナツキは近くに立つ教師の元まで行った。それなりに距離があるので会話の内容までは聞き取れない。明の脇を直史達の班が通り過ぎた。三人の少し後ろをクボタがついて行っている。階段を上る直前、直史が後ろを振り向いた。きつと、里恵が来ているか気になったのだらう。

「欠席の連絡は来てないって」

ナツキは戻つてくると溜め息混じりにそう伝えた。もう一度時計を確認すると、待ち合わせ時間から一五分が過ぎようとしていた。

「遅い。これは絶対寝てるでしょ」

「私もそう思う。夜とか遊んでそうだしね」

もし、このまま来なければ緊張のない楽しい三日間を過ごすことが出来るだろう。そう考えると全身の力が抜けるようだった。

「遅れてごめん」

突然聞こえてきたその声に、明だけでなくナツキや紀子もびくりとした。振り向くとそこにいたのは、やっぱり彼女だった。

第28章 悪かったよ。

里恵は髪を一つに束ねていた。髪を縛りなさいと教師に注意をされても決して束ねなかったのに。髪型以外はいつも通りの彼女だった。

ナツキと紀子に視線を向けると、二人も自分と同じように目をぎよろぎよろと動かしていた。誰か喋ってくれというかのよう。

「ふーん、皆シカトするんだ？」

里恵が言った。何か言わなければと思ったが、頭が真っ白になって言葉が出てこない。里恵が怖く感じた。

「うっん！ じゃあ皆そろったから行こうか？」

場に合わない明るい声を出すナツキ。彼女のおかげで明は救われた気持ちになった。そうだね、と明と紀子はうなずく。

「じゃあ先生に言ってくるね」

そう言つとナツキは走っていった。また沈黙が訪れる。

「……」

明は何も言えなかった。紀子がいるのに話せる訳がない。口には出さなくても、今井さんと仲良くしてはいけない、という決まりが存在しているかのような状況で話しかける勇気は明にはなかった。

「江川さん」

名前を呼ばれてびくつとした。まさか、里恵の方から話しかけてくるとは想わなかった。

「……何？」

「この前は悪かったよ」

「え……」

まさか、里恵の方から謝ってくるなんて。どんな風の吹き回しだろう。

「この前って？」

紀子が口にした。まさか彼女は明と里恵が時々会っていたなんて思いもしないだろう。

「何でもないよ。ちょっと話しただけ」

明は早口でそう言って笑顔を浮かべた。

「そっやってスマイリーの仮面を被るわけ、か」

里恵が低い声でぼそつと言った。そうだ私は仮面をかぶっている。

明は自分の心を見透かされたような気持ちになった。

しかしこの仮面は絶対に剥がせない。

「先生に報告してきたよ。じゃあ、電車乗ろつか」

ナツキが戻ってきた。明はまた救われた気持ちになった。

電車の中では里恵と一言も話そうとはしなかった。ナツキや紀子

とお喋りをする明。里恵は窓の外を無表情で眺めていた。明はまだ里恵に謝っていない。けれど人前では絶対に謝れない。明は謝るタイミングを探していた。

「トイレ」

東京駅に着くと里恵が口にした。

「あつ、私も」

明も急いで里恵の後を追う。もちろん、ナツキたちには里恵の後を追っていると気付かれないように。

「皆の前ではシカトするんだね、アタシのこと」

里恵はトイレに入るなりそう言った。

「……ごめん」

明は目を伏せる。里恵は苛ついた様子で腕組みをしながら言った。

「それで、言いたいことは？」

「その、どうして今井さんが謝るのになって」

「あなた、ばつかじゃないの？」

「そんな……」

今井さんに言われたくない、というのは言わないでおく。

「あの時は言い過ぎた。だから謝ったんだよ。それよりも、江川さ

んに力を貸してほしいんだ」

「私の力……？」

「斐羅が、あれからうちにも屋上にも来てないんだ」

第28章 悪かったよ。(後書き)

何年も投稿していなくて本当にごめんなさい。体調不良により小説を書ける状況ではありませんでした。これからまたしばらくの間お付き合ひ頂ければと思います。

第29章 未来。

「安藤さんが……」

「電話しても出ないんだよ」

里恵は苦い顔をした。

「家には？ 行ったの？」

「行けねえよ。明らかにアタシのこと避けてるんだし」

「でも……私に出来ることなんてあるの？」

幼なじみの里恵ですら無理なことを、自分は何が出来るというのか。里恵がトイレの個室に入ったので、明はこの前斐羅に言ったことを思い出していた。色々な道があるし、諦めることなんてない。この発言にどんな問題があったのだろうか。分からない。でも、直史は『俺たちの責任』だと言っていた。

「ねえ、今井さん」

トイレから出てきた里恵に訊いた。

「安藤さんのこと、傷つけちゃってごめん。でも、私にはどこが悪かったか分からないんだよ」

すると里恵は流しに唾を吐いた。

「分かんないなら教えてやるよ。斐羅にはな、未来なんて見えていないんだよ」

「え……」

「今生きることで精一杯なんだよ。だから将来のことを話すと斐羅は嫌がるんだ」

そういうことだったのか。胸のつかえが取れた気がした。明は大
事なことを訊こうとしたが、トイレに同じ中学の人が入ってきたの
でつい無言になる。里恵から視線を逸らして、手なんか洗ってみた
りして……。

「じゃあ、今日も頑張れよ、スマイリー」

通りすがりに耳元で言われた言葉は、皮肉にしか聞こえなかった。

「スマイリー遅ーい」

トイレから出るとナツキに言われた。

「ごめんごめん、便器に収まりきらなくて」

「ちょ、それだけ溜めてんだしー！」

ナツキと紀子が笑う。

「じゃあ並ぼつか」

「そうだね」

そして先生の長つたらしい話を聞いた後、明たちは新幹線に乗っ
た。席順は明の隣に里恵、ナツキの隣に紀子。

「お願いっ、スマイリー。今井さんの隣になつて」

と言われて決まった席順だ。明が人の頼みを断るといふことはめ

ったになかった。

里恵は頼杖をついて窓の外を眺めている。明は周りを気にしながら、小声で里恵に話しかけた。

「ねえ、今井さん」

「何だよ」

先ほど訊けなかったことを訊く。

「私の力を貸してほしい、って言ったけど私に何か出来ることがあるの？」

「ある」

「何？」

「一緒に斐羅の家に行ってくればいい。もちろん、直史も」

里恵は明の目を見つめた。

「……そんなことでいいの？」

「みんな仲良くなれば、斐羅だつて戻ってくれるかもしれない」

屋上で里恵と直史が言い合ったのを思い出した。

「じゃあ、和泉にも話をしないと、」

「スマイリー」

ナツキの声だ。振り向くと、後ろの席で彼女が手招きしていた。

「ちょっとごめんね」

そう言い残してナツキと紀子の元に行く。

「スマイリー、一緒にトランプやるよ」

「うん……」

「ねえねえ、さっき今井さんと何話してたの？」

そう訊いたのは紀子だった。明は唇を噛む。

「いや、ちょっと……」

「ちょっとって？」

「そんなことまで話さないといけないわけ？ 『トモダチ』って」

里恵が振り向いて言った。紀子の目が大きくなる。

「いや、でもやっぱり気になるから……。今井さんってあまり他の人と話さないじゃん？」

ナツキが焦りの色を見せながら言った。

「話そうとしてこないだけじゃんよ」

沈黙。明には他の生徒の笑い声が遠く聞こえた。

「ねえっ、今井さんも一緒にトランプやらない？」

明が精一杯の笑顔で言った。

「アタシはパス。その人たちに嫌がられてるみたいだからさ」
「そんなことないよ、ねえ？」

と明が言った。

「そ、そりゃ勿論」

そう言ったナツキの笑顔は引きつっていた。

「もうちょっと嘘が上手くなってからにしま」

そう言って里恵は顔を前に戻した。ナツキと紀子は顔を見合わせた。明は耐性が付いたのか、さほど驚いてはいなかった。

「何、あの態度」

ナツキが呟いた。

「ねー！ 最悪じゃん」

紀子が目をまん丸にさせた。

「スマイリーはどう思う？」

「えっ……」

「もしかしてあんな人のことが好きなの？」

ナツキが『あんな』のところを強く発音した。それでああ、わざと里恵に聞こえるように言っているのだと分かった。里恵のことは嫌いではない。しかし、本当のことを言ったら八布られるかもしれない。明はしばらくの間口を開けず、下を向いていた。

「ぼそぼそ喋ってんじゃねえよ。アタシのことが嫌いならはっきり言えよ」

里恵がもう一度振り向いた。そして明に顔を向けると、

「江川さんもアタシのこと嫌いなの？」

と訊いた。明の心拍数が速くなる。好きだと言ったらナツキと紀子に嫌われる。嫌いだと言ったら今井さんに嫌われる。まさに板挟み状態だった。

「私は……」

脳裏に浮かんだのは里恵から缶ジュースをもらったときのこと、屋上で「江川さんもまた来てほしい」と言った笑顔、そして斐羅、直史。

「私は好きだよ、今井さんのこと」

はっきりとそう口にした。

第30章 スマイリー。

「え……」

ナツキと紀子が口にした。

「私は好きだよ、今井さんのこと」

明が再び言った。それには里恵も驚いた様子で、

「マジかよ……」

と言った。

「みんな、今井さんのこと誤解してる。いい人だよ、今井さんは」

明がきつぱりと言った。

「そんなこと言って大丈夫なのかよ」

里恵が心配した様子を見せた。こんなことを言ったらグループからハブかれる可能性があることは、明が一番良く分かっていた。

「いつのまに今井さんと仲良くなったの？」

紀子が訊いてきた。

「少し前。今井さんの家にも行ったことあるよ」

「スマイリー……」

「私、トランプ止める。今井さんの隣に戻るね」

そう言っつて明は啞然としている二人を横目に、里恵の隣に座った。

「いいのよ。あんなこと言っつて。グループに戻れなくなるぞ」

「いいの。もうスマイリーは止めにした」

斐羅のことを聞いたときに芽生えた決意。彼女が気になってしょうがなかった。

「なあ」

「ん？」

「明、っつて呼んでもいいか」

明が里恵の目を見た。里恵はまっすぐ明を見つめていた。

「いいよ。私も今井さんのこと、下の名前で呼んでいい？」

里恵は前髪をかきあげた後、「いいよ」と言っつた。明は嬉しくて、ガッツポーズをした。

「里恵、安藤さんに仲直りしたつて報告しようよ」

「まだだ。直史と仲直りしてない」

明は直史の姿を搜した。すると彼は、後ろの方の席で隣の男子と話していた。

「んじゃ、突撃しますか」

里恵がにやりと笑っつた。

「はいっ」

明は敬礼のポーズをした。里恵は立ち上がると、何の迷いもないように一直線に直史の元へ行つた。明も後に続く。

「直史」

直史は目を丸くさせた。

「何だよ、今井」

そういえばクラスメイトの前で里恵と直史が話しているのを見たことがない。周りの目を気にしているのだろうか。直史が明を見た。明は目をそらさなかった。

「話がある。ちょっと来い」

そう言つて里恵は直史に背中を見せて歩き出した。

「お願い。来て」

明も頼んだ。すると直史は頭をかきながら席を立つた。

里恵は自分の席に座ると、

「この前は殴つて悪かった」

と始めに言つた。

「今井が謝るなんて雪でも降るんじゃないかねえのか」
「うるせえよ」

里恵が笑った。

「京都に着いたらアタシのいる部屋に來いよ」

「え、ヤダよ。勘違いされそうじゃなか」

「もう遅いんじゃないかねえか」

直史が周りを見渡した。すると明たちの方を見ている生徒が沢山いた。ナツキと紀子もこちらを見てなにやらひそひそ話をしている。

「和泉、私たち勘違いされてるよ」

明が眉をひそめた。

「……分かったよ。行きゃいいんだろ」

「よし、じゃあ話は終わり。自分の席に戻りな」

「和泉、ごめんね」

自分の席に戻る直史をみんなが不思議そうな顔で見ている。

第31章 板挟み。

京都に着いて明が一番先に目を止めたのは茶色い外壁のマクドナルド店だった。他の建物も皆茶色く、遠くにはお寺が見えた。東京よりも少し涼しく感じた。

「斐羅は修学旅行に行かなかったんだ」

ホテルへ向かうためのバスに乗るなり里恵が言った。明は隣の椅子に腰を下ろして、

「安藤さん、いつから学校行ってないの？」

と険しい表情で尋ねた。

「中一の一学期から」

「じゃあ、もう二年も行ってないんだ」

「ああ」

明は少し迷ったが、「何で行かなくなったの。私、まだ具体的な理由聞いてない」と言った。

「だから、真面目だからだよ」

里恵が苛ついた様子でトップコートの塗られている爪を触る。

「どうして真面目だと行かないの？ 里恵が言うほど学校は腐ってないよ」

「あー、もうめんどくさいなあ。明は『友達』と一緒にトイレに行

ったり興味のない話題に付き合ったりするのが嫌じゃねえのかよ」

里恵の声が大きくなった。明は椅子に深く腰掛け直すと、

「私だって嫌だよ。でもそれだけで不登校になるなんておかしいよ。他に何かあるんじゃないの？」

「それは本人に訊けよ」

「聞きづらいから里恵に訊いているのに」

里恵が大きいため息をついた。

「話してくれるまで待つってことが明は出来ないのか？」

「だって気になるんだもん」

もう一度ため息をついてから里恵が言った。

「いじめだよ」

思ってもいない言葉に明は目を丸くして「えっ？」と言った。

「だって安藤さん、いじめはなかったって……」

「いじめられたのは斐羅のグループにいた奴。いじめていたのはグループの奴ら」

里恵は制服のポケットからリップを取り出すと乾いた唇に付けた。

「斐羅はどっちの味方にも付けなかったんだよ」

そう言って前を見つめた。明はクラスメイトの喧騒が水の中に入っているときのようにはんやりとしか聞こえなかった。

「それに、耐えきれなかったんだ……」

「それが原因の一つだな。何せ斐羅は真面目だから、冗談で言われたことも気にするし……。だからと言って、グループを抜けるのも難しかった」

「そりゃ、難しいよね……」

グループの複雑さは明がよく知っていた。グループが分裂したときのあの「スマイリーはどこちに入るの？」なんて言葉、その言葉に何度苦しめられただろう。板挟みにされていていじめを止めることが出来ない斐羅。それはどれくらい彼女にとって辛いことだったのか。明には想像が付かなかった。

「本当に喋ってるよ」

「信じらんない」

後ろの座席から声が聞こえてきた。おそらく自分たちのことを言っているのだろう。ナツキと紀子だろうか。

「そういう訳で斐羅は学校へ行ってないんだ」

「ありがとう、教えてくれて」

明が言うと里恵は照れくさそうに横を向いた。

第32章 仲直り。

バスから降りると明たちが泊まるホテルが見えた。大きくて真っ白な建物だった。窓ガラスが日光を反射して輝いている。明は眩しくて目を細めながら、

「あそこに泊まるんだ」

と言った。

「アタシ、寝相悪いけどよろしくな」

里恵が水筒に入っているお茶を飲みながら明の隣を歩いた。

「私の布団に入ってこないでね」

「そんな約束は出来ねーよ」

目の前ではナツキと紀子が仲良さそうに歩いていった。もうあの中には入れないのだろうか。そう思うと少し哀しくなった。

「ねえ、修学旅行終わったらなるべく学校に来てよ」

「えー、やだよ。時々でいいだろ」

「だって私、もう元のグループには戻れないかもしれないんだよ。一人で休み時間を過ごすなんて耐えられない」

里恵が明の方を向いた。薄い眉を上げる。

「アタシは平気だけど」

明は眉間にシワを寄せて、

「平気なのは里恵くらいだよ」

「クボタだって一人じゃん」

思いもよらない名前が出てきた。クボタ。新幹線に乗っていると
きも、彼は一人で座席に大人しく座っていた。暗い表情で。笑った
顔は見たことがなかった。

「クボタだって好きで一人でいるわけじゃないって。私、一人が嫌
なんだよ」

「一人なのをみんなに見られるのが嫌なんじゃねえの」

明はドキツとして里恵の目を見た。茶色い瞳に切れ長の二重の線
が綺麗。この性格とギャルっぽい見た目を変えたらモテるだろう
な、と思う。

「……何だよ」

里恵の顔をじっと見ていることに気が付いたのだろう。

「いや、何でもない」

「何でもなくないだろ。やっぱり凶星なのか？」

「ああ、その話……。確かに、一人でいるところをみんなに見られ
るのはキツイ」

「他人の目なんか気にしなければいいのに」

里恵はお茶を一口飲んだ。孤高、という言葉が当てはまりそうな
強さ。社交辞令も一切ない、はつきりとした性格。そうだ、こうい
うところに自分は惹かれていたんだ。明は思った。

「私も里恵のようになりたいな」

明は唇を尖らせた。

「アタシと一緒にいれればなれるよ」

「嘘、安藤さんは里恵と違って真面目で大人しいじゃん」

「今は、な」

里恵の言い方に引っかけかりを覚えた。昔は？ と訊こうとしたが、ホテルに辿り着いてしまったので言葉を飲み込んだ。

先生の話が終わると、明たちは部屋へ向かった。里恵がパンパンになった赤い旅行バッグを運ぶ姿は、ピヨコピヨコと歩くペンギンのようで可愛らしかった。明はグレーの旅行バッグを部屋の端に置くと、ふうつと一息ついた。

「疲れたね」

「ああ」

里恵も隣に旅行バッグを置く。明は旅行バッグを下ろしたナツキと目が合った。逸らしたのはナツキの方だった。ナツキは座って一休みしている紀子の肩を叩き、里恵の方を見ながら小声で何か言っていた。

「何なのあいつら。ウザくねえ？」

里恵がナツキたちにも聞こえるような声で言った。ナツキと紀子の顔がこわばる。

「言いたいことがあるなら直接言えよ」

ナツキと紀子が目を合わせた。重苦しい沈黙が訪れる。それを破ったのはギャル系の由紀たちの声だった。

「おー、広いじゃん」

由紀が靴を脱ぎながら言った。

「ナツキ、紀子、スマイリー、三日間よろしくねえ」

そこに里恵の名前はなかった。明は悪意を感じた。ギャル系の間でも、里恵は嫌われている。

「今井」

直史がドアを開けた。

「女の子の部屋のドア開けるなんて、和泉へんたいい」

由紀が歯肉を見せながら言った。

「しょうがねーだろ。呼ばれてたんだから」

「うつそー、和泉って今井里恵と付き合ってたの？ 超イメージダ
ウンなんですけど」

「ちげーよ」

里恵が腰を上げて、

「付き合ってたねーから」

と由紀の顔を見ながら言った。

「行くぞ、明」

「あ、うん」

明も慌てて立ち上がり、部屋を出る里恵に付いていった。

「何か話でもあるのか」

廊下で直史が訊いた。

「ああ。とりあえず、仲直りしようぜ」

「俺は別に喧嘩しているつもりじゃないけど」

「斐羅が来ないんだ。電話にも出ない。メールも返さない。あの日以来」

「そうなんだ。安藤は頑固だからな、一度そうと決めたら徹底している」

「またみんなで仲良く屋上とかで話したいんだよ」

明が言った。

「でも俺の考えは変わんないからな。安藤は学校へ行った方がいい」

「直史、斐羅の気持ち考えてねえだろ。斐羅だって……本当は学校に行きたいんだよ」

「そうなの？」

明は驚きながら尋ねた。

「学校を休んでいるのがどれだけ苦痛だと思う？ 時々担任から電

話に来るんだぜ。まあ、アタシは平気だけど。楽しい学校生活を送りたいに決まってるじゃんか」

廊下を歩いている生徒が何事かとこちらを見ながら通り過ぎた。

「でも今学校に行っても楽しい学校生活は送れない、と」

「正解。明、察しいいじゃん」

里恵が手を叩いた。

「行きたくても行けないのか」

直史が顎に手をやりながら言った。

「そういうこと。ちょっとは分かってくれた？」

「ああ。もうむやみに学校行けとは言わねえよ」

「じゃ、仲直りな」

里恵が微笑みながら右手を出した。直史はちょっと困惑した様子
で、

「握手しなきゃいけないのかよ」

と言った。

「え、直史、もしかして恥ずかしいの」

「そんなことないけど……」

そう言いながらも、直史の顔は紅潮していた。可愛い、と明は思った。恋愛対象じゃないと言いながらも、女の子だと意識している

ではないか。

「分かったよ」

直史はそう言って、素早く握手をした。

「これで斐羅もきつとまた来てくれる」

里恵は笑顔を見せた。この日最高の笑顔だった。

第33章 新情報。

「アタシ、斐羅に電話してみるよ」

「え、だって携帯電話は持ってきちゃいけないって……」

「そんなの関係ねえよ。明の『トモダチ』はお風呂に入りに行ったから当分戻ってこないだろ」

里恵はスカートのポケットから青い携帯電話を取り出すと、ボタンを押した。

「でも、安藤さん電話に出ないって……」

「留守電に入れるんだよ」

里恵はそう言って携帯電話を耳に当てた。しばらくの時間が経った後、こう口にした。

「もしもし、斐羅？ アタシたち、仲直りしたから。直史と明と。だから、だから来るのを止めるなんて言うなよ。またみんなでお喋りしよう？ 今、修学旅行なんだ。だからメール、待ってるから」

里恵は電話を切った後もしばらく本体を見つめていた。

「通じた、かな？」

明が訊く。

「だといいけど」

里恵は大切そうに携帯電話を閉じた。

「じゃ、風呂入るか」
「そうだね」

そして明たちは風呂場へと向かった。脱衣所で沢山の裸体が目に入る。裸になるのがちよつと恥ずかしくてもたもたしている明をよそに、里恵は勢いよくブラジャーを外した。大きな胸だった。そしてパンツも脱ぎ、一糸まとわぬ姿になった。明は里恵の裸体について見とれる。この姿を知っている男がいるのだろうか。援助交際の噂が頭をよぎった。

「明、早く」
「う、うん」

明も仕方なく全てを脱いだ。片手で胸を隠しながら、風呂場に入った。

隣で髪を洗う里恵を見ながら言った。

「ねえ、何で髪の毛染めてんの？」
「みんなと同じは嫌だからだよ」
「でも、不良ってみんな髪染めてるじゃん」
「アタシは不良じゃねえよ」

泡の付いた髪のまま里恵が立ち上がった。まさかそんなに過敏な反応をされると思っていなかった明は、

「い、いめた」

と謝った。

「アタシはな、万引きも恐喝もしない人間なんだよ」

「そうだよね。里恵、優しいもんね」

「モチ」

里恵がやっと座ってくれた。明は止まっていた身体を洗う手を再び動かした。

「スマイリー！」

後ろから声をかけられたので振り向くと、そこにはナツキが立っていた。

「……何？」

シャワーで泡を流しながら訊く。

「一緒に湯船入ろう」

「え、でも……」

里恵を好きだと言ったあの時から友情なんて壊れたんじゃないのか。ナツキはシャワーの蛇口を閉めると、無理やり明の腕を引っ張って湯船へと連れて行った。湯船には紀子が浸かっていた。

「スマイリー。今井さんの新情報、教えてあげるよ」

ナツキが抑揚のない声で言った。

「何……？」

「やっぱり、援助交際の噂は本当らしいよ」

ドキン、ど心臓が脈打つ。嘘だ嘘だ、そんなはずない。

「証拠はあるの？」

「私、見たもん。オジサンとホテルに入るところ」

紀子が言った。

「スマイリー、そんな奴と付き合う気？」

ナツキが訊いてきた。明は何も言えなかった。

第34章 ……ありがとう。

布団に寝転がりながら里恵は言った。

「それにしてもさー、奈良公園ってあんなにも汚いわけ？ 鹿のうんこでいっぱいじゃん」

「うん……」

明が髪をとかしながら曖昧に答えると、里恵は寝返りをうつて肘を付いた。

「何かつれないじゃん。どーした？」

「ううん、別に……」

あの後、結局明は何も言い返せなかった。スマイリーが戻ってくるの待ってる、と言われたときにはどれほど嬉しかったか。自分も里恵みたいに悪口を言われる運命なのだと思っていた。なのに、ナツキたちは戻ってきてもいいと言ってくれた。私はどうしたらいいの？ 人に合わせるのはほとほと疲れたけど、ナツキたちが嫌いなわけじゃない。それに、里恵は……。

本当、なのだろうか。でもまさか本人に訊けるわけない。そうだ、斐羅はどうだろう。しかし、まだそれほど親しくなっていないことに気付いた。もう少し仲良くなって、そしたら安藤さんに訊いてみよう。明は思った。

「明、部屋出るよ」

里恵が突然身体を起こして言った。明は「え？」と言いながらも里恵に引っ張られるようにして部屋の外を出て階段へと向かった。

「何なの……？」

「メールが来た。多分、斐羅からだと思う」

そう言っつて里恵はポケットから携帯電話を出した。新着メール、一件。メールを開いてみると、やっぱり斐羅からで、こご書かれてあつた。

『ありがとう。』

でも、私なんかが里恵たちのところに行つていいのかな？ 私、迷感じゃないかな？

修学旅行、羨ましいな。楽しんできてね』

羨ましいな、の後に泣いている絵文字が付いていた。明の胸がずきりと痛んだ。

「誰か来たら教える。斐羅に電話してみるから」
「うん」

電話をかけてすぐに里恵の口が動いた。

「あ、もしもし？ 斐羅？ 良かったよ、出てくれて。ああ、今は大丈夫。本当、仲直りしたからさ。直史も分かってくれた。斐羅は何も間違っちゃいないんだから。あ、明？ 隣にいるよ。友達だからな」

友達だと言っつてくれているのに援助交際を疑っていることに後ろめたさを感じた。思わず下を向く。

「……うん。じゃあ、修学旅行が終わつたらまた屋上で。え？ 明

に？ 分かった」

里恵は耳から携帯電話を離して明に渡した。

「斐羅が明に代わってほしいって」

「え？」

戸惑いながらも電話を代わる。

「もしもし、安藤さん……？」

「……江川さん？」

「うん」

「その……ごめんね」

「謝るのはこつちだよ。安藤さんの気持ち分かってあげられてなかった。ごめんね」

「ううん……」

沈黙。斐羅の息づかいが電話口から聞こえてきた。

「また、屋上に来てくれる？」

「……いいの？」

「来てほしいんだよ」

「……ありがとう」

じゃあ、と言って明は電話を切った。また、安藤さんはきつと来てくれる。そう思うと嬉しくなって飛び上がりたいほどだった。

「良かったね。安藤さん、また来てくれるみたいで」

「ああ。仲直りしてくれた明のおかげだよ。サンキュ」

「うん」

携帯電話を返す際に指が触れた。この指が男を知っているなんて、そんなこと、考えたくなかった。

「里恵は……悪いことしないよね」

つい口に出してしまった。

「……ったりまえじゃん」

表情が陰って見えたのは気のせいだろうか？ 気のせいであってほしい。

「じゃ、部屋戻るぞ」

明は里恵に付いていった。

寝る時間になり消灯してから、里恵が小声でこんな話を聞かせてくれた。

「小六の頃、斐羅と直史ともう一人の男子と肝試しで廃墟になったアパートに入ったことがあるんだよ。そしたら、トイレの水がいきなり流れてさ」

「え、廃墟なのに水が……？ しかもいきなり？」

明は怯えた表情になった。

「そう。一目散に直史が逃げ出そうとしたんだけど、斐羅が手を押さえて。そしたらその後何が起きたと思う？ 女の人のうめき声が聞こえてきたんだよ」

「やだ、怖い、怖いよ里恵」

明は横に寝そべっている里恵の腕をぎゅっと掴んだ。

「アパートを出てから直史が熱を出して三日間学校を休んださ。今思えば、行く前に斐羅がタロットで占ったら死神のカードが出ていたんだよな」

名前だけで不吉な匂いがぶんぶんするが、「そのカードってどういう意味？」と訊いてみた。

「危険、災難、病気。斐羅の言う通り、止めといた方がよかったんだよな。アタシと直史は先にアパートから出てきたんだけど」

「ひどーい、安藤さん置いてけぼり？」

「もう一人の男子は見た目も心もとても頼もしかったから大丈夫だと思っただよ」

「ぶんぶん……」

そう話しているうちに、里恵は寝息を立て始めた。無防備な寝顔。やっぱり、援助交際なんて嘘だろうか？ 里恵がやるはずない。そう思っても、心の引っかかりは取れないままだった。

第35章 隠し事。

「つまんねー。寺見て何が楽しいんだよ」

「でも、金閣寺綺麗だったじゃん」

タクシーの隣に座る里恵に言った。一緒に乗っているナツキと紀子は無言だった。この日、明たちは専属のタクシーでお寺巡りをしていた。

「次行くところには恋の神様がいるんだって」

「寺なのに？」

「うん。里恵は……付き合っている人とかいるの？」

「ここで発表するの？」

里恵はナツキと紀子の方を見た。二人は下を向く。明が、

「あー……」

と声を漏らした。気まずい沈黙が流れる。

「ねえ、スマイリーは？好きな人いるの？」

紀子が場に合わない明るい声を出した。

「えー、私い？いないよー。紀子ちゃんは？」

「私は……」

ちらっと紀子が里恵の方を見た。そして言った。

「……今井さん、和泉って彼女いるの」
「えっ！」

明は背もたれに寄りかかるのを止めて声を出した。里恵は一瞬目を大きくして、

「……へえ、直史ってモテるじゃん」

と言った。

「でも何でアタシに訊くの？」

「和泉と仲いいみたいだから……」

「いたらどうすんの？ 諦めるの？」

「分かんないけど……」

里恵がふっと笑った。

「安心しな。あいつに彼女はいないよ」

「本当？」

「ああ」

「好きな人も？」

「それは知らねえな。本人に訊けば？」

「そんなこと出来ないよう……」

「それにしても恋ってすげえな。嫌いな人にまで訊けるパワーを持っているんだもんな」

それは嫌味にしか聞こえなかった。嫌いじゃないよ、という紀子の小さな声を里恵は聞こえないかのように無視した。

恋の神様がいるという寺に着くと、明はその周りを三回回ると恋

が実るといふ石の周りを回った。

「私、本当は好きな人いるんだ。ナツキたちには内緒ね？」

「誰だよ」

「山本くんっ」

同じクラスの男子だ。

「里恵は石の周り回らないの？」

「アタシはいいよ」

「やっぱり付き合ってる人いるの？ ナツキたちあっちにいるから

聞こえないよ」

「……言いたくない……」

そう言った里恵の顔は、今までに見たことのない暗いものだった。明は驚いた。

「里恵、どうしたの？」

「いや」

これ以上話したくない様子なので、明もそれ以上は訊かなかった。

「あ、和泉じゃん」

他の寺を回っていると、直史のグループと会った。グループの男子と仲良さそうに話している。ただし、クボタを除いて。クボタはパンフレットをじっと見つめていた。と、彼が転んだ。しかしグループの男子は誰も声をかけようとはしない。直史がちらりとクボタを見たが、すぐに視線を逸らした。

「クボタって本当ドジだよねー」

ナツキが紀子に話しかけた。

「ドジっ娘って奴？」

「全然萌えねー」

二人は笑った。今までの明だったら一緒に悪口を言っていたことだろう。

「クボタ、ヤバいぞ」

里恵がナツキたちに聞こえないよう小声で言った。

「ヤバいつて？」

「あいつ、いつかいじめられるぞ」

「……かもね。杉沢が退院したら危ないかも」

校舎から転落した杉沢。あの事故に、本当に里恵は関わっていないのか、未だに分からなかった。杉沢、という言葉に里恵の肩がびくりと動いた。

「里恵？」

「……何でもねえよ」

またもや何も話したくない様子でそっぽを向いた。里恵は何か隠し事をしているのではないか？ 明の頭に疑問が浮かんだ。援助交際だって、もしかして本当は隠れて。考えたくないのに考えてしまう。

「いじめないよな？」

「え？」

「明はいじめないよな？」

「あ、当たり前じゃん」

「いじめなきや他の奴らにいじめられることになってき、いじめないよな？」

「……うん」

本当は自信がなかった。

第36章 ヤリマン。

別の寺では由紀たちのグループと会った。

「おっ、ナツキに紀子にスマイリーじゃーん」

「お茶飲んできた？」

ナツキが訊いた。

「うん。うまかったー」

「かなり濃いよね」

紀子が言う。そしてナツキと紀子は楽しそうに会話を続けた。

「アタシ、由紀たち苦手」

里恵がぼそつと言う。

「え、どうして？」

「団体行動命！ っるところが」

「スマイリー、由紀たちと一緒に写真撮ろっ」

とナツキが話しかけてきた。

「……私？」

「そっだよ。ほら、おいでおいで」
「でも……」

里恵の方を見た。

「あのさ、今井さん。これ以上スマイリーにまとわりつくの、止めてくれない？」

由紀は里恵の目の前まで近付くとそう言った。すると、里恵は声を出して笑った。

「何だ、はっきり言えるんじゃないの。陰口しか叩けないのかと思ったよ」

「なっ……」

由紀は怒りの表情を見せた。

「お前、馬鹿にしてんの？ 前から気にくわなかったんだよ」

「アタシもあんたのことは気にくわなかったよ」

「ふざけんなよ！」

由紀が今にも里恵につかみかかりそんな雰囲気だったので、明が中に入った。

「由紀、落ち着いて」

「スマイリーは今井さんの肩持つのかよ？」

「そ、そういうわけじゃないけど……」

「もういいじゃん由紀。今井のことはシカトしようぜ」

由紀の友達が呆れたように言った。

「そうだな。スマイリーも、分かっているよね？」

どういう意味かは明にも分かっている。自分もシカトをしろ、と

いうわけだ。もし、シカトをしなかったら。

「スマイリー、うちら友達だよね？ 裏切らない、よね？」

追いうちをかけるようなナツキの言葉。

「う、ん……」

明は里恵の方を見ないように下に下を向いて、うなずいた。後ろめたさが明の心を締め付けた。

「スマイリー、一緒にお風呂入るー」

「うん」

ナツキの声にうなずく。お寺巡りから帰ってきた時から、明は一度も里恵と口をきいていなかった。しかし、

「なあ、明」

風呂に行こうとする明の腕を里恵がとった。

「もうスマイリーは止めるんじゃないのかよ」

明はうつむいたまま、

「ごめん。私はスマイリー、やっぱり止められない」

と言って背を向けた。

「明……」

里恵は唇を噛み締めた。

「今井里恵の新たな新情報！ 聞きたくない？」

ナツキがにやりと笑った。

「何、それ」

明は出来ることなら聞きたくなかったが、僅かに好奇心の方が勝つてしまった。

「杉沢と一緒に歩いているのを由紀が見たことあるらしいよ！」
「杉沢と……？」

「そう。二人で仲良く歩いてたよ？ あいつって和泉ともできてんだろ？ ヤリマンじゃん」

一緒にいた由紀が言った。

「和泉とはできてないみたいだけど……」

紀子が遠慮がちに口を挟む。

「そうだよ。和泉みたいな優等生が今井さんのこと相手にするわけないじゃん」

ナツキが笑った。

「まあ、そうかもね。でも杉沢と付き合いながらエンコーしてるなんて、淫乱だな」

里恵はそんな人じゃない、と言えたらどんなに楽だろう。しかし、明は里恵の何を知っている？ 何も知らないじゃないか。杉沢が落ちたときに現場にいた里恵。もしかしたら、別れ話のもつれとか…？ 明は考えていた。

「あ、今井だ」

里恵が裸で風呂場に入ってきた。

「あの身体で何人もの男と寝てんだぜ」

「あそこ濡れ濡れ？」

下品に由紀とナツキが笑う。明は気持ちが悪くなった。早くここから出たい。何で自分はこんな人たちと仲良くしているんだろう。

そう思いながらも、結局、明は修学旅行が終わるまで里恵と一言も話さなかった。

第37章 いじめ。

修学旅行が終わって四日後、里恵は学校に登校してきた。明は逃げるように席を立ってナツキたちのところへ行った。

「あれっ……」

里恵が机の中を何やらごそごそ探しながら呟いた。そして、大きなため息を一つ。ちらりと由紀たちの方を見る。由紀たちは里恵の視線に気付いているのかいないのか、大声で笑っていた。

続いて、明たちの方にも視線を向けた。

「やだー、今井さんこっち見てるよ」

紀子があった。里恵がこちらに向かって歩いてくる。明は身体を強ばらせた。

「やったのはあんたたち？ それとも由紀たち？」

「ねえねえ、知ってる？ 今度この街で一青窈がライブするんだってさー！」

「マジ？ あー、でも私ファンじゃないからなあ」

里恵の問いを無視してナツキと紀子は話す。

「スマイリーは好きだったよね？ 一青窈」

「え、あ、うん……」

急に話を振られて戸惑う。

「やったのかやってないのかくらい答えろよ！」

里恵が苛ついた態度をあらわにした。

「何の話？」

ナツキがめんどくさそうに訊く。

「教科書。隠したの、お前ら？」

「そんなことしてないよ。ねえ？」

紀子がうなずく。すると里恵はふっと笑った。

「だよな。あんたたちは所詮他人に流されて生きているんだもんな」

流されて生きている。それは昔の自分。みんなと一緒に行動して、みんなと一緒に悪口を言つて。そんなのが嫌で、だから、一人でいる里恵を尊敬して、友達になって。なのに、自分は里恵を裏切った。また、昔のスマイリーと同じ。人の顔色をうかがってしか行動出来ないんだ。里恵の言葉が明の胸にちくりと刺さった。

ナツキは何か言いたげだったが、結局何も言わず、里恵を無視してお喋りを再開した。

「ねー。何かゴミ箱臭いんだけど」

由紀が教室のみんなに聞こえるような声で言った。

「何か臭いものでも捨ててあるんじゃない？ 教科書とか」

と由紀の友達。里恵はゴミ箱の中を見た。すると、そこには教科

書が捨てられていた。里恵はそれを拾い出すと、由紀たちの方を睨んだ。

「お前ら、随分姑息な手使うじゃん」

「ねえ、何か聞こえた？」

「なーんにも」

「そつだよー」

由紀たちがぎゃははと笑う。

「絶対……許さないから」

里恵は怒りの目でそう言う。教科書を持って席に戻った。予鈴が鳴り、明も席に着く。すると、前の席に座る里恵の広げた教科書が目に入った。そのページには、

『死ね！ 淫乱女』

と赤いマジックで書いてあった。これはシカトなんかじゃない。

いじめだ。

でも、今里恵をかばったら自分がいじめられる。それが怖かった。なら、どうしたらいい？ この学校で里恵のことを相談出来る人といったら、あの人しかいなかった。

「え、今井が？」

いじめのことを告げると直史は驚いた顔をした。

「そう。でも、私には止められないし……」

「女同士で起きていることなんだから俺にも止められねえよ」

「そこをどうにかしてよ」

「無理だよ」

「そんなー……」

明は落胆した。

「先生にチクるっていうのは？」

「そんなんでいじめが収まるとは思えないよ。それに、もし私がチクったってバレたら……」

そうやって直史と明が廊下で話しているときだった。

「あ」

先に声を出したのは里恵だった。

「お前ら……」

「今井……」

明は罪悪感から目を逸らす。

「二人きりで、何のお話？」

「お前のことだよ」

「アタシの？」

「いじめに遭ってるんだって？」

言わないでよ、と明は直史に目で訴えたが、通じなかった。

「あー。クラスの女子ね。で、それがどうしたって？ かばってくれでもするの？」

「……………」

明は返事が出来なかった。

「お前なら、どうにか打開出来るだろ？ 負けんなよ」

「当たり前。アタシは別に人の助けなんていららない」

それは、強がりなのか、本当なのか。

いじめはその後も執拗に続いていた。無視、物隠し、悪口……。

明は一回も口をきいていなかったし、里恵のマンションの屋上にも行っていなかった。斐羅だって待っているというのに。里恵と言葉を交わすのを避けていた。怖かった。里恵には嫌われているに違いない。そんなの分かっている。だけど、それを直接言われるのが怖かった。そんなとき、里恵が自分から話しかけてきたのだった。

「今日の放課後、屋上に来いよ」

と。

第38章 助けてあげて。

心臓がドキドキする。明は里恵のマンションの前まで来ていた。部活を休んで、誰にも見られないようにしてここまでやってきた。里恵に会ったらまず何て言おう？ やっぱり、謝るのが一番だろうか。でもそれだけでは里恵が怒りそうな気がする。 どうしよう。迷いながらエレベーターに乗り込む。屋上に着くと、明は深呼吸をした。そして、ドアを開ける。するとそこには里恵、直史、斐羅が座っていた。

「江川……」

一番に声を出したのは直史だった。

「里恵に呼ばれてたから」

「よっ、スマイリー」

里恵の言葉は皮肉めいていた。

「安藤さんも来てたんだ」

「うん……。ありがとね」

斐羅が言った。

「ううん。ごめんね、今まで来れなくて」

「安藤、心配してたぜ。江川と今井がまた喧嘩したんじゃないかって」

「喧嘩はしてないけど……」

里恵の方をちらりと見る。彼女は頭を掻いていた。明が名前を呼ぶ。

「里恵」

「いいんだ」

「え？」

「アタシは何をされても別にいいんだ」

「……」

「里恵は強がっているわけじゃない」

斐羅が明の考えていることを読み取ったかのように言った。

「里恵は、強いから」

「本当に？ 辛くないの？」

「辛かったら何かしてくれんの？」

里恵が言った。明は閉口する。

「ただ、やられっぱなしってわけにはいかないな」

「……やりかえすの？」

「由紀たちなんかボコボコにしてやるさ」

「駄目だよ、里恵。暴力はよくない」

斐羅がぴしやりと言う。

「お前また警察に補導されるぞ」

また、ということとは以前にもあったのだろう。里恵ならやりかねない。

「あいつら超ムカつく。お気に入りのシャーペンまで盗まれた」
「それって、なおくんがプレゼントしてくれた……？」
「え？」

何だ、それ。

「アタシが前に落としたシャーペンだよ」

杉沢が落ちたときに落としたものか。だから、直史はすぐに里恵のものだと分かったのか。

「和泉って女子にプレゼントするような奴だったんだ」
「昔の話だよ」

直史が言った。

「そつえば……」

杉沢と一緒に歩いていて、というのは本当だろうか。そつ訊こつとした。

「そつえばで思い出したんだけどさ、淫らに乱れるって書いて何て読むんだ？」

「え」

明はほかりと口を開けた。

「……インラン」

斐羅が遠慮がちに答える。

「って何？」

「……」

「お前、馬鹿だな」

直史が言った。

「うるせえなつ。アタシだって、直史と斐羅みたいに頭良く生まれ
たかったよ！」

「努力の賜物ですよ、今井さん」

里恵の言葉に直史が笑った。

「江川、さん」

斐羅が小さな声で呼ぶ。

「何？」

「里恵のこと……助けてあげて。この問題は里恵の力だけじゃ解決
出来ない」

「アタシ一人で充分だよ」

「どうやって？ どうやって解決するの？」

「それは……今から考える」

「お願い、江川さん」

明は返事に困った。里恵のことをかばったら自分だっていじめら
れるに決まっている。自分は、里恵ほど強くはない。

「……ごめん」

やっとそれだけ口にした。

「いじめの傍観者ってどんな気分なわけ？ 見てて楽しいか？」

里恵が口にした言葉は棘のあるものだった。

「楽しいわけじゃないじゃん。私、里恵のこと好きだよ。でも……。でも、助ける勇気が私にはない」

すると里恵は立ち上がった。目線の高さが明と同じになる。

「明みたいなどっちつかずな奴みると苛々するんだよ」

「……ごめん」

「アタシは謝りたいわけじゃない」

「じゃあ、里恵はどうしてほしいの？」

眉間に皺を寄せながら細い声で言った。

「……」

里恵が目を伏せる。

「里恵はね、本当は自分の元に戻ってきてほしいんだよ」

斐羅が言った。

「……私、里恵のこと裏切ったのに？」

「明はアタシのこと友達って思っていないのか？」

「友達……だよ」

そつだ、私は里恵の友達なんだ。明は心の中で眩いた。沈みかけた夕日が四人を照らしていた。

第39章 犯罪者。

でも、友達だからって自分をも犠牲にすることが出来るのだろうか。明は迷っていた。

「私、友達がいじめに遭ったのを止めることが出来なかった。今でもすごく後悔してる。もう少しの勇気があれば、私だって、こんなことにはならなかったんじゃないかって。なっただとしても、これほどの罪悪感に苦しめられることはなかったと思う。だから、江川さんには後悔してほしくないの」

斐羅にしては長い台詞だった。彼女はまっすぐ明を見つめていた。

「じゃあ、もし私が安藤さんだったら止められる?」
「今度こそは止めたい」

斐羅ははつきりと口にした。

「いくら強いつていても今井だってもうヘトヘトなんだよ。ここは一肌脱いでやってくれないか」
「和泉……」

明はしゃがんで「うーん」とうなった。二人にここまで言われたら断れないじゃないか。里恵が追い討ちをかける。

「明。アタシももう、限界なんだ」

里恵がこんなことを言うなんて思っていなかった。明の心が揺れる。

「私なんかには、里恵のことを救えるの？」

「明は証言してくれるだけでいい。由紀たちがアタシの持ち物を隠したりしてるって」

明は決心した。

「……分かった」

「ホントか？　ありがとな、明！」

里恵は表情を明るくすると明の背中を叩いた。

「まだお礼言うのは早いよ……。それに、痛い」

「ごめんごめん。じゃあ、楽しい夏休みの計画でも立てようぜ。もうすぐじゃん」

「俺、夏期講習があるんだけど……」

「じゃ、直史抜きで」

「ちよつと、なおくん可哀想だよ」

一気に明るい話へと変わった。里恵がこんな風に笑うのを知っているのは、自分と家族、直史、斐羅ぐらいなんだろうな。ころころ変わる里恵の表情に明は惹かれていた。

「アタシ、花火したい」

「いいね」

斐羅が笑う。

「じゃあ私、プール！」

明が手を上げて発案した。すると、

「私、プールは……」

と斐羅の顔が曇った。

「もしかして、泳げないとか？」

「いや、斐羅は水泳得意だったよな？ どうしてだ？」

「うん……ちょっと、ね」

言葉を濁す斐羅。そして話を逸らした。

「あ、私お祭り行きたいな」

「あー、お祭りいいな。アタシ、お化け屋敷大好きなんだ」

「私も」

「俺も好きだな」

「え、みんなちょっと待ってよ。私、超苦手なんだけど……」

明が泣きそうな顔をする。

「決定。じゃあみんなでお化け屋敷行こうな」

「里恵酷ーい……」

里恵は白い歯を見せた。

「夏休み、楽しいかなあ」

斐羅が呟く。

「楽しいよ。絶対」

「アタシが楽しくしてやるよ」

里恵がにっと笑った。

「今井も夏休みはちょっとは勉強しろよ」

「えー、やだよ」

「お前、本当にどこの高校にも行けなくなるぞ」

「だから高校は行かないって」

「安藤はどうするんだ？ 高校」

「私は……」

斐羅は言いよどんだ。

「おい、そういうこと訊くの止めるよ」

里恵が直史を突っついた。

「大丈夫だよ、里恵。私は……まだ分からない。迷ってる」
「本当は行きたいんじゃないのか？」

と直史。

「行きたいけど……私には自信ない。三年間も通えるのか。それに、今の内申じゃあ行けたとしてもすごく偏差値の低いところになると思う」

「試験でいい点取れば大丈夫だろ。斐羅は頭良いんだから」
「うっん」

斐羅は首を横に振った。

「頭が良かったのは昔の話。もう今は全然。勉強、する気が起きなくて」

「へえ、安藤にしては珍しい言葉だな。努力の塊みたいな性格してるのに」

「だって、勉強して何になるの？ 将来のため？ 将来って何？」

斐羅が直史に畳み掛けるかのように質問した。直史は困った様子で、

「良い人生を送る為じゃないのか？」

と答えた。

「良い人生って何？」

「良い仕事に就いて……」

「良い仕事って？」

「……」

「私には、未来なんて見えないよ……」

斐羅の顔を見ると、泣きそうだった。斐羅は今を生きるので一杯なんだと里恵が言っていた。確かに、斐羅には未来を考えるほどの余裕がないように見えた。

「じゃあ、安藤さん、昔は何で勉強してたの？」

明が訊いた。

「何か、とりえが欲しかったから。勉強しか能がなかった私は、今は誇れるもの、何もない」

そう答えて哀しそうに笑った。生ぬるい風が斐羅の髪をなびかせていた。

「斐羅には良いところいっぱいあるじゃんか。真面目だし、優しいし」

里恵の言葉に斐羅はうつんと首を振った。

「私は、お母さんの言うとおり、犯罪者なんだよ」

第40章 万引き。

「犯罪者、って……？」

明は尋ねた。

「最低な子供だった、って前に言ったでしょ？」
「うん……」

斐羅は赤く染まった空を見上げて言った。

「……私ね、小学生の頃万引きの常習犯だったの」

一瞬、時間が止まったような気がした。

「嘘……」

「本当。何回も捕まったことあるの」
「だって安藤さん、真面目じゃない」
「昔は酷かった」

そして斐羅は話し始めた。小学生の頃の自分のお話を。

* * *

「斐羅ちゃん、また、するの……?」

「大丈夫。今日は一品だけにするから」

「斐羅ちゃん、止めようよ。やっぱり駄目だよ、そんなことしちゃ」

「しょうがないじゃない。それが私のストレス発散法なんだから」

「斐羅ちゃん……」

「今朝もお父さんに殴られた。私なんか生まれてこなければ良かったのに、って」

「酷い……」

「私には何にもないから。才能もとりえも、何にもない。だから、お父さんが私を嫌うのは当たり前のことなんだよ」

「当たり前なんかじゃないよ！ 親はいつだって子供を守ってくれ
る存在のほずでしょ？ 殴られるのが普通だなんて、そんなこと、
あるわけないよ!!」

「里恵ちゃんの両親は優しいもんね。愛されるのが当たり前と思
ってるでしょう？ でもそれって、当たり前に見えてすごく恵まれ
ていることなんだよ」

「斐羅ちゃん……」

「このキーホルダーでいつか。誰も見てないよね？ じゃあ、店出
るよ」

「……」

* * *

「里恵には何度も迷惑かけたよね。そんな私の側にいてくれたのは、里恵となおくんだけだった」

「アタシは迷惑なんて思ってたないよ……」

「お父さんに、虐待、されてたの？」

「虐待じゃない。お父さんが私のことを嫌っている、ただそれだけのこと」

「でも手を上げるなんて酷い……」

「お父さんはお母さんに対してもそうだから。何でこんな子供を産んだんだ、って」

「辛い？」

「もう慣れた」

「今も安藤に暴力を振るったり、酷いことを言ったりするのよ」

直史が眉間に皺を寄せながら訊いた。

「うん」

「お母さんはそんな奴と何で離婚しないんだよ。斐羅、可哀想だよ」

里恵はしゃがむと斐羅の目をまっすぐ見つめた。

「金銭的に二人じゃ生活出来ないから。私さえ、私さえいなかったらお母さんが殴られることもないのにね」

「何言ってるんだよ、斐羅」

里恵が斐羅の肩に手を置く。

「斐羅がいなかったら哀しすぎるよ……」

「ありがとう、里恵」

斐羅はそう言って微笑んだ。

「でも、私はいらぬ子なんだよ」

「斐羅……、そんなこと言うんじゃねえよっ」

里恵は斐羅を抱きしめた。一羽の鳥が鳴きながら明たちの頭上を通過していった。辺りは暗くなり始めている。明はそろそろ家に帰らなければと思った。でも、こんなムードのときに言い出せない。

「大丈夫だよ、里恵。私はいなくなるから」

斐羅が言った。

「アタシと、ずっと友達だよな？」

「もちろん。……ねえ、なおくんも、江川さんも、私とずっと友達でいてくれる？」

「当たり前だろ」「うん、当たり前」

直史と明が答える。

「ありがとう」

そう言って斐羅は里恵から身体を離すと、立ち上がった、

「私、そろそろ帰らなきゃ。江川さん、来てくれてありがとうね。また会おうね」

「うん。私も帰る！ 安藤さん、一緒に帰る？」

「いいよ」

「二人とも、気を付けるよ」

里恵は腰を上げて手をひらひらと振った。

「あ、じゃあ俺も帰るわ」

直史も立ち上がる。

「またね、里恵」

「おう。明日は学校行くから」
「待ってる」

そして明は屋上のドアを閉めた。

第41章 いじめられてんだよ。

「安藤さんちもこっちなんだ」

「うん。次の信号を右に曲がってすぐ」

二人は歩道を歩いていった。

「安藤さんは、どうやって……万引き、止めたの？」

「里恵とのおくんが、止めなかったら友達止めるって言ったから」

「そうなんだ」

「私には二人しか友達いなかったから、止めることが出来たの」

「じゃあ今ストレスはどうやって発散してるの？」

すると斐羅はふつと口元をほころばせた。

「江川さんは鋭いところをつくね。さすが、里恵に惚れられただけある」

「違うよ、惚れたのは私の方だよ」

「うっん。里恵、進級してすぐの頃言ってたよ。気になる女の子がいる、って」

「それが私……？」

「そう」

そういえば以前、『こんなくずだらけの空間を高校に行ってまた過ごすなんて、よほどのくずか低脳だ』と里恵が言った事件で、どうしてアタシに構うんだよと言われて答えられなかったとき、「江川さんなら、と思ったのにな」と言っていたじゃないか。あの言葉は、そういう意味だったのか。

「でも私のどこが良かったんだろう。誰にでも意見を合わせる『スマイリー』だったのに」

「里恵には分かったんだよ。江川さんなら変わることが出来る、って」

「変えてくれたのはまぎれもない里恵だけだね」

「江川さんが来なかったとき、里恵、元気なさそうだった。やっぱり里恵には江川さんが必要なんだよ」

「安藤さんもすごく必要だと思うよ」

斐羅は笑って、ありがとう、と言った。そろそろ別れ道の信号が近付いてきた。

「ねえ、私、もっと安藤さんと仲良くなりたい」

信号のところで明は足を止めた。既に青になっているため、明たちの横を車が排気ガスを吐き出して走っている。

「仲良くなって、色々なこと話したい」

「……私もだよ、江川さん」

「そしたら私、安藤さんに訊きたいことがあるの」

それは言うまでもない、里恵の援助交際のことだった。

「……いいよ。私も、江川さんに話したいこと、ある」

「仲良くなってくれる？」

「もちろん」

「ありがとう！ じゃあまたね、安藤さん、……うづん、斐羅ちゃん」

そう言って明は点滅し始めていた信号のある横断歩道を走って渡

った。斐羅はほんのりと頬を赤く染めて、

「ばいばい、……明ちゃん」

明には聞こえない声で呟いた。

翌日、里恵は登校してきた。席に着いていた明は勇気を振り絞って、

「おはよ、里恵」

と声をかける。

「おはよ」

里恵は笑ってくれた。由紀たちの視線を感じつつも、明は言った。

「じゃあ、職員室行こうか」

明たちは職員室に辿り着くと、担任をつかまえてこう切り出した。

「先生。実は、大事なお話があるんです」

「どうした、江川」

明は担任をじっと見つめる。

「実は……今井さんが、いじめを受けているんです」

担任は驚いた表情になった。里恵の方を見て、

「お前が、いじめに……?」

「情けないけどね。アタシ、由紀たちにいじめられてんだよ」

里恵が答える。

「ただの思い込みじゃないのか」

担任の言葉は、明たちを落胆させるものだった。里恵がため息をつく。

「先生、いじめを放っておく気ですか」

明が担任に詰め寄る。

「いや、そうじゃなくて本人たちともう一度よく話し合ってたな…」

「あんだ、それでも教師かよ!」

里恵が担任の机をバンと叩いた。他の教師たちが何事かといった様子で里恵の方を一斉に向く。

「今井、それが先生に対する態度か」

「話を逸らすんじゃないよ」

「どうした、今井」

「町田先生」

明の気に入っている体育教師が声をかけてきた。もしかしたら、この人なら。

「里恵が、いじめに遭っているんです」

「本当か……？」

「本当だよ」

「ただのいざこざでしょう。だから心配しないで下さい、町田先生」

担任が手で顔をあおぎながら言った。里恵の目つきが鋭くなる。

「お前、それでも教師かよ」

「一ノ瀬たちにいじめられているという証拠はあるのか？」

「あるよ」

里恵は手に持っていた教科書を広げてみせた。『死ね！ 淫乱女』と書いてある。

「……」

これには担任も言葉を失った。

「先生、これはいじめに間違いないんじゃないですか」

町田先生が担任に言った。

「……自分で書いたんじゃないという証拠はあるのか」
「そこまで疑うのかよ……」

里恵は呆れた様子だった。教科書をパタンと閉め、踵を返す。

「里恵」

「明、行こう。これ以上話しても時間の無駄だ。何を言っても担任は分かってくれねえよ」

「待ちなさい、今井」

そう言ったのは町田先生だった。

「私は今井を信じる」

「町田先生！」

担任が声を上げた。

「今井は過去にも自分で同じようなことをしているんですよ」

え……？

どっという意味だろう。里恵はうつむき、表情は髪に隠れて分からなくなった。

第42章 自作自演。

「同じようなこと、って?」

町田先生が訊いた。

「小学生の頃、自分のノートに『死ね』って書いたんですよ。それだけじゃない。自分の体育着をハサミで切ったり、上履きの中に画鋏を入れたり……」

「自作自演、っていうことですか」

町田先生は驚いた様子だった。彼女だけじゃない。明もびっくりしていた。里恵が、そんなことをするなんて……。すぐるような目で里恵を見るが、里恵はうつむいたままだった。明は里恵の肩を掴み、身体を揺らした。

「ねえ、里恵嘘でしょ? 嘘だつて言つてよ!」

他の教師たちの視線が痛い。里恵がゆっくりと顔を上げる。人形のように無表情だった。そして、

「……本当だよ」

低い声でそう答えた。

「今井、どうしてそんなことを……」

「さあ、自分に注目してほしかったんじゃないですか?」

「そつなの、里恵?」

扇風機の風が里恵の髪を揺らした。今も里恵の目の下には青いクマが出来ている。

「そうでもしなきゃ、グループにいられなかったんだ」

里恵のものとは思えないような、か細い声だった。明はショックを受けた。里恵のこんな姿、見たくなかった。里恵にはいつでも自信満々でいてほしかった。それが、自分の尊敬する今井里恵なのだから。

「そんなの、里恵らしくないよ。一人でも堂々としているのが里恵でしょ？ グループとか、里恵の口から聞きたくなかった。自作自演だなんて、そんなの信じたくない……」

知らないうちに涙が零れた。明は里恵に背を向けて職員室を飛び出した。里恵は追おうとはしなかった。足が鉛のように重くて、明の背中を見つめることしか出来なかった。

「和泉！」

「何だよ、江川」

「ちよつと来て」

明は登校してきたばかりの直史をつかまえて廊下まで引っ張っていった。

「離せよ、＼シャツ伸びるだろ」

「ねえ、どういうこと？ 里恵が小学生のときにいじめを自作自演したって！」

明はYシャツから手を離し、握りこぶしを作りながら尋ねた。

「ああ、そのことか」

直史が顎を搔く。何もかも知っているような表情だ。明は問いた
だした。

「何でそんなことしたの？ 里恵は、そうでもしなきゃグループに
いられなかった、って言ってた。それ、どういう意味？ 和泉、知
ってるんでしょ？ 里恵にはどんな過去があるの？」

「江川、落ち着けよ」

直史は明をなだめるかのように手のひらを前に出した。

「話すと長くなるんだよな。そうだ、放課後マンションの屋上に来
いよ。そこで話すから。いいだろ？」

「いいけど……」

「一つだけ言っておくが、それはもう過去の話だ。今の今井じゃな
い。安藤が万引きしていたのだから、過去の話なんだ。未だに親に
犯罪者って言われてるみたいだけど」

「前に和泉が言ってた、親は子供が昔した悪いことを蒸し返したり
する、って斐羅ちゃんのことだったの？」

「そうとも言えるかな」

その時予鈴が鳴った。直史は、じゃあまた、と言って教室に戻っ
ていった。明も教室に入って自分の席に着く。前の席に座る里恵の
後ろ姿を、じっと見つめていた。里恵は、どんな子供だったのだろ
う。いじめはいつまで続くのだろう。もう終わりにしてほしい。明
は膝の上でこぶしを握った。

第43章 止めるよ。

休み時間になると明は里恵に話しかけた。

「里恵」

「……明」

里恵は明と目を合わせようとしなかった。

「いいんだぜ、無理して話しかけなくて。ナツキたちのところに戻れよ」

「もう遅いよ」

それは諦めに似た言葉だった。由紀たちがこっちを見て何やら話している。

「今日、屋上で待ってるから」

「え？」

「和泉に訊いたの。自作自演ってどういうこと？ って。屋上で説明してくれるって言うってた。でも、私は、やっぱり里恵の口から真実を聞きたい」

「アタシの口から……」

「分かってる。そんなの、過去のことなんだって。でも私にとってはシヨックだった」

「……ごめんな」

里恵が目を伏せた。やっぱり、こんな里恵らしくない。

「今井里恵！」

教室にいるみんなに聞こえるくらいの声で言った。何事かとクラスメイトがこちらを見つめている。里恵は身体をびくっとさせた。明は里恵の頬を両手で包むと、

「元気出して行こ！」

と明るく言った。

「明……」

「そんな暗い顔してないで！ 私、何があっても里恵の側にいるから」

「……も？」

「え？」

声が小さくて聞き取れなかった。

「……アタシがどんな人間でも？」

里恵がまっすぐ明を見つめた。

「……里恵、何か隠してる？」

まだまだ、明は里恵のことを知らない。援助交際疑惑だって、杉沢との関係だって、真実は知らない。里恵がどんな子供だったかも、もちろん知らない。

「明は？」

「え？」

「明は、何か隠してることないのか？」

「……ないと思うけど」

「アタシ、知ってるから」

「何を？」

「明がアタシの噂を気にしてるって、知ってるから」

ドキン、と心臓が脈打った。何で知っているのだろう。

「興味本位でアタシと一緒にいるんじゃないか？」

「そんなわけないじゃん！」

思わず声を荒げた。

「私は、里恵のことが好きだから一緒にいるんだよ」

「スマイリー」

突然、ナツキが明のことを呼んだ。紀子が手招きしている。行ってきた、という風に里恵が目で合図した。明は少し迷ったが、ナツキたちの元へ行く。

「スマイリー、何してんのさ」

ナツキは小声で言った。

「今井さんと話したらまずいっしょ。今度はスマイリーが由紀たちにいじめられるよ？」

「でも私、里恵の友達だから」

「あんなのと付き合っちゃ駄目だよ、スマイリー」

紀子が眉をひそめる。

「援助交際だよ？ カツアゲもしてるって噂だし。不良なんだよ、

今井さんは」

「里恵は不良なんかじゃない」

きつぱりと明が言った。

「ナツキと紀子ちゃんは、里恵のこと何も知らないじゃん。全部ただの噂じゃない」

「火のないところに煙は立たぬ、って言うでしょ？」

言い返す言葉が見つからなくてもどかしい。本当は、自分だって里恵の知らないところが沢山ある。捲り上げたジャージの裾から伸びた紀子の太い腕が、明の頭を優しく撫でた。

「スマイリー。私たち、スマイリーのこと心配しているんだよ？友達でしょ、私たち？」

まさかこんな言葉をかけられるとは思っていなかった。明の心が揺れる。

「……ねえ、里恵もグループに入れるっていうことは出来ないの？」

上目遣いでナツキたちを見た。無理なのは分かっている。でも、訊かずにはいられなかった。

「そんなに今井さんが好きなのわけ？」

ナツキは呆れているようだった。

「……うん」

里恵の方に目をやると、彼女はゴミ箱にゴミを捨てにいくところだった。由紀たちの隣を通る。と、由紀が里恵の足元に足を出した。里恵は転倒する。

「ごめん、今井さん」

由紀たちがギャハハと笑う。里恵は上半身を起こすと、由紀たちを憎悪のこもった瞳で見つめた。

「止めるよ」

そう言ったのは、近くの席に座る直史だった。

「いじめなんて小学生のやることだろ。格好悪」

由紀は目を大きくさせた後、ふっと笑った。

「和泉、こんなのがタイプなわけ？」

「えー、シヨツクー。和泉、人気がた落ちなんですけど」

「俺はお前らみたいのにモテても嬉しくない」

と、直史。

「そうだよなー。一ノ瀬たちに人気があっても、な？」

そう言ったのは直史の友達だ。

「やってることが幼稚すぎるだろ」

「今井をいじめるなんて、よっぽどストレス溜まってんだな」

口々に直史の友達が言った。気が付くと里恵と由紀たちに教室にいるみんなの視線が向けられている。すると由紀は顔を赤くさせ、仲間に「ちよっと、教室出よ」と言っつてその場から去っていった。

「直史……」

里恵は直史を見つめていた。

「俺は今井の味方だから」

と、直史。

「今井さん、またいじめられたら俺らが助けてやるよ」

直史の友達もそう言った。

「……ありがとう」

そう言った里恵の頬は、心なしか赤らんでいた。

第44章 好きなの？

明は直史のとつた行動に驚いていた。俺には無理だと言っていたのに、里恵を助けてくれた。そのことが嬉しくて、明は里恵に手を差し伸べながら直史に「ありがとね」と言った。

「俺に出来る最大限のことはしてやろうと思ってさ。幼なじみだもんな」

直史はちよつと照れくさそうに頬を掻いた。

「ねえ」

ナツキが口を開いた。

「和泉って、今井さんのこと好きなの？」

「そんなわけねーだろ」

直史より先に里恵がお尻をはたきながら言った。明の頭に浮かんだのは紀子のことだった。紀子はどうやら直史が好きらしい。そのことは、きつとナツキも知っている。もしも直史が里恵のことを好きだとしたら、絶対に里恵と紀子が仲良くなることなんて出来ない。紀子の方を見ると、彼女は口を真一文字に結んで直史のことを見ていた。

「和泉、どうなの」

「好きなわけないじゃんか」

直史はそう言って苦笑いを浮かべた。

「じゃあどうして今井さんのことを助けたの？」

「それは幼なじみだからだって……」

「嘘じゃん！」

そう叫んだのは学級委員の野崎さんだった。みんなが彼女の方を向く。野崎さんはタオルを握り締めながら目を見開いて言った。

「和泉くん、小学生の頃今井さんのこと好きだったじゃん」

ざわめきが起きる。マジかよ。和泉が今井を？ 嘘お。

「和泉、そうなの？」

紀子がハンカチを口にあてながら尋ねた。

「そ、そんなわけねえだろ」

「和泉くん、私と友達だったの。小四の頃、今井さんのことが好きって、そう言ってた」

と、野崎さん。窓から強い風が入ってきて白いカーテンを揺らした。里恵は神妙な面もちをしている。まるで、そんなことは知っていたかのような面もち。ずっと本を読んでいたクボタも、顔を上げて直史のことを見ていた。

「……そんなの、子供の頃の話だろ」

「今も好きなんでしょ？」

野崎さんが尋ねる。ナツキが紀子の肩を押さえた。紀子の目は潤んでいた。

「好きじゃない」

そう直史が答えたとき、チャイムが鳴った。明はもつと話を聞きたかったが、会話はそこで終了となった。里恵は最後まで、何も語るうとはしなかった。

「スマイリー、やっぱり今井さんはグループに入れられないよ」

次の休み時間、ナツキが言った。

「そんな……」

「紀子の気持ちも考えてあげなよ」

紀子は明らかに落ち込んでいる様子だった。さっきの野崎さんの話を気にしているのだろう。

「今井さんも和泉のこと好きなのかなあ……」

紀子がつぶやいた。里恵に視線を向けると、彼女はヤスリで爪を研いでいた。

「分かったよ、里恵のこと連れてくるから」

「ちょ、待てよスマイリー！」

明は里恵に近付くと「来て」と言っ腕を引っ張った。

「何だよ」

「いいから」

そしてナツキたちのところに連れてきた。ナツキと紀子はうつむいて里恵から視線を逸らす。

「何なんだよ」

「本当に、和泉は里恵のことは好きじゃないの？」

明が訊くと、里恵は眉をひそめながら言った。

「当たり前だろ」

「でも、小学生の頃……」

紀子が言った。

「小さい頃の話じゃなかよ。言っただろ？ 今、直史に好きな人はいない」

「今井さんは？」

「え？」

「今井さんは、和泉のこと好きなんじゃないの？」

紀子は顔を上げてまっすぐ里恵を見つめていた。

「……アタシには他に好きな人がいるよ」

「誰？」

それは明も知りたかった。もしかして、杉沢か？ しかし杉沢は不良だ。里恵が好きになるタイプではないような気がする。

「そんなの、言えるわけねえだろ」

そう言って里恵は自分の席に戻ろうとした。

「待って、里恵！」

里恵が振り向く。

「里恵もうちらのグループに入らない……？」
「スマイリー！」

里恵は鼻で笑って、

「そんなこと、出来るわけないって明も分かっているだろ」

里恵が明の手をすり抜けていった。手に入らない、存在。掴んでも泡のように消えてしまう。私はどうしたらいいの？ ナツキと紀子ちゃんから離れることしか、里恵と一緒にいる道はないの？ 明は迷っていた。

そつだ、斐羅に相談してみよう。明はそう思いついたのだった。

第45章 昔の話。

屋上に行くと、里恵と斐羅がいた。二人は柵にもたれて話をしていた。

「あれ、和泉は」

「まだ来てねえよ」

里恵が答える。斐羅は夏だというのに長袖だったが、それでも身体が細いのが分かった。

「ねえ、私どうしたらいいの？ 私、里恵と一緒にいたい。でも…
…ナツキたちのことも捨てられない。どうしたらいいと思う、斐羅ちゃん」

「私は……」

斐羅は口ごもった。

「明、そんなの無理だよ。どっちも手に入れるなんてできっこない。片方は諦める」

「そんな……」

「あの」

斐羅が口を挟んだ。

「学校ではそのお友達というようにして、放課後は里恵と一緒にいるように分けてみたらどうか？ 里恵、学校は一人でも過ごせるから」

「でも、私は里恵ともっと一緒にいたいよ」

「一足のわらじは履けねえよ」

里恵はもう学校で一緒にいることを諦めている様子だった。

「里恵はそれでいいの？」

「いじめられさえしなければ、それでいい。どうせ学校なんてそんなに行かないし」

「もう……いじめはなくなるよね？」

「さあな」

その時、屋上のドアが開いた。直史が顔を覗かせた。

「よ、今日はありがとな」

里恵が手を上げると、直史は「おう」と言った。

「全員が揃ったところで、訊きたいことがあるんだけど」

明が言った。

「いじめを自作自演したって話だろ」

里恵が口にした。すると斐羅は再びうつむき、重い沈黙が流れた。

「……もしかして、斐羅ちゃんも知ってるの？」

「……うん」

「どうして？ どうして自作自演なんかしたの？」

里恵はとつとつと話し出した。

「あの頃、アタシのグループには女王様の存在がいたんだ。みんなそいつのことをもてはやしていた。アタシのことなんて、誰も見ていなかった。このままじゃ、自分の居場所がなくなると感じた。どうすればみんなが振り向いてくれるだろう？ そう思ったんだよ」「……その結果が、いじめの自作自演？」「そうだよ」

どんな気持ちで里恵は自分の教科書に『死ね』と書きなぐったのだろう。今の里恵からは想像もつかなかった。

「でも、もうそれは昔の話。今はやらねえよ」

里恵はきつぱりと言った。

「そうだよね、昔の話なんだよね……」

明は自分に言い聞かせる。明だって、ちょっと前までは人の言うことに合わせるスマイリーだった。でも、今は違う。自分の意見をちゃんとと言えるようになった。私も、変わったんだよね。きつと、里恵も。そう考えると、心の中にあるわだかまりがすーっと消えていくのを感じた。

「江川ももういいだろ？ 来週から夏休みなんだから、明るい話でもしようぜ」

「あ、そうだね。ねえ、みんなでお祭り行かない？」「賛成！」

真っ先に手を挙げたのは里恵だった。

「私も行きたいな」

と、斐羅。

「和泉は？」

「行ってもいいけど」

「本当はすぐく行きたいんだろ？ 女の子三人に囲まれて、お前も幸せ者だな」

里恵が直史をからかう。

「お前は女じゃねえ」

「今、何だった？ 里恵キーク」

里恵が足を高く上げて直史を蹴る。直史はよろめいて柵にぶつかった。明と斐羅が笑う。この幸せがずっと続けばいいと思った。

第46章 学校。

「あー、もう分かんねえ」

里恵はシャーペンシルを投げ出した。

「里恵。ここはこれをこっちに移項するんだよ」

「そうなの？ やっぱり斐羅は頭良いなあ。明とは大違いだ」

「里恵には言われたくないーい！」

「お前ら、口ばっか動きすぎ。集中出来ねえだろ」

夏休み。明、里恵、斐羅、直史は里恵の家で勉強をしていた。

「浦高志望がなんでうちんちで勉強してんだよ」

里恵が言った。

「ちよ、みんなで勉強しようって言ったのはお前だろ」

「そうだった」

「私、このままじゃ川田工業にしか行けないみたいなんだ」

明が言う。三者面談で先生にそう言われたのを覚えていた。

「大丈夫大丈夫、アタシなんか私立しか受からないって言われたから。ま、行かないけど」

「今井、本当に高校行かない気なのか？」

「うん」

里恵はあっさりと答えた。中卒じゃ、世の中を渡るのは大変だろ

う。そんなこと、里恵も分かっているはずだ。斐羅は、どうなんだろう？ 高校、行かないのかな。

「なおくん、ここ分らないんだけど」

斐羅が問題集を指差しながら直史に尋ねる。

「どれどれ？ ああ、ここは分子にかけるんだ」
「あ、そっか」

明は斐羅が勉強する姿を見てずっと疑問に思っていた。ここは、勇気を出して訊いてみよう。

「斐羅ちゃん、学校行ってないんだから夏休みの宿題なんてしなくてもいいんじゃない？」

すると斐羅はちょっと微笑んで言った。

「私、二学期になったら学校に行こうと思ってるの」

明は驚いた。里恵も直史も知らなかったのだろうか、目を丸くした。

「斐羅、マジかよ」

「うん。私、やっぱり高校に行きたい。高校に行つて、やり直したいの。だから、行こうと思う。今からじゃ遅いかもしれないけど」
「遅くねえよ。頑張れよ、安藤」

「ありがとう」

「斐羅ちゃん、無理はしないでね」

「うん。ありがとう、明ちゃん」

みんなが笑顔で斐羅を応援する中、里恵だけは無言だった。

「里恵？」

明が里恵の表情が曇っていることに気付いて声をかける。

「いつ、決めた。学校行くって」

「夏休みが始まるちょっと前だけど……」

「どうしてだよ」

「え？」

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだよ」

「……」

「アタシたち、親友だろ？　なのにどうして今まで黙ってたんだよ。今だって、明が訊かなければ言わなかったつもりだよ」

里恵はそう言って立ち上がった。

「ごめん、里恵」

その言葉が聞こえなかったかのように、里恵は部屋から出て行った。

「びびりしよ……」

斐羅が困った顔をする。

「何で里恵に言わなかったの？」

明が訊いた。自分に言ってくれたということは、もうとっくに里恵に言っていたっておかしくない、むしろその方が自然だった。

「自信、ないからかな」

「自信？」

「本当に行けるかどうか。無駄に里恵に心配かけたくなかったから」

そう言った後、「でも逆に里恵を傷つけちゃったみたいだね」と呟いた。

「今井、最近ナーバスになりすぎている節があるんだよな」

直史が言った。

「どうして？」

「それは分かんないけど」

明の問いに直史が首を傾げる。

「私、里恵に謝ってくる」

「止めとけ。今井が謝罪なんかで機嫌を直すと思うか」

「やっぱり……そうだよね」

斐羅はしゅんとした顔をする。

「大丈夫だよ。今井は、安藤のこと一番よく分かってるから。安藤が学校行かなくなったときだって、『辛いことから逃げることも必要だよ』って言って、無理に学校に行けとか言わなかっただろ？」

今井なら分かってくれるよ。安藤の気持ち」

それを聞いて、明は里惠のことを益々尊敬した。斐羅ちゃんの気持ち、考えているんだ。自分の意見も押し付けず、斐羅ちゃんのことを一番に思っているんだ。明は里惠を見習おうと思った。

「日曜日、一緒にお祭り行ってくれるかな」

「行ってくれるさ」

「和泉、断言出来るの？」

「出来る。だって、六年の仲だぜ？」

六年か、長いな。斐羅と知り合ったのは小四のときだから、彼女とも五年の仲。自分より、里惠のことを知っている。明は思い切っ
て言った。

「二人に、里惠のことで質問があるんだけど」

「何？」「何だ？」

「里惠が杉沢と付き合っているって、本当？」

斐羅と直史は顔を見合わせた。

「杉沢って、誰？」

斐羅が訊く。

「同じクラスの不良だよ」

直史が答える。

「……付き合っていないんじゃない？ ましてや不良となんて。私、里恵が誰かと付き合ってるなんて聞いたことないし」

斐羅が目をくりくりとさせながら言った。

「今井があんな奴と付き合っわけないだろ」

直史もそう言う。

「……やっぱり、そうだよ。ただのデマかー」

明は内心ほつとしていた。煙草、酒、カツアゲ、薬。そんな噂がある杉沢と付き合っているなんて聞いたら、ショックを受けたに違いなかった。

「あ、虹」

斐羅が窓の外を見て呟いた。

「あ、ホントだー」

「日曜日、晴れるといいな」

直史は笑った。

第47章 祭り。

日曜日、空は快晴だった。明が屋上で待っていると、浴衣姿の里恵と斐羅がやってきた。

「斐羅ちゃん可愛いー」

「へへ、ありがとう」

斐羅は照れたように笑った。

「アタシはどうなんだよ」

里恵は黒地に赤い花が描かれている浴衣だ。アップにした髪が、大人っぽい雰囲気醸し出している。

「里恵も綺麗だよ」

「マジ？ やったね」

里恵はガッツポーズをした。

「明は浴衣じゃないんだな」

「あー、私持ってないんだ」

「そうなんだ」

「斐羅ちゃんも髪上げてると大人っぽいね」

「そうかなあ」

「里恵、斐羅ちゃんと仲直りはしたの？」

「ああ。斐羅が心配かたくないって気持ち、分かったからな。アタシはいつでも斐羅の味方だから」

直史が屋上に入ってきた。

「可愛い女子三人と一緒に祭りだなんて夢みたいだろ？」

里恵が言うと、直史は、

「お前は論外」

と言った。

「ふーん、直史、また里恵キツクをお見舞いされたいようですね」

「それだけは止めてくれ！ あれ、意外と痛えんだよ」

明と斐羅は笑った。

「じゃ、そろそろ行くこうか？」

「おう」

そして四人は祭りのやっている公園へと向かった。

「あ、かき氷！ 食べよーっと。明たちは？」

「あ、私も食べる」

「俺も」

「斐羅は？」

「……どうしようかな」

斐羅はそう言ったあと、

「だって舌が色変わるんだもん」

と呟いた。

「じゃあイチゴにすりゃいいじゃんか」

最もな提案だと思った。

「じゃあ……食べようかな」

明はメロン、里恵はブルーハワイ、直史はレモン、斐羅はイチゴを食べた。

「くーっ、頭痛え」

食べ終わった後里恵が頭を押さえた。

「それ、アイスクリーム頭痛って言うんだよ」

斐羅が豆知識を披露する。

「さあ、次はたこ焼きだ！ いや、お好み焼きもいいなあ……ベビーカーステラってのも有りかも」

迷っている里恵を横目に、直史はフランクフルトを買って食べていた。

「ねえ、後でみんなで花火しない？」

斐羅が提案した。

「いいねー」「賛成」

里恵はクレープをほおばりながら、

「アタシもしゃんせい（賛成）」

と言った。

最後に明たちは金魚すくいをした。明や直史が一匹もすくえないのに対して、斐羅は七匹もすくっていた。

「斐羅ちゃんすごい」

「唯一の特技なの」

と言った。

「アタシも一匹すくったぜ？」

「でも、こういうところの金魚つてすぐ死んじゃうんだよね」

袋の中の小さな金魚を見つめながら、斐羅は哀しそうに言った。

「でも、こんなに大きくなった金魚の話もたまに聞くじゃんか」

直史が手を広げる。

「育てばいいんだけどね」

斐羅は金魚の入った袋をつんとつついた。

第48章 傷痕。

そして明たちは公園を出ると屋上に行った。

「ねえ、こんなところで花火なんかしているの？」

明の問いに直史が「駄目だろうな」と答える。

「屋上なんて普段来る人いないから大丈夫だよ」

斐羅が言った。そして斐羅の持ってきた花火セットと里恵の持ってきたバケツとライターを用意する。

「じゃ、火点けるよ」

里恵がみんなの持っている花火に火を点けた。パチパチ、という音がし、先の方がオレンジ色に輝いた。

「わー、綺麗」

明は感動した。暗くなった夜、花火の火だけが辺りを明るく照らしていた。

「うん、綺麗」

と、斐羅。

「たまには、こうやって女子と遊ぶのも楽しいな」

「アタシも直史と遊べて楽しかったよ」

「……私も」

斐羅がちよつと恥ずかしそうに言った。

「また、みんなで遊ぼうね」

明の言葉にみんなが頷いた。

「じゃ、締めめの線香花火でもやりますか」

線香花火の先に火が灯る。明たちはそれをじっと見ていた。やがて火はぼたりと落ちた。

「来年も、こうやって遊べるかな」

明が口にした。

「来年も、再来年も遊べるよ」

里恵が言った。多分、一年後はみんな違う道を歩いている。もう、こんな日は訪れないかもしれない。少し感傷的な気分になった。

時間も遅くなってきたので、明は帰ることにした。

「今日はありがとね」

明の言葉にみんなは頷いた。

「じゃあ、またね。斐羅ちゃん、一緒に帰る」
「うん」

そして明たちは屋上を出て、エレベーターで降りた。静かな夜だった。

「今日は楽しかったね」

「うん」

「また遊ぼうね」

「……うん」

斐羅の顔色が優れないことに明は気付いた。

「どうしたの、斐羅ちゃん？」

「……うん」

斐羅は迷っている様子だったが、やがて決心したかのように、

「今から話すこと、誰にも言わないで」

と言った。深刻な声のトーンに明も真面目な顔になる。

「分かった」

すると斐羅は左腕の袖をゆっくりとめくり上げた。

そこには、何本もの赤い線が街灯に照らされて浮かび上がっていた。

「……」

明は言葉を失う。

「私、リストカットしてるの」

生ぬるい風が吹いた。

「……どうして」

明はそれだけしか言えなかった。

「辛い。生きてることが」

自然と二人の足は止まっていた。斐羅は袖を下ろすと、後れ毛を耳にかけた。

「里恵や和泉は？ そのこと知ってるの？」

斐羅は首を横に振った。

「人に話したのは今回が初めて」

「どうして、私なんかに話してくれたの？」

「明ちゃんなら、分かってくれると思ったから」

「里恵は？」

「心配、かけたくないから」

その言葉が明は気になった。

「私だって」

「え？」

「私だって心配するよ！　こんな私でも斐羅ちゃんの友達なんだよ？　心配するに決まってるじゃん……」

そりゃ、里恵の方が大事かもしれない。でも、自分だって斐羅のことは大切なのに……。

「違うの。明ちゃんが友達だから、告白したんだよ。里恵にこんなこと言ったら、『止める』って言われる気がして。だから、明ちゃんだけに話したんだよ？」

斐羅は困った顔をしていた。そうだ、こんなことを気にしている場合ではない。痛々しい傷痕は袖でもう見えない。

「……いつから切ったの？」

「学校行かなくなった頃から」

「痛くないの？」

「切るときは痛いけど、次の日になれば大丈夫」

「……止められないの？」

「うん」

そして二人は無言になった。

「あれ、まだいたの？」

里恵がマンションから出てきた。

「どうかした？」

「里恵の方こそ」

「アタシはコンビニ。二人とも何深刻な顔してんの？」

「何でもない。帰ろ、明ちゃん」

斐羅はそう言って歩き出した。明も斐羅について行く。

「だから、プール行くのに気が乗らなかつたんだ」

「そう」

「本当に、里恵に言わなくていいの？」

「とてもじゃないけど、言えないよ」

リストカットをしてしまうほど辛い心境というのが明には分からなかつた。でも、分かつてあげたかつた。

「じゃあ、絶対誰にも言わないでね。特に里恵には」

別れ道にさしかかつたところで斐羅が言った。

「……うん」

「またね」

「バイバイ」

結局自分は何の言葉もかけてあげられなかつた。何て声をかけたらいいのかわからなかつた。そして、里恵に黙っている自信がないのも事実だつた。

第49章 行くのかな。

「斐羅ちゃん、お願いっ!」

明は斐羅に向かって手を合わせた。

「私が川田総合高校に受かるか占って!」
「いいけど……」

「明、止めとけー。どうせ無理なんだから」
「里恵だけには言われたくないー」

斐羅はタロットカードを混ぜ始めた。そして、一つにまとめた後、三枚のカードを並べる。ゆっくりと、カードが裏返された。

「吊るされた男と、月のカードか……」

斐羅の表情が曇った。

「それってどういうカード?」

「吊るされた男は、困難とか、試練に耐えるって意味。月は、不安とか、障害が多くなるって意味」

「えー、最悪じゃん……」

「つまり明は受からない、と」

「そんなに断言は出来ないけど……」

明はあからさまに落胆した。里恵が明の背中を強く叩く。斐羅は困ったように微笑んで、

「今から努力すれば簡単に未来なんて変えられるよ」

と言った。ありがとう、斐羅ちゃん、と明が言う。

こうやって、いつも通りに斐羅と接している自分がいる。あの日の告白など聞かなかったかのように。斐羅ちゃんも前と同じように接してくれることを望んでいるだろうし、と明は思っていた。

「結局今年はプール行けなかったな」

里恵がぼそりと言うと、斐羅は身体を小さく丸めた。

「でもでも、お祭りに行けたからいいじゃん！ 楽しかったよ、今年の夏休みは」

明が明るく言った。斐羅が明の方を見る。ありがとう。心の中でそういつている気がした。

「里恵ー、なおくんが来たわよー」

里恵の母親の声でした。

「よっ、皆さんお揃いで」

直史が手を上げて里恵の部屋に入ってきた。

「そっだ、直史も斐羅に占ってもらえよ。浦高受かるか」

「俺は、占いとかやらない質なんだ。だって、未来は分からない方が楽しいだろ？ 今井、お前こそ占ってもらえよ。将来のこと」

「えー、アタシ？ 別に不安なんて全然ないけど……斐羅、占ってみてよ」

「分かった」

そして斐羅は二枚のカードをめくった。

「運命の輪の逆位置と、塔、か……。塔が出ちゃったかー……」
「塔のカードって、確か悪いんじゃないかなかったっけ？」

里恵が眉間に皺を寄せた。

「うん、最悪。災難とか、恋の終わりとか、病気とか」
「マジかよー。アタシの人生お先真っ暗かよお」

里恵にしては珍しく落ち込んだようだった。

「でも、たかが占いだし。当たるも八卦、当たらぬも八卦」

斐羅がそう言って励ましたが、

「でも斐羅の占いは百発百中じゃん……」

と言って頭をうなだれた。斐羅は頭を掻いた後、里恵の頬を手で挟む。

「そんなの、里恵らしくないっ！」

すると里恵は少し笑って、

「そっだよなあ……。占いごときで落ち込むなんてアタシらしくないよなあ」

と言った。

「明も斐羅も直史も高校かー。アタシも行くところかな、高校」

その言葉に皆はぎよっとした。

「何だよ皆してそんな顔して」

「だって里恵、あれだけ高校には行かないって言っていたのに」

明の言葉に、里恵が笑った。

「定時制とか、ちょっとは全日制よりマシかなあって思っててさ。アタシの学力でも入れるし」

「里恵は、学校の何が嫌なの？」

「ねちねちした人間関係。定時制なら年齢もばらばらだからグルー
プとかなさそうじゃん」

そういうことか。

「私は、里恵の好きな道を選んだらいいと思うよ」

と、斐羅。

「お前、将来何になりたいの？」

直史が訊いた。

「そんなの、わかんねえよ。まだ十五歳だぜ？ 直史はもう決まっ
てんの？」

「政治家。この世の中を変えてやるんだ」

直史の大きな夢に明たちは目を丸くした。明だって里恵と同じく将来の夢なんて決まっていなない。堂々と自分の夢を語る直史がうらやましかった。

「明日で夏休みも終わりだね」

斐羅が言った。明日、本当に斐羅は学校へ行くのだろうか。行けるのだろうか。二学期には杉沢も退院してくるだろう。あやふやなままで終わったあの事件の真相が分かるときが来るなんて、このときの明は思いもしなかった。

第50章 大っ嫌い!

新学期。斐羅は学校の門の前で立ち往生していた。もう授業は始まっている。担任には母から遅刻するとの連絡を入れてもらっていた。皆と一緒に校舎に入る勇気がなかったから。だって、もしも知っている子に出くわしたらどんな反応をすればいいのだろうか？ 教室に入ったらまた、戦争が始まる。どっちにも付けない永世中立国の自分。いつまで戦争は続くのだろうか？ 怖くなって、門に手をかけては離すの繰り返しだった。

昇降口から見覚えのある生徒たちがぞろぞろと体育着に身を包み校庭へ現れた。斐羅の身体が硬直する。その中には自分のグループだった子もいた。いじめの主犯格。どうしてそんなことをするのかと尋ねたい気持ちになったことはなんともある。けれど、訊くことは出来なかった。

「あ、あれ、安藤さんじゃない？」

彼女の声が聞こえた。斐羅はとっさに校門の影に身を隠す。

見つかった。心臓はうるさいほどに鼓動を打っている。でも、見つかったことよりも友達だったはずの彼女に名字で呼ばれたことが斐羅の頭を支配した。ああ、そうか。私はもう、友達じゃないんだな。

「安藤さん」

二年前まで友達だった彼女が名前を呼んでいる。仕方なく、斐羅は姿を現した。

「久しぶり」

「う、ん……」

斐羅にはどうしても訊きたいことがあった。いじめられていた女の子はどうしているのか。別のクラスになって、いじめから開放され、楽しい学校生活を送っているなら斐羅の罪悪感も少しは薄れる。

「そういえば、ジェシカちゃんは？」

ありったけの勇気を出して訊いてみた。

「ああ、野崎？」

「うん……」

「あいつなら、中一のとくに転校したよ。青山中に」

転校……。青山中とは、里恵たちが通っている学校だ。それほど離れてはいない。それがどういう意味を持つのか、斐羅には分かっていた。

「あいつ、逃げたんだよ」

そう。ジェシカちゃんは、彼女たちから逃げたのだ。

「あ、安藤」

校庭に来た体育の先生が声をかけてきた。先生の後ろで「安藤さんって誰？」という声が聞こえる。

「不登校の人だよ」

そう答えたのは友達だった彼女。他人事のようにあっさりと言われたことで、斐羅の心は傷付いた。そして、怖くなった。自分に向けられる皆の目。先生の作ったような笑顔。何よりも、友達だった彼女が。斐羅は皆に背中を向けて走り去った。馬鹿。自分の弱虫。そう心で叫びながら。

「あ、斐羅からメールだ」

休み時間、里恵が隠し持っていた携帯電話を見て言った。

「何何？」

「えーっと……『やっぱり学校行けなかった。嫌だよ。もう嫌だよ……』。私なんか大っ嫌い』だって。やっぱり無理だったかー……」
「そっかあ……」

明と里恵は暗い表情になる。

「スマイリー」

ナツキが明を呼んでいた。「行けよ」と里恵が言ったので、ためらいつつもナツキたちの元へ行った。里恵の方を見ると、教科書を通学バッグに入れて何やら帰る支度をしているようだった。きつと、斐羅の元へ行くのだろう。

「あ、杉沢」

紀子が呟いた。彼女の視線の先を追うと、クボタの背中に冷却スプレーをかけている杉沢の姿があった。クボタは黙って俯いている。誰も止めようとはしない。直史は、友達と喋ってまるで気付いていないかのようなふりをしている。そうだ、里恵は？ 里恵なら、止めるはずだ。

しかし、里恵は一瞬杉沢に視線を向けたがすぐに逸らし、教室を出て行った。

「何で……」

思わず明は呟いた。

「何が？」

ナツキが訊く。

「何で、誰も杉沢のこと止めようとしなの？」

「だって、自分がターゲットになったら嫌じゃん。それに、そこまでしてクボタを助けたい人なんてこのクラスにいる？」

そうだ。自分だって、クボタを助けようとし、ていないじゃないか。自分がいじめられたって構わない、なんて思えるほどクボタのことが好きじゃなきゃない。いじめ。あれはいじめだ。里恵のいじめは収まった。けれど、杉沢を止められる者なんて多分ないだろう。杉沢は冷却スプレーをかけ終わった。すると、満足げな顔でその場を去ろうとする杉沢に直史が近寄った。

「何だよ、和泉」

「お前、止めるよそっぴいの」

「は？」

「変わったな、お前」

「うるせえな」

「こんな姿見たら、安藤が悲しむだろうな」

あん、どう？

杉沢は床に唾を吐いて教室を出て行った。安藤が悲しむ。安藤って……。

「斐羅ちゃんのこと？」

第51章 赤い染み

明は和泉に言葉の意味を訊こうとしたが、チャイムが鳴ってしまつたので仕方なく席に着いた。斐羅ちゃんが悲しむ？ 杉沢の姿を見て？ 斐羅と杉沢は知り合いなのだろうか。でも、前に斐羅は「杉沢って誰？」と訊いていた。考えれば考えるほど分からなくなる。

「和泉、格好良かったね」

次の休み時間、紀子が言った。

「惚れ直した？」

とナツキ。やだあ、と紀子が笑う。

「紀子ちゃん、そんなに和泉のこと好きなら告っちゃえばいいじゃん」

明が言った。

「え、無理だよ！ 無理無理」

「他の人にとられちゃうかもしれないよ？」

「でも……」

「うちが代わりに言っておよつか？」

「駄目！」

「冗談冗談」

「もう。あ、私ちょっとトイレ行ってくる」

紀子が席を立った。

「紀子って面白いよね」

ナツキが言った。以前、ナツキは紀子のことをナルシストと言っていたことがある。しかし、いつの間にか二人は以前より仲良くなくなっているようだった。

「ナツキ、夏休み受験勉強した？」

「したした。紀子に負けたくないからな。同じ高校に行きたいし」

「私は、多分二人と同じ高校にはいけないと思う」

「学校が離れてもうちらは友達じゃなか」

その言葉が嬉しかった。

放課後、明は部活を休み里恵のマンションの屋上へ行った。予想とは違い、斐羅だけの姿がなかった。

「斐羅ちゃんは？」

「朝、斐羅んち行った。屋上に行かない？ って誘ったけど今の心境では行けないって」

「斐羅ちゃん、何て言ってた？」

「ネガティブモード突入してたな。やっぱり私なんか生まれて来なければ良かったんだ、って」

「ほつといて大丈夫なの？」

明は心配になった。

「ううん。アタシだって心配だよ。でも、一人になりたいって追い返されて」

「でも、もう一回安藤の家行ってみないか？」

直史が提案した。

「そうだな。もう一度行ってみるか」
「だね」

三人は屋上を後にして斐羅の家へ向かうことになった。

そこは薄汚いアパートだった。里恵がインターホンを押すと斐羅の母親と思われる人物が出てきた。

「ああ、里恵ちゃん」

「度々すみません。もう一度だけ、斐羅に会わせて頂けないでしょうか？」

里恵があまりに丁寧な言葉を使うものだから明はびっくりした。

「いいよ。皆入って」

「ありがとうございます！」

そして明たちは中に入った。斐羅の部屋まで行くと、斐羅の母が声をかけた。

「斐羅。里恵ちゃんたちが来たよ。ドア開けるね」

「え、ちよ、ちよっと待って！」

斐羅の焦った声が聞こえたが、斐羅の母は構わずドアを開けた。すると、ベッドに寄りかかって座る斐羅がいた。ドアが開く瞬間に後ろに何かを隠したようにも見えた。斐羅の母はその場を離れ、里恵が、

「入っていい？」

と訊いた。

「ごめん……入れられない」

斐羅はまっすぐ明たちを見つめながら言った。まるで、他のものから目を逸らさせるかのようだ。

しかし、明は気付いてしまった。斐羅の座るすぐ側の床に、赤い染みがぼたぼたとあることを。

「少しでいいから」

里恵が中に入ろうとする。

「駄目……!!」

斐羅は手のひらで赤い染みを隠そうとするが、それより先に直史が言った。

「それ、血か？」

まだ、このときなら否定のしようもあつたかもしれない。しかし、皆の視線が赤い染みに集まった今、血が手首を伝ってぼとりと床に新たな染みを作ってしまった。里恵と直史が驚愕の表情を浮かべる。

「……………」

斐羅は何も言わなかった。

「斐羅、まさか……」

里恵が言った。そして斐羅に近付き血が垂れている方の袖をめくり上げた。すると、傷口がぱっくりと開いて血を流していた。斐羅は俯いたまま無言だった。

「斐羅……」

里恵が呟く。明はベッドの上にあるティッシュを取って斐羅に渡した。

「……ありがとう」

斐羅は傷口をティッシュで拭く。

「どうして……」

里恵が絞り出すかのような声で言った。

「どうして言ってくれなかったんだよ！」

明は驚いた。というのも、里恵が涙を流していたからだ。直史は入り口に立ったまま、

「俺たちに言ってくれてもよかったじゃないか」

と言った。

「ごめんなさい……」

斐羅が消え入りそうな声で謝る。

「明は知ってたのか？ 驚いてないけど」

里恵の問いに明はためらいがちに頷いた。

「明には言ったのに、アタシには言おうと思わなかったの？ どうして？ どうしてよ……」

里恵は今も泣いている。

「だって、里恵こんなこと私がしてるって知ったら止めるでしょ？
なおくんも」

斐羅は里恵と直史を交互に見つめた。

「当たり前だろ」

「ああ」

と里恵と直史。

「そんなに死にたいのなら、アタシに相談してくれたって良かった
じゃないか」

「違う。違うの」

斐羅は首を振る。

「私、死にたいんじゃない。死にたくて切ってるわけじゃない。生
きたいんだよ。生きたいから切ってるんだよ！」

斐羅の語尾が強くなる。

「辛さを痛みで紛らわすの。だから、私は生きていられる。そつで
もしなきゃ、私、生きられないの……」

斐羅は涙を零した。

第52章 両想い。

すると里恵は斐羅を抱きしめて、

「ごめん……アタシ、斐羅のこと何も分かっていなかった。気付いてあげられなくてごめん。打ち明けることの出来ないような人間で
ごめん。斐羅がそんなに苦しんでいるなんて知らなかったよ」
「里恵……」

斐羅はゆっくりと里恵から身体を離して、

「私が悪いの。ごめんね、弱い人間で」
「そんなことねえよ」

直史が言った。そして続ける。

「辛い状況に耐えている安藤は、誰よりも強いよ」
「なおくん……」
「直史の言うとおりだよ。斐羅は充分強い。だから、もっと力抜いて生きていいんだよ」

里恵は目を擦りながら言った。斐羅は背後に手をやって、隠した
カッターを持つと、

「いつかは、このカッターを使わなくなる日が来ると思う。それ
で、里恵たちにはゆっくり待ってほしい」

ああ、と里恵たちは頷いた。

「あ、そういえばジェシカちゃんって里恵たちの学校にいる？」
「ジェシカって、野崎ジェシカ？」

明と同じクラスの学級委員だ。和泉が里恵のことを好きだったとバラした女子。

「そう。ジェシカちゃん、うちの中学でいじめられていた子なの。私が学校休んでいる間に転校したらしくて。ジェシカちゃん、元気にやってる？」

「野崎さんなら元気にやってるよ。な、明？」

「うん。友達も沢山いるよ」

「そうなんだ。良かった」

斐羅が今日初めて笑顔を見せた。

そしてたわいない話をしているうちに、日が暮れたので明たちは帰ることにした。

「またな、斐羅」

「うん。今日は皆、本当にありがとう」

何か問題が解決したわけじゃない。斐羅は登校出来なかったし、リストカットも止めていない。しかし、明はさすがにいい気持ちだった。

「じゃ、またね、里恵、和泉」

「またな」

「おう」

明は里恵たちと別れ家へ向かった。

次の日。杉沢の姿を見て明は思い出した。昨日、直史が杉沢に対して意味深な発言をしていたことを。

「和泉、ちよつと来て」

直史を廊下まで引つ張ると明は尋ねた。

「昨日、杉沢に『こんな姿見たら、安藤が哀しむだろうな』って言うってたよね？ それってどういう意味？」

「あー……。実は、杉沢って安藤と両想いだったんだよ」

「……え！？」

あの杉沢が、斐羅と？

「だって斐羅ちゃん、前に私が里恵と杉沢って付き合ってるの？
って訊いたとき、杉沢って誰？ って言ってたじゃん」

「前は『本村』だったんだけど、親が再婚して名字が変わったんだ
よ」

「でも和泉、ただの不良だよって言った」

「杉沢も昔はいい奴だったんだ。そのイメージを壊したくなくて」
「いい奴だったの？」

「ああ。いつも四人で一緒だった」

数年前までは自分のポジションには杉沢がいたというのか。不思議な気持ちだった。そして、ある案が浮かんだ。

「……斐羅ちゃんが協力してくれば、杉沢、変わるかな」

「え？」

「杉沢って、もしかしたら根っからのワルじゃないのかもしれない。そしたら、変わることで出て出来るかも」

「……今井がお前に惚れたの、分かる気がするよ」

「え？」

「そうやって他人のことを考えられる奴、なかなかいねえよ」

直史にそう言われて明の顔が赤くなる。不覚だった。

「とりあえず里恵に相談してみるっ。それじゃ」

そう言って足早にその場を後にした。

「……っていうわけなんだけど、里恵、どう思うっ？」

「うーん……」

登校してきた里恵に相談すると、里恵は困った表情を浮かべた。

「多分、その作戦は成功しないと思うんだよね」

それが悩んだ挙げ句に出てきた里恵の言葉だった。

「そうかなあ……」

その時、ガタンと大きな音が聞こえた。明と里恵は振り返った。すると、クボタが床に転がっていた。クボタの椅子がひっくり返っている。近くには、杉沢。

「お前、キモいから死んでくれない？」
「……」

杉沢の言葉にクボタは何も言わない。皆が彼らに注目していた。でも、助けようとする人は誰もいない。明はその光景を見ているのが辛かった。

「杉沢、止めるよ」

そう言ったのはまたしても直史だった。

「安藤に言ってもいいのか？ 今のお前の姿」

すると杉沢はふつと笑って、

「勝手に言えよ。俺があんな女のこといつまでも好きなのじゃないじやんか」

「あんな女って、そんな言い方……」

「暗いし、つまんねえし。あんな不細工、今でも好きなのじゃないじやんか」

「お前……!!」

直史は杉沢につかみかかろうとした。それを止めたのは、明だった。

「和泉、こんな奴殴ったって手が痛くなるだけだよ」

「幼なじみをけなされて黙っていられるかよ！」
「それは私も同じ気持ち」

大丈夫、怖くない、怖くない……。そう自分に言い聞かせながら
明は杉沢の目をまっすぐ見て言った。

「杉沢、いじめは止めな」

「何でお前に命令されなくちゃいけねえんだよ」

「あと、斐羅ちゃんのことそんな風に言わないで」

「何、お前、不細工の友達なの？」

「不細工って言うんじゃないよ！」

ついに明は我慢出来なくなった。直史を止めておきながらも、明は倒れていた椅子を杉沢に向かって投げた。杉沢は「痛え！」と声をあげると、殺気のもった瞳で明を睨み、誰かが止めるのも間に合わないほどの速さで腹部を殴った。

「うっ……」

明はお腹を押さえてうずくまる。すぐにナツキと紀子が近寄ってきた。里恵は立ちすくんだままだった。直史が殴りかかるうとするのを、他の男子が止めた。

「死ね、江川」

杉沢はそう呟くと教室を出て行った。

第53章 嫌な予感

「スマイリー、大丈夫？」

「ん……大丈夫」

ナツキが心配そうな顔で声をかけてくる。直史も、

「大丈夫か」

と言ってきた。しかし里恵は微動だにせず、無言で下を向いていた。明も様子がおかしいことに気付き、立ち上がって言った。

「里恵？」

返事はない。明は里恵に近付いて、顔を覗き込んだ。

「そっだよね」

「え？」

「明と直史は正しいよ。間違っているのは、アタシ」

「……」

「アタシだって、皆のことが好きだよ。だから、アタシも正しいこと、しようと思う」

明の目を見つめ、そう言った。どういう意味かいまいち分からずに聞き返したが、里恵はそれ以上何も語ろうとはしなかった。しかし最後に、

「ごめんね」

と言った。何に対して謝っているのか、それも結局分からなかった。

クボタの件は、担任に言いつけるといふ案もあるが、明は出来ればそうしたくはなかった。注意したらエスカレートするかもしれない。言いつけたとバレたら何をされるか分からない。里恵がいじめられていたときよりも遥かに怖かった。次の休み時間が来ると、杉沢は黒板を消しているクボタの背中に黒板消しを押し付けた。

「悪い、黒板消すの手伝ってやろうかと思っただら間違えちった。あれ？ でも消えないな。消したんだから消えるよ、クボタ」

クボタは無言で教室から出て行った。これだけのことをされても言い返さないなんて、余程杉沢が怖いのだろうか。

「杉沢」

呼んだのは里恵だった。ついに里恵が動き出した。

「ちょっと来て」

そう言うと廊下に姿を消した。杉沢も教室を出た。

「今井さん、杉沢を止めようとしているのかなあ」

「でもあいつは注意して止めるような奴じゃないよ」

「でも、今井さん強そうだし……」

ナツキと紀子が話す。今、里恵と杉沢はどんな会話をしているのだろう。二人が教室に戻ってきたところでチャイムが鳴った。

それから杉沢は、なんと六時間目が終わるまでクボタに全く手を
出さなかった。

「あれ、里恵いないの？」

明はマンションの屋上に着くと素っ頓狂な声を出した。直史と斐
羅しかないない。

「何か用事があるんだってよ」

「用事ねえー……」

どんな言葉で杉沢を止めたのか訊きたかったのに。

「そういえば今日出た宿題、絶対出来ないから和泉やったら写させ
てよ」

「やだね」

「えー、ケチ」

「なおくん、受験勉強大変？」

「そりゃあな。あ、皆に言っておきたいことがあつてさ。俺、受験
が終わるまでここに来るの止める」

「えー」

「たまには来てもいいけどな。やっぱり勉強頑張らないといけない
から」

「……どうしてそこまで頑張らないといけないのかな」

斐羅が呟いた。

「偏差値の高い学校に入るためだろ」

「良い仕事に就く為に？」

「前言っただろ？ 俺、政治家になりたいんだ」

「そつだよね……なおくんは目指すものがあるんだもんね。でも、あまり無理しないでね」

「ああ。さんきゅ」

「私も受験勉強しないとなあ……」

やらなければいけないのは分かっている。このままじゃいけない。私立に通えるほど家は裕福じゃない。きっと、一年後はナツキとも紀子とも直史とも里恵とも斐羅とも別々の道を歩んでいるんだろうな。大切なものを手放すのが少し寂しかった。

「……何か」

「え？」

斐羅の呟きを明は聞き逃さなかった。

「何か、嫌な予感がする」

「嫌な予感？」

「うん。里恵、今どうしてるのかなって」

「心配なら電話してみれば？」

直史が提案した。明は嫌な予感など全くしておらず、しかし、タロット占いが出来るような神秘的な力を持っている斐羅が言っているのだから少し不安になった。

「してみるね」

斐羅が携帯電話を耳に当てた。しばらくすると表情を曇らせて、

「出ない。留守電になっちゃった」

と言った。

「里恵、何の用事が全然言っていなかったの？」

「言っていない」

「これまでも里恵に用事が出来て来なかったことって結構あるの？」

「いや、めったにないよ、な？」

「うん」

里恵、今どこで何しているんだろう。不安が拡大してゆく。

「私、もう一回電話してみる」

斐羅が再び電話をかけた。また出ないのかな……と思ったとき、

「あ、もしもし？」

どうやら里恵が電話に出たらしい。

「今、どこにいるの。……あ、そうなんだ。いや、ちょっと何となく嫌な予感がして。そう、なら良いんだけど。……うん、分かった」

話が終わりかけたとき、斐羅が、

「……本当だよね」

と無機質な声で言ったので、明は思わず彼女の顔を見た。

「……そう。じゃ、またね」

斐羅は電話を切り、

「里恵はスーパーでお母さんに頼まれたもの買ってるって」

「斐羅ちゃんは……その、疑っているの？」

「どうして？」

「里恵に本当か確かめてた」

「別に深い意味はないよ」

そう言いながらも、夕方になって帰るまで斐羅の表情が強張っていたことを明は見逃さなかった。

第54章 良かったぜ。

里恵はそれからしばらく学校にも屋上にも来なかった。斐羅が心配して何度か電話をしたらしいが、用事があるの一点張りだった。杉沢によるいじめは今のところ収まっている。里恵の力だろうか？ 今度会ったときに訊いてみようと思っていた。

一週間後、里恵が登校してきた。

「あ、おはよ、里恵」

「おはよ」

「最近屋上にも来てないじゃん。どうしたの？」

「ちよつと忙しくて」

「ふーん……。斐羅ちゃんも心配してたよ」

「アタシは大丈夫」

しかし里恵の目の下には酷いクマが出来ていた。

「あ、今井」

直史が里恵の姿に気付いて声をかけてきた。

「よ」

「江川から聞いたけど最近屋上行ってないんだって？ 俺も受験勉強で行ってないんだけど。どうしたんだ？ 今井が受験勉強……なわけないよな」

「忙しいんだって」

「そうか……」

「スマイリー！」

ナツキに呼ばれたので席を離れる。

「おは」

「おはよー」

「今井さん、久しぶりじゃん」

「だね」

「でも、このクラスも平和になったよねー。いじめもなくなったし、由紀たちも大人しいし」

紀子が言った。

「あ、そういえば昨日の夕方今井さん見かけたよ」

と、ナツキ。

「え、どこで？」

「学校の校庭。昨日は学校に来てないのに何の用事だったんだろう」

どうして、里恵が学校の校庭に？

「私もナツキと一緒に見てたけど、誰か待ってるような感じじゃなかった？」

「あー、かもね」

用事とは誰かと会うことだったのだろうか。でも、誰と？

「ちょっと里恵に訊いてこようか？」

「あー、止めた方がいいんじゃない？」

「どうして？」

「何か周り気にしてたもん。ねー」

「うんうん」

「そっか……」

里恵が知られたくないことなら、訊くようなことはしない。でも、気になるのも事実だった。チャイムが鳴り、明たちは席に着いた。

昼休み、明は体育着を忘れていることに気付き、体育の町田先生に言おうと職員室に行った。しかし町田先生はおらず、もう体育館にいるのかもしれないと思い体育館に向かった。

体育館にはまだ誰もいない。町田先生の姿も見つからないので、一旦教室に戻ろうとしたとき、微かに声が聞こえた気がして足を止めた。

「……だよ。皆が来ちゃう……」

女の子の声だ。どうやら倉庫から声が漏れているらしい。明は倉庫の扉に耳を当てた。

「まだ大丈夫だろ」

低い、男の子の声。

「でも……あつ、あ……」

明は驚いて倉庫から耳を離した。

「や……ん、あ」

「気持ちいいだろ？」

「ん……」

誰かが……こんなところで……明の鼓動が速くなる。にしても、この二人の声、どこかで聞いたことがあるような……。

「今日はこの辺にしとくか。今日も良かったぜ、里恵」

……！

「杉沢……明日も？」

里恵と、杉沢……？

「明日じゃねえよ。放課後、田宮神社で。分かったな」
「……うん」

話が終わりそうだったので、明は急いで体育館を出た。鼓動がうるさい。顔が熱くなっている。どうして？ どうして里恵と杉沢が？ 二人が付き合っているという噂は本当だったのだろうか。もし、そうだとしてもあんないつもの里恵の声と違う艶めかしい声、聞きたくなかった。目をつむって頭をぶんぶんと振る。しかしあの声が耳から離れない。とりあえず、教室に戻らないと。

教室に戻るとナツキたちが話しかけてきたが、明は上の空だった。

第55章 もう……嫌……。

昼休みが終わってから、明は里恵に一言も話しかけられなかった。里恵も話しかけてこようとはしなかった。放課後、明は田宮神社へと向かった。本当はもうあんな声聞きたくないけど、会話を盗み聞きして事の真相を知ろう。里恵は、杉沢と付き合っているのか。里恵のおかげでいじめが収まったのか。

田宮神社に着くと、明は木の陰に身を潜めた。しばらくして、里恵と杉沢がやってきた。明は息を殺す。

「杉沢……今日でもう外でやるのは止めにしてくれない？」

「ヤだよ。ホテル高えし」

「誰かに見つかったらどうするの？」

「別にいいじゃんか」

杉沢はそう言って賽銭箱の前で里恵を押し倒した。そして濃厚なキスをする。里恵のYシャツのボタンを外し、下着も取り去って乳房を舐め始める。明の心臓がドキドキする。見たくない。でも、現実から目を逸らしたら真実が分からなくなってしまう。里恵が声を出し始める。

事が進むに連れて、明の目から涙が出始めた。悲しいのか何なのか自分でも分からない。しゃがみ込んで、必死に嗚咽を漏らすまいと唇を噛み締める。男の子の性器を見るのも、勿論他人の性行為を目の前で見えるのも初めてだった。

事が終わると、里恵は身体を起こした。頬が紅潮している。Yシャツのボタンを閉め、こう言った。

「もう、そろそろいいだろ？」

「まだだ。お前から言ったんじゃねえか。自分がセックスを毎日してあげるから、クボタをいじめないでくれと」

「でも、アタシもう嫌なんだよ」

「何言ってるんだよ、俺のことが好きな癖に」

「あつ……………」

里恵の首元に舌を這わせる杉沢。もう止めてほしい。これ以上見たくない。でも、今自分が出て行ったら里恵を酷く傷付けることになるだろう。

「……………止めて。確かに杉沢のことは好きだけど、エッチは好きじゃねえんだよ……………」

「俺と付き合ってるんだもん、セックスするの当たり前じゃねえか」

やっぱり里恵は杉沢と付き合っていたのか。今更ながら、シヨックだった。

「そうだけど……………杉沢はアタシの身体だけが目的じゃないの……………？」

「里恵のことは愛してるよ」

本当だろうか？ 里恵が言っていた好きな人とは、杉沢のことだったんだな。杉沢のどこがいいんだろう。

「斐羅のことも、もう悪く言わないよね？ 約束したよね」

「ああ、言わねえよ」

里恵は杉沢と一緒にいると、いつもより女らしく感じる。好きな人の前では彼女も女の子になるということか。クボタと斐羅のために身を売った里恵。これが、里恵の言った『正しいこと』なのか。

でも、こんなの間違っている。こんなことをして守られたって、クボタはともかく斐羅が喜ぶはずかない。

「じゃあ、また明日な」

「うん……」

杉沢は里恵を置いて神社を後にした。里恵はぼーっとしていたかと思えば、突然涙をこぼし始めた。

「……つく……もう……嫌……」

と呟く里恵。めったに見ない彼女の涙に、明は動揺した。そんなに嫌なことをしてまで、二人を守るなんて。里恵が泣くのを止め、神社を去るまで、明は一步も動けなかった。

明は家に帰ってから、このことを誰かに言った方がいいのか考えた。直史や斐羅に言った方がいいのか。この秘密は大きすぎて一人では抱えきれない。でも、口に出すのはすぐくはばかれることだし、里恵は誰にも知られたくないだろう。

「なのに私は、知ってしまった……」

知りたくなかった。杉沢が憎い。あいつさえいなければ、誰も傷付くことはなかったのに。

「明、夕飯だよー」

「はい」

明は考えるのをひとまず止めてリビングへ行った。

「スマイリー、眠そうだねー」

翌日。あくびを連発する明に紀子が言った。昨日はほとんど眠れなかった。ナツキや紀子にも相談なんて出来ない。話のネタにされるのがオチだろう。異性である直史にも話しにくい。里恵がかばっている当の本人の斐羅に話すのも気が引ける。だから、

「ちょっと悩み事あって」

とだけ言った。

「え、スマイリーに悩み事なんてあるの？」

「失礼な」

「スマイリー、何かあったらいつでも私たちに相談しなよ」

思わぬ紀子の温かい言葉に明の心が少しほぐれた。だから、つい口に出してしまった。

「……里恵、やっぱり杉沢と付き合ってた……」

「えっ!？」

「そうなの？」

「でも、何か嫌々みたいで……。クボタをいじめないのを約束に付き合ってるみたい……。あと、友達の斐羅ちゃんのことを悪く言わない約束」

ナツキと紀子が顔を見合わせる。

「里恵のあんな姿、見たくなかった……間違ってるよ、あんなの」

うっかり本音が出てしまった。

「スマイリー……何か色々あったみたいだね」

ナツキが明の肩に手を置く。

「今井さんはスマイリーがその事実を知ってるって分かってるの？」

紀子が尋ねる。

「ううん。分かってない」

「じゃあ本人に言った方がいいよ。そして、こんな間違ってるって言いなよ」

「言えないよ」

「どうして？」

ナツキが訊く。

「里恵は、私が知っているって分かったらすごくショックを受けると思うもん」

「そっか……。じゃあ、今井さんがスマイリーにそのことを告白するまで知らないふりしてた方がいいんじゃない？」

「でも、里恵すごく辛そうで……」

「今井さんが杉沢と付き合っていることの辛さと、スマイリーに知られたことの辛さ、どっちの方が辛いかよく考えた方がいいと思う」

でも、里恵は杉沢のことが好きだ。しかし性行為は嫌らしい。毎日性行為を求められることと私が知っているのと分かったときのこと、どっちの方が辛いんだろう？ 考えているうちに里恵が登校するとき

た。

第56章 自分のせいで。

明は里恵の顔を見ることが出来なかった。知らない方がいいこともあるって、本当だったんだ。でも、自分が何か行動を起こさなければ里恵は辛いままだ。どうすればいい？

「今井さん」

ナツキが里恵を呼んだ。

「何？」

「スマイリー、今井さんのこと心配してるよ。最近元気ないけど、何かあるのかなーって」

「別に、何もねえよ」

里恵が鼻で笑う。

「本当に？」

気が付けば、明は斐羅と同じ言葉を口にしていた。里恵の目をじっと見つめっていると、彼女は視線を逸らし、

「本当、だよ……」

と細い声で言った。

「今日は屋上に来てくれるよね？」

「あー……、今日も無理だな」

やっぱり無理か……。杉沢と会つのだろつ。そして、また……。

「もしかしたら、もういけないかもな」

「えっ」

「冗談冗談」

あながち冗談とも言えないんじゃないか？ と思つた。

「おい」

里恵が声をかけられた。あいつ……杉沢に。

「何？」

「ちよつと来いよ」

廊下に消えた杉沢の後を追う里恵。明は何も言えなかった。悔しかった。何も出来ない自分が。

「スマイリー」

ナツキが真顔で言つた。

「その斐羅ちゃんつていう子に、今井さんのこと言いな」

「えっ」

「そして、その子に止めてもらうんだよ。このままじゃ駄目だよ」

このままじゃいけないのは分かっている。でも、杉沢のことを斐羅が知ったらどれだけショックを受けるだろつ。ましてや、自分のためにしているだなんて。

「斐羅ちゃんってさ、もしかして安藤斐羅ちゃんのこと？」

紀子が訊いてきた。

「そうだけど……知ってるの？」

「私、和泉と同じ小学校だって言ったじゃん。だから、斐羅ちゃんとも同じ学校だったんだ」

「あ、そっか」

少し躊躇ったが、明は訊いてみた。

「斐羅ちゃんってどんな子だった？」

「変わった子だったよ。あんまり喋らなくて、でも人の心が読めるっていうか、妙に勘の鋭い子だった。だから、もしかしたら今井さんのことももう全部分かってるかも」

里恵が屋上に来なくなってから、斐羅は元気がなくなっただように見えた。それは寂しいからだと思っていたが、本当は里恵が自分を犠牲にしていると感じていたとしたら。いや、そこまで分かるだろうか？ それとも……。

「江川、ちょっと話したいことがあるんだけど」

突然直史に話しかけられてびっくりした。里恵の話は直史には知られたくないと思っていていたから余計に。直史に付いていくと、窓際で足を止めて言った。

「夕べ、安藤から電話があったんだ」

「何て？」

「里恵、もしかしたら自分のせいで酷いことをされてるかもしれないな

い、って」

ぎくりとした。

「ん？ 江川この話知ってんのか？」

「う、ううん！」

「何でそう思うのかって訊いても答えてくれなかったんだよな……。ただの勘なのか、それとも……」

「それとも？」

「俺たちの知らない情報を知っているかだな」

それは明がさっき考えようとした可能性と同じだった。

「とりあえず、俺今日は屋上に行ってみるよ」

「駄目！」

とっさに明が口にした。

「え？ どうして？」

「その……私が斐羅ちゃんに詳しく訊いてみるから大丈夫！ 何か分かったら和泉にちゃんと報告するし。和泉は受験勉強頑張ってるよ」

そう言って笑顔を作る。

「そうか……？ じゃあ、江川に頼むよ。よろしくな」

「うん。任せて」

直史が立ち去った後、明が呟いた。

「そう、これが一番いいやり方なんだ……」

屋上に行くと斐羅はもうそこにいた。

「斐羅ちゃん、元気？」

「え、元気だけど……」

「嘘、吐かなくていいよ」

明が斐羅の隣に座る。

「訊いたよ？ 和泉から。それに、元気ないの見てて分かるもん」

「そっか……」

斐羅がうつむく。

「で、どうして里恵が自分のせいで酷いことをされてるだなんて思うの？」

「……」

斐羅は答えなかった。言ってくれるまでいつまでも待とう。明はそう思っていた。

やがて、斐羅が躊躇いがちに口を開いた。

「……三日前、デパートで本村くんっていう小学校の同級生と偶然会ったの。そしたら……」

本村くん、とは杉沢のことだ。自分の心臓がどくん、どくと鼓動を打つのが聞こえる。

「そしたら、『久しぶりじゃん。お前、相変わらず不細工だな。しかも不登校なんだって？ 人間のクズじゃん』って……。まあ、それはどうでもいい話だよね。でも、その後言ってたの」

斐羅は顔を上げて明をまっすぐ見つめた。

「『里恵もお前なんかと友達じゃなかったら、あんな思いせずに済むのにな』って言ったの。楽しそうに笑って……。私の知っている本村くんじゃなかった。いつも優しい言葉をかけてくれた本村くんはもういなかった」

悲しそうに斐羅が言った。斐羅はまだ、杉沢のことが好きなのだろうか？ もしそうだったら、里恵のことを言ったら二重のシヨックを受けるだろう。だから、うかつには口に出せない。でも、最低限の情報は言わなければいけない。私は、もう覚悟を決めたのだから。

「里恵、杉沢と無理やり付き合ってるよ。……クラスで起きているいじめを止めるために」

第57章 名探偵。

明の言葉を聞くと斐羅は目を見開いて、

「里恵が……無理やり……？」

と言った。

「うん……」

「里恵が言ったの？」

「ううん。たまたま見ちゃって」

「どういう光景を？」

「え？」

まさか、そんなことを訊かれるとは思っていなかった。明は困惑した。

「一緒にいるだけじゃ、付き合ってるだなんて分からないでしょ？」

「それはその……そう、手！手を繋いで街の中を歩いてたの！」

「ふうん……。無理やりだったのは何で分かったの？」

「会話だよ。『付き合ってるから、クボタをいじめないでくれっ

てお前から言ったんだろ？』って杉沢が言ってた」

「……」

斐羅はあごを触って何やら考え事をしている様子だった。

「それで今いじめは止まってるんだけど、里恵が可哀想で。どうしたらいいのかな？先生にいじめのことをチクって里恵がもっと酷い目に遭ったら嫌だし」

「……逆の方法をとればいいんじゃないかな？」

「逆？」

「そのクボタつて人のことをいじめていたことを先生や親にバラされたくなければ、里恵と別れる、つて」

その発想はなかった。名案だと思ったが、問題がある。

「それ、いい考えだけどまたいじめが始まるんじゃない？」

「それも、先生に言うぞつて言えばいいんだと思う。一番の問題はいじめられるのが怖くて誰も先生に言えないことなんだから。とてもいい作戦だとは思えないけど、何もしないよりはマシじゃないかな」

「うん。私、杉沢に言ってみるよ」

「私も一緒に言つてやりたい。いいよね？」

それはまずい。杉沢が本村くんだとバレしてしまう。杉沢に対する斐羅の気持ちが分からない以上、会わせるのは得策ではない。それに、本当は里恵は付き合っていることが嫌なんじゃなくて性行為が嫌なんだと分かってしまう。

「大丈夫だよ、私一人で。杉沢に別れるように言ったことが里恵に伝わる可能性もなくもあらずじゃない？ 里恵は多分、杉沢と付き合っていることを私たちに知られたくないんだと思うんだ。だから、せめて斐羅ちゃんだけでも知らないふりをしてほしいの」

「……そうだね。分かった」

明はほっとした。

「明日、言ってくるね」

「いい結果を待ってるよ」

この作戦が上手くいけば、皆を救えるんだ。頑張れ、私！

決戦日。里恵は遅刻ぎりぎり登校してきた。しかし、杉沢はいつになっても姿を現さなかった。せつかく覚悟を決めたのに。まあ、別に今日じゃなくていいか。まだこのときはそう思っていた。

休み時間、里恵は体育着に着替え教室を出て行った。携帯電話を机の中に入れて。今まで里恵の携帯電話を覗き見したいだなんて思ったことなかった。しかし、里恵は今隠し事をしている。もしかしたら、あの携帯電話を見れば何かいい案が浮かぶかもしれない。次の授業は体育。明は最後まで教室に残ると、思い切って携帯電話を開いた。あつた、杉沢からのメールだ。送られてきたのは昨日。

『明日は田宮神社でお前の撮影会だ。綺麗な下着付けて来いよ』

撮影会！ そんなことをされたら、写真をネタにして何をされるか分かったもんじゃやない。食い止めなければいけない。でも、どうやって……。やっぱり、あれしか方法は残されていないのだろうか。一番とりたくなかったあの方法を。

「ずっと辛いよりは、一瞬だけ辛い方がマシだもんね……」

明は自分に言い聞かせた。

放課後、明は田宮神社へ直行した。すでに里恵の姿があつた。まだ杉沢は来ていない。里恵は明らかに元気のない様子で、

「もう、アタシも終わったな……」

と独り言を呟いた。

「杉沢のこと、待ってるんだね」

「!?!」

聞こえてきた小声に驚いて振り向くと、斐羅がいた。

「斐羅ちゃん、何で!?!」

「学校から里恵のことつけてきたの」

「どうして?」

「明ちゃんが何で嘘を吐いたのか知りたかったから」

斐羅の言葉にまたもどきりとする。

「嘘って、何のこと?」

「どういう光景を見たか。明ちゃん、言ったよね? 街の中で手を繋いで歩いているのを見た、って」

「うん。本当だよ、見たもん」

「嘘。だって騒がしい街の中で、二人の会話が聞こえるほど近くを歩いていたらとっくに気付かれていますよ」

まさか、こんなところに名探偵がいたとはね……。明は言い返せなかった。

「早いな」

杉沢が神社の鳥居をくぐってきた。斐羅が息だけで「えっ!?!」と言った。

「どうして……本村くんが……」

本当のことは言いづらいがもうごまかしようがない、明は仕方なく口にした。

「……本村くんは今杉沢って言うんだ……」

「でも前明ちゃんが杉沢と付き合っているのか訊いてきたとき、なおくんはただの不良だって」

「今の姿を知ったら斐羅ちゃんがショックを受けると思ったからだよ」

「……その口ぶりからして、知ってるんだね。私の気持ち」

「ごめんね、黙ってた」

「ん？ 何か声聞こえなかったか」

杉沢が言った。明は自分の口を押さえる。斐羅も同じ行動をとった。

「気のせいだろ」

「みたいだな。じゃあ、始めるぞ」

里恵を押し倒す杉沢。そして行為に及ぶ。斐羅が息をのむのが聞こえた。明は思わず里恵から目を逸らした。代わりに斐羅を見てみると、無言で涙を流していた。杉沢が嫌いで、里恵ともまだ付き合いの浅い自分があればショックを受けたのだから、斐羅のショックは計り知れないだろう。しかし今はそれに構っている場合じゃない。早くしないと撮影が始まってしまう。

「ごめんね、里恵。」

心の中で呟くと、隠れていた茂みから二人の前に姿を現した。

第58章 出歯亀。

「!？」

「え、江川……!？」

里恵は胸を隠し、信じられないと言った様子で明を見ていた。

「お前、何でここに……」

「聞いちゃったの。体育館倉庫での里恵とあなたの会話を」

「め、い……」

「それだけじゃない。ここで今みたいなことしているのも見た」

里恵が身体を起こした。顔が赤くなっている。衣服をちゃんと身につけると、

「……杉沢、どいて」

と言った。杉沢もズボンを履き、

「まさか、見られてたとはな」

と言って口を歪ませた。

「杉沢のせいで、里恵がどれだけ辛い思いをしているか知ってるの！ あんたさえ……あんたさえいなければ……」

「お前、何言ってるの？ 俺と里恵は付き合ってるの。付き合ってる男女がセックスして何が悪い？」

「とばけないで。ちゃんと聞いたんだから。クボタのいじめを止める為に里恵が嫌々身体を差し出してるって」

「へっ、知らねえな」

「止めてくれなければ、先生に言うから。クボタをいじめていたこと」

「止めなきゃいけないことなんて何にもねえよ。な、里恵」

杉沢が里恵の肩に手を回す。里恵は目を伏せながら、

「……そうだよ」

と言った。

「里恵！」

「辛いことなんて一つもない。アタシは、杉沢が好きなんだから」

「こんな奴のこと、本当に好きなの？ クボタをいじめて、斐羅ちゃんを中傷して。こんな奴が本当に好きなの？」

「ああ、そういえば安藤とこの前会ったな。相変わらずキモかったな」

「杉沢、もう斐羅のことは悪く言わないって約束だろ！」

「そう、杉沢は斐羅ちゃんのことを酷く言わない代わりに、里恵の身体を無理やり奪ったんだ」

ここまで言つて、自分は大変な失言をしたことに気が付いた。

今、斐羅ちゃんいるんだった。

自分の為に里恵がこんな思いをしていると知られてしまった……。明は前髪をかき上げて頭を抱えた。

「そんな事実はない」

里恵が言った。

「嘘！」

「明に危ない思いはしてほしくないんだよ。この意味、分かるだろ？」

杉沢を敵に回したら身に危険が及ぶということか。

「もう、誰にも辛い思いはしてほしくないんだよ……」

「あなたが辛い思いをしてるじゃない」

斐羅が茂みから出てきてそう言った。里恵の身体の動きが止まった。杉沢は笑みを浮かべて、

「まさか出歯亀が二人もいるとはな」

と言った。

「里恵、ごめんね」

「……何で斐羅が」

今の里恵にはこれだけ言うのが精一杯といった様子だ。

「私のせいだったんだね。里恵が辛い思いをしてるの。ごめんね、本当に……」

斐羅の目は真っ赤だった。

「違う……。アタシだよ」

里恵は立ち上がり、斐羅の前に立つと目を伏せて言った。

「謝らなきゃいけないのはアタシの方……。斐羅の気持ち、知ってたのに」

「何言ってるの。里恵が謝る必要なんてない」

「お前、まだ俺のこと好きだったのかよ。俺ってやっぱもてるな。まあ、こんな奴に好かれたって困るけど」

「本村くん」

「その呼ばれ方、久しぶりい」

「昔、クラスメイトのお金がなくなって、私が万引きしていることを知っていた先生が自分を疑ったとき、本村くん、必死でかばってくれたよね？ なくなったらお金は自分が払ってもいいから、安藤さんのことは信じてくれて。私、嬉しかった。そんな本村くんの優しさは今でもどこかに残っているはず。だから、もう誰かを苦しませるようなことは……」

「もうクボタはいじめねえよ。里恵さえいればいいさ」

杉沢が里恵の肩に手を置く。明がその手をパシんと叩いた。

「何すんだよ！」

「里恵に触れないで。別れてよ、このままじゃ里恵が……」

「いいんだ、明」

里恵が明の方を見た。

「アタシ、杉沢とは別れたくないんだよ」

「どうして!」

「……気付いたら、後戻り出来ないくらい好きになっちゃってたんだよ」

そう言って悲しそうに笑った。空が赤く染まり、さっきまで鳴いていた蝉の音が聞こえなくなっていた。

第59章 無力。

杉沢はにやりと笑って、

「ほら、俺たちは両思いなんだ。だから誰かに四の五の言われる筋合いはない」

と言った。明が、

「じゃあ、撮影会だなんて止めてよ……」

と言うと、杉沢の眉がぴくりと動いた。

「お前、何で知ってた」

「明、もしかしてアタシの携帯……」

「ごめん……」

明が謝る。

「じゃあ、これは知ってるか？ 撮影会は今日が初めてじゃないことを」

「！」

それは、つまり……。

「里恵の裸を写した写真は既にあるんだよ」

杉沢はそう言って笑った。明はこの杉沢という悪魔に殺意が沸いてきた。元々いけ好かない奴だったけど、こんな奴だったなんて。

「里恵！ こんな奴のどこが好きなの？」

「……杉沢はアタシを助けてくれたんだ」

「え？」

そして里恵は語り出した。真実が分からないままだった、あの日のことを。

「廊下でいきなり同級生の田淵たちに『放課後、俺の先輩の車へ乗れ。乗らなければ安藤斐羅をレイプする』って言われたんだ。アタシは、そんなことしたら警察に言っつてやるって言っただ。でも、そいつらは『俺たちには何人も仲間がいるんだぜ』って。そして、『まずは今の状況を分からせるのが先みたいだな』って誰もいない教室に連れ込まれそうになって……。その時、杉沢が現れた。そして、田淵たちを殴り始めた。その時、杉沢は男子のパンチをよけようとして転落したんだ」

それが、杉沢が落下した真相だったのか。田淵とは、学年でも有名な不良だ。仲間も同級生だけではなく先輩、後輩、沢山いるらしい。

「でも、杉沢はそんなことがあつて落ちたとは言わなかったじゃない」

「俺が言ったんだよ。ビクビクしながら病院に来た田淵たちに。『

このことをばらされたくなければ、もう今井に手を出すな』って」

「それで、本村くんのことを？」

「……うん」

「でも、里恵無理やり杉沢と……してるんでしょ？」

明が訊いた。

「それでもアタシが杉沢を好きなのに変わりはない」

「まあ、別に里恵が別れたいなら俺も話を聞かないわけじゃないぜ？ あの写真がどうなってもいいというならな」

里恵の裸の写真か。

「それって脅しじゃない」

明の言葉に杉沢は口元を緩め、

「違うな。誰もばらまくだなんて言っていないだろ？ それに、俺は里恵をレイプしたわけでもない。それで俺を捕まえられなくても思っているのか」

確かに杉沢の言うとおりだ。今の段階では警察は動いてくれないだろう。本当に、二人は付き合っているのだから。だからと言ってこのまま引き下がるのは悔しすぎる。でも、自分の頭ではいい案が思いつかない。斐羅はどうだろう？ 斐羅の方を見ると、彼女は鋭い目で杉沢を睨んでいた。

「……もう二人は帰ってくれ」

里恵が言った。

「里恵……」

「帰ろう、明ちゃん」

明は斐羅の言葉に驚いて顔を見た。斐羅は一度だけ頷き、里恵に背中を向けて歩き出した。明は斐羅と里恵を交互に見て、里恵がも

う一度、

「お願い。帰って」

と言つので仕方なく斐羅の後を付いていった。

「斐羅ちゃん、いいの？」

鳥居をくぐった斐羅に尋ねる。そこで斐羅の肩が震えていることに気付いた。ああ、斐羅ちゃんは里恵に涙を見せたくなかったんだな。明はそう思った。

「里恵が苦しんでいるのに何にも出来ない自分が悔しい……」

それは明だつて同じだった。助けたい。けれど、方法が思いつかない。結局、自分が杉沢との関係を知っていることがバレて里恵を傷付けただけだった。

「どうして本村くんはあんなにも変わってしまったのかな……」

「うん……」

優しくかった杉沢というのは明には想像しづらかった。

「その……杉沢のこと、好き？」

明が遠慮がちに訊くと、

「今日までは好きだったんだけどね。あんな姿見たら、もうそんな気持ちどこか行っちゃった」

そう言っ て空を見上げた。

「それに」

「ん？」

「本村くんと同じくらい好きな人、他にもいるから」

それは知らなかった。明は一度だけ振り返り、里恵と杉沢を見た。小学生の頃、斐羅と両想いだった杉沢。直史とも里恵とも仲が良かった杉沢。里恵が杉沢のことを好きな限り、二人を離す方法も権限もない。

「なおくんなら、どうにかしてくれないかな」

斐羅がぼそりと言った。

「和泉にこのこと言うの？」

「友達に隠し事してるのって、すごく罪悪感ある」

その気持ちは明にも分かる。しかし、これ以上里恵を傷付けて何の得があるのだろうか？ でも、直史なら。頭がいいから、何かいいアイデアが浮かぶかもしれない。

「言っ て……みる？」

「今度屋上に来たとき、話してみよう」

「じゃあ私、月曜になったら和泉に屋上に来るよう言っ てみようかな」

……でも、本当にいいのだろうか。異性の友達に知られたらどんな気持ちになるだろう。きっと、辛くて、恥ずかしくて……。

「待って、斐羅ちゃん。やっぱり止めようよ、和泉に話すのは」

「でも、私たちだけじゃ知恵浮かばない……」

「……今、私たちに出来ることは何もないんだと思う」

認めたくないが、それが現実だろう。

「無力、だね」

斐羅が悲しげに言った。

「うん」

その時、ある案が思い浮かんだ。いい案とは思えないが、これが最後の手段かもしれないと思った。

第60章 案。

次の日から明は杉沢のことを調べ始めた。クラスの男子に話を聞いたたり、杉沢の後を付けたたり。情報を集めているうち、カツアゲや薬をやっているという噂は信用性が高いと感じ始めた。でも、まだこれだけじゃ足りない。証拠さえ掴めれば……。

「なあ、江川」

ある日、直史が話しかけてきた。

「何か最近、杉沢のこと調べてるんだって？ どうして？」

まさか、里恵と別れさせる為に警察に捕まるような証拠を探している、とは言えない。

「うーん、ちょっとね」

「そういえば今井、まだ屋上に来てないのか？」

「うん……」

「どうしたんだろううな」

本当のことを言ってしまうたらどんなに楽だろう。でも、これは里恵の為にも言っちゃいけない。

「もしかして、杉沢のことと関係あるのか？」

ドキリとした。

「関係ないよ。全然」

「そうか……」

ナツキたちも同じことを訊いてきた。

「スマイリー、何で最近杉沢のこと調べてるの？」

「ちよつとね」

「もしかして、今井さんのことと関係ある？」

「……」

「それなら、うち協力するけど」

「え？」

「私も協力するよ」

「……本当に？」

「紀子と話してたんだ。もしかして今井さんは、そんなに悪い人じゃないんじゃないかって」

「今井さんね、この前私に言ってくれたの。『直史のことが好きなら早く告白した方がいい。彼女がいない今がチャンスなんだから』って」

「そうなんだ……」

「今井さんはスマイリーにとって大切な人なんですよ？　なら、協力してもいいかなって。ね、紀子」

「うん」

「じゃあお言葉に甘えるけど……。杉沢が逮捕されるような証拠を掴んでほしいの」

「ああ、薬をやってる証拠とか？」

「そう」

「任せとけ！」

「私も頑張ってみるよ」

ナツキと紀子の力強い言葉が明は嬉しかった。駒は揃った。あとは、どうやって駒を進めるかだ。

杉沢のことを調べてから二週間。未だに明は証拠を掴めずにいた。カツアゲをする気配もないし、薬をやっているという証拠もない。こうしている間にも、里恵は傷付いているというのに。

「もー、何で証拠見つからないんだろう」

明は焦っていた。

「もしかして、ただの噂だったのかも」

斐羅が言った。

「そんなことない。絶対いけないことやってるに決まってる。あと一歩なんだけど……」

「……案は一つだけあるんだけど……やっぱり駄目、危険すぎる」「どういう案？」

「本村さんの仲間に入れてもらうの。そしたら薬だって手に入るかも」

「どうやって、仲間に入れてもらうの？」「簡単だよ」

そう言って斐羅が話した方法は、確かに危険だった。でも、これしか案はないんじゃないか。問題は、どっちがその方法を試すかだ。

「私、試してみるよ」

「駄目。明ちゃんにこんな危険なことはさせられないよ。私が、やる」

「私だって、斐羅ちゃんにそんな危ないことさせられないよ。だから、私が」

しばらく押し問答が続いた。結局答えが出ないまま、話し合いは終わった。しかし、明の中ではもう結論が出ていた。

次の日、明は杉沢の仲間の矢野のげた箱に手紙を入れた。

『放課後、裏庭で待ってます』

江川 明』

約束通り、矢野は来た。

「何だよ、江川」

「ごめんね、斐羅ちゃん。これは、私がやらなくちゃいけないんだ。

「あの……実は私、矢野のこと好きなんだけど」

「は？」

「お願い、付き合って！」

「……マジかよ。ははは！」

矢野が声を上げて笑った。

「オーケーオーケー。付き合ってやるよ」

「本当？ 嬉しい」

誰が嬉しいかよ、ボケ。明は心の中で呟いた。

「これからは、なるべく矢野と一緒にいたいな」

本当の感情を押し殺し甘えた声を出してみせる。

「オーケー。あ、悪い、これから杉沢たちと遊ぶ約束してるんだ。もう少ししたら江川も仲間に入れてやるからな。じゃ」

よし、作戦通りだ。仲間に入れてもらえれば、全てが分かる。なのに、この流れてくる涙は何……？

第61章 助けるから。

その日、屋上に行くとき久しぶりに里恵がいた。

「あ」

「よっ」

ぎこちなく手を上げる里恵。

「今日は、暇なの？」

「ああ。矢野たちと遊ぶって」

矢野、という言葉に明が反応する。良かった、どうやら里恵は気付かなかったようだ。

「あ、明ちゃん」

斐羅が缶ジュースを持って屋上に現れた。

「来てたんだ」

「うん」

「明ちゃんも何か飲む？ ジュース買ってくるよ」

「あ、大丈夫」

「そっ？」

斐羅は里恵にジュースを渡し、自分のジュースのフタを開けた。

「これホットココアじゃんか」

「それしかなかったの。しょうがないでしょ」

「里恵、ホットココア苦手なの？」
「そう。アイスココアは飲む癖に」

斐羅が代わりに答えた。

「じゃあ、冷ましてから飲めばいいじゃん」

「夏だもん、なかなか冷めねえよ」

里恵は仕方ないというふうにはホットココアを飲んだ。そして、
まずい沈黙。杉沢のことが頭をよぎる。

「ごめんね……私のせいだよ」

斐羅も同じことを考えていたらしい、そう言ってうつむいた。

「何度もいうけど、斐羅のせいじゃないから」

里恵が言った。

「でも……」

「絶対に斐羅のせいなんかじゃない」

里恵の語尾が強くなる。

「私が、里恵を助けるから」

気が付くと明はそう口にしていた。

「助けるから。絶対」

「明は何もしなくていいんだよ……」

里恵のか細い声。救ってみせる。絶対。明はそう心に誓っていた。

矢野と付き合って二週間。初めて彼と一緒に帰った。繋ぎたくない手を繋いで。別れ道にさしかかったところでキスをされた。ファーストキスをこんな形で迎えることになるなんて、思ってもみなかった。本当は好きな人としたかった。そう思うと泣きたくなった。でも、ここでくじけちゃいけない。全ては里恵の為……。

「じゃ、バイバイ矢野」

「あ、待て、江川」

「何？」

「明日杉沢たちと遊ぶんだけど、江川もどうだ」

それをずっと待ちわびていたのだ。明は「行く行く！」と即答した。

「じゃあ、放課後昇降口で。またな」

矢野の背中が見えなくなった頃、明は「よっしゃ！」と言った。

次の日、昇降口で待っていると矢野とその仲間が来た。杉沢も一緒だ。

「え、矢野の彼女ってお前だったの？」

杉沢は驚いた様子だった。

「そ。俺たちラブラブだもんな？」

「うん」

は、誰が。表情に出さないようにして頷く。

「今日はどこで遊ぶ？」

「俺んちで飲むか？」

違う、自分が望んでいるのは薬をやることだ。明はそう思ったが口には出せなかった。

「じゃ、杉沢んちで飲もうぜ。あ、江川酒飲める？」

「飲んだことない……」

「そっかそっか」

そして明は矢野たちと杉沢の家に行った。我慢して明は酒に口を運ぶ。不味い。杉沢は缶ビールを飲んでいた。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「あ、田淵だ」

え、田淵？ 杉沢が転落した元凶の？

「あれ、何で江川がいんの」

「俺の彼女なんだ」

矢野が言ったが、その声は明の耳には届いていなかった。どうして、田淵が？

「ねえ、杉沢。ちょっと来て」

明は廊下に杉沢を呼んだ。

「何だよ」

「どうして田淵が来たの？ だって田淵って里恵を脅したんでしょ？」

「仲直りしたんだよ」

「ふうん……」

何だか腑に落ちない気もしたが、とりあえず頷いた。部屋に戻ると、酔った矢野が突然胸を触ってきた。

「嫌！」

矢野の手をなぎ払う。

「俺の彼女だろ？ いいだろ」

「止めて！」

通学バッグで矢野の顔を殴った。矢野は痛え、と言うと細い目で明をにらんだ。明は怖くなった。私、こんなところで何してるんだろ。薬もやっていないのだから、もうここにいる意味はない。でも、矢野とは付き合っていないと杉沢との接点を失ってしまう……。

「お前ら、セックスしちまえよ。俺ら観客になるから」

田淵が言った。

「おお、それいいな」

と、杉沢。矢野はにやりと笑って、

「江川。やるぞ」

と言った。

「嫌！ 絶対嫌！」

そう言っただけで明は部屋を飛び出し、玄関のドアを開けて杉沢の家から出た。後ろを振り返らずに走る。杉沢の家が見えなくなったところで、足の力が一気に抜けてその場に座り込んだ。怖かった。いくら何でも、性行為なんて出来るはずがない。もう矢野とは付き合えない。

「ごめん、里恵……」

これで里恵を救う方法がなくなった。途方に暮れた明が行く先は、一つしかなかった。

第61章 助けるから。(後書き)

ノクターンノベルズに、「15歳〜里恵の初体験〜」を載せました。

<http://nkx.syosetu.com/n2196t/>

18歳未満閲覧禁止です。

第62章 グル。

屋上には斐羅と里恵がいた。

「里恵……」

「どうした、明」

明は里恵に抱きついて、

「ごめん……里恵……ごめん……」

と言った。

「何がだよ。どーしたよ」

里恵は困惑している様子だった。

「私、自己中だよね。ごめんね」

「明は自己中なんかじゃねーだろ。何があった？ 言ってみな」

言えるわけがなかった。里恵の為に矢野と付き合っているだなんて。

「ごめん、何でもない」

明は里恵から身体を離れた。

「何か明顔赤くないか？」

酒を飲んだからだろう、顔が火照っている。

「熱でもあるんじゃない？」

斐羅が心配する。明はなるべく明るい声で大丈夫と言い、空を見上げた。雲一つない青空だった。

「何で、人生ってというのは思い通りにいかないんだらうね」

明は呟いた。

「里恵、まだ杉沢のこと好き？」

「……ああ」

「杉沢がどんな奴か知ってるでしょ？ あんな奴のどこがいいの！」

「……明には関係ない」

その時、斐羅が里恵の頬をはたいた。里恵は目を丸くした。

「斐羅……」

「苦しいのは里恵だけじゃないって何で分からないの？ 私たちは、里恵の親友なんだよ？ それが何で分からないの？ 私たちのこと、嫌いななの？」

斐羅は畳みかけるように質問した。目が潤んでいる。

「嫌いなわけ、あるかよ」

里恵が言った。

「二人とも、ごめん」

「里恵が別れないというのなら、方法は一つしかない」

斐羅が言った。

「方法？」

「本村くんがいなくなればいいんだ」

斐羅の言葉に明はぞっとした。まさか、斐羅ちゃん……。

「駄目だよ斐羅ちゃん、そんなの」

「でも、それしかない」

「止めるよ、斐羅。そんなことしたって誰も幸せにならない」

「そんなに本村くんのこと好きなの？」

「そうじゃないよ。アタシは斐羅に殺人犯になってほしくない」

しばらく明と里恵は斐羅を説得し、やっと諦めてくれた。そんなにも里恵のことを大切に思っているんだ。それに対して自分は何をやっているんだろう。自己嫌悪。

「アタシは大丈夫だから」

それが嘘だということを明は知っている。やっぱり、どうにかして杉沢と里恵を離れさせなければ。でも……どうやって？

光が見えるようになるのは、これから一週間後のことだった。

矢野とはあれ以来会っていない。明が避けているのだ。そして、たまたま杉沢と田淵と矢野が教室で話しているのを見つけた。何となく、隠れて聞き耳を立ててみる。

「いやー、今井も単純だな。ちょっとお前に守られただけで好きになっただけでやらせてくれちゃうんだもんね」

「お前のおかげだよ。俺の頼みを引き受けてくれてありがとな」

「まさか、お前が落ちるとは思わなかったけどな」

「ダイナミックだったよな」

「あれは痛かったぜ。ま、里恵が手に入ったんだから良しとするか」

そう言っつて三人は笑った。明の身体に嫌な予感が走った。まさか、田淵は杉沢に頼まれて里恵を襲おうとした？ そんな、まさか。しかし、そうとしか考えられなかった。

……許さない。

「ねえ、今のどついうこと」

「うわっ、江川……」

「全部仕組まれてたことなの!？」

二人はふつと笑った。

「ああ、そつだよ。女とやりたかったからな」

と、杉沢。

「それつて、女なら誰でも良かったつてこと？」

「ああ。里恵が一番騙しやすいかなと思つてな」

信じられなかった。こいつは普通の人間じゃない。おかしい。このことを、里恵に伝えなければ。

「おい、今の話を聞いてただで帰れると思つるか？」

矢野が明の手を持っていた。さーっと血の気が引く。

「嫌……」

自分の声が頼りない。そして明は床に押し倒された。

「大声出したらもつと酷い目に遭うからな」

明は手足をじたばたさせたが、男子の力には勝てない。Yシャツのボタンが引きちぎられた。

「止めて……！」

明は泣いていた。その時、教室のドアが勢いよく開かれた。

「明！」

そこにいたのは里恵だった。一瞬の隙について矢野から離れ、里恵に抱きつく。

「どっぴつことだよ……」

里恵は怒っているようだった。

「お前、知らねえの？ 俺と江川は付き合ってるの。やって何が悪い？」

「明がお前なんかと付き合うはずがない！」

「……本当なの」

「え？」

「私、矢野と付き合ってる」

明の言葉に里恵は目を丸くした。

「まさか、そんな、どうして」

「杉沢がカツアゲとか薬とかやっているところを見つけたかったから。矢野に近付けば杉沢の悪事が分かると思って」

明は本当のことを言ってしまった。

「結局その証拠は見つからなかったけど、証言なら手に入れた」
「証言？」

「杉沢と田淵はグルだったんだよ」

第63章 消えてしまえ！

里恵は目を丸くした。

「どういうこと？」

「里恵が矢野に襲われそうになったのは、杉沢が仕組んだことだったんだよ」

「……え？」

「里恵を助けることで、杉沢を好きになるように仕向けたことだったってこと」

「まさか……そんな……」

里恵は呆然としていた。

「そつだよね？ 杉沢」

「ああ。正解だぜ」

杉沢は笑った。

「里恵の単純さには笑ったな」

「杉沢……嘘だろ？」

「嘘じゃねえよ」

やっと理解したのか、里恵の目から一筋の涙が零れた。

「……信じてたのに。信じてたのに！」

そう言って杉沢につかみかかった。杉沢は里恵を突き飛ばした。椅子が倒れる。

「くそ……」

里恵は杉沢を睨んだ。

「お前なんか消える！ 消えてしまえ！」

「消えるのはお前らじゃねえのか」

田淵が言った。

「……どういう意味だよ」

「江川と今井、黙って教室を出ろ」

「どういづつもり？」

明が訊くと、田淵が懐からナイフを取り出した。明の身体から血の気が引いた。

「さあ、歩け」

「……先生に言っつよ？」

「言っただろ？ 俺らには仲間が沢山いるって」

杉沢が言った。

「明は逃げる」

と、里恵。

「でも……」

「早く逃げる！」

そう言われて明は教室を飛び出した。

「待てや！」

田淵の声が聞こえたが、明は振り返らなかった。まっすぐ職員室へ向かうと、町田先生を見つけて話しかけた。

「先生！ 里恵が、里恵が田淵たちにさらわれちゃいます！」

職員室にいた教師全員が明を見た。

「江川、落ち着け。何があった？」

「里恵を脅して、多分酷いことをしよう……！」

「江川、どうした」

話しかけてきたのは担任だった。担任は頼りにならないことは分かっていたが、今起きている状況を一人でも多くの人に知ってもらう必要があると思った。

「田淵たちが、ナイフで脅して里恵を連れ去ろうとしているんです」

「……本当か？」

「信じて下さい」

明は担任の目を見た。担任はゆったりとまばたきをし、

「今井はどこにいるんだ」

と訊いた。

「教室です」

「町田先生、行きましょう」

明の後ろを担当と町田先生が付いて来た。教室に付くと、既に田淵たちと里恵はいなかった。明は青ざめる。

「江川、今井の携帯の番号は知っているのか」

「あ、はい」

「先生の携帯貸すから、とりあえず電話してみろ」

明は担任の携帯を借りて里恵に電話をした。しかし、何コールしても電話に出てくれない。

「里恵……」

明は不安になって泣き出しそうになっていた。

「今井を連れて行ったのは田淵と矢野と杉沢だな？」

「はい」

「町田先生はそいつらの家に電話して下さい。私は他の先生にも伝えて捜しに行つて来ます」

「分かりました」

何もしてくれないと思っていた担任が動いてくれている。明は二人の教師に感謝しながら、

「私はどうしたらいいですか」

と訊いた。

「先生たちに任せて、江川は帰りなさい」

「でもっ！」

「お前も危ないかもしれないんだぞ。他の先生に付き添ってもらって帰るんだ」

そう言われると何も出来ない。明は他の先生の付き添いで家に帰ると、すぐさま斐羅に電話をした。

「どうしたの、明ちゃん」

「里恵が、里恵が……！」

明は落ち着かない気分のまま今の状況を説明した。

「……そう、本村くんが」

「里恵、殺されたらどうしよう」

「殺されはしなくても、犯される可能性は大だよね」

斐羅の声は冷静だった。

「ねえ、どうして斐羅ちゃんはそんなに冷静なの？」

「冷静なように聞こえる？」

「うん」

「そしたら……私は演技が上手いのかもね……」

そう言って受話器から斐羅の泣き声が聞こえた。そうか、斐羅ちゃんも不安なんだ。明は斐羅を安心させる為にも泣いたらいけないと思った。

「今、先生たちが捜してる。だから大丈夫だよ、きつと」

「車で移動してたら見つからないじゃない」

「……」

そのとき、キャッチが入った。担任からだった。

「今井が見つかったぞ」

「本当ですか!？」

「ああ……一応な」

明は担任の言い方が気になった。

「一応、って?」

「その……怪我していてな。あと……」

「あと?」

「……乱暴された後だった」

明の足から力が抜けた。へなへなとその場に座り込む。

「今、里恵は……」

「病院だ。警察に連絡して、田淵たちは連れて行かれた」

「怪我って、どれくらいなの?」

「軽傷だそうだ。ただなあ……」

「何ですか?」

「江川、今から病院に来てくれないか?」

「勿論!」

担任から病院の場所を聞き、斐羅に里恵が見つかったことを伝え

た。

「斐羅ちゃんも一緒に病院行かない？」

「行く。なおくんも誘った方がいいんじゃないかな」

「分かった、和泉に電話してみる」

そして明は直史にも電話をし、乱暴されたこと以外のことを伝えた。犯された、というのはすぐデリケートな問題だ。異性に知られたくないかもしれない。そう思ってたことだった。

明、斐羅、直史は病院に着いた。病室に入ると、里恵は顔に氷のうを乗せていた。担任が里恵の近くに座っていた。

「里恵」

斐羅ちゃんが声をかけた。いつものように笑って「何だよ、アタシなら大丈夫だから」なんて言うてくれるものだと思っていた。しかし、里恵はぼうつとしたまま表情を変えなかった。

「今井、分かるか？ みんなが来てくれたんだぞ」

担任の言葉にも里恵は無反応だった。

「里恵……」

明は戸惑った。こんなの、私の知っている里恵じゃない。

「今井は怖い目に遭って、一時的なショック状態になっているんだ」

第64章 サン……キョ。

「ショック状態……」

「め……」

里恵の口から言葉が漏れた。

「何？」

「」……め」

「ごめん、と言いたいのだろうか。明は微笑んで、

「里恵が助かって良かったよ」

と言った。

「今井、もう終わったんだ」

担任が言った。

「辛い思いをさせて悪かった。でも、もう大丈夫だからな」

「信じ……て……た」

里恵が途切れ途切れに言う。

「杉沢……こと……信じ……て……た」

「もう杉沢のことは忘れるよ」

直史が言った。そして、こう続けた。

「お前が杉沢と付き合っていたことくらい、知っているんだよ」

直史は知っていたのか。生ぬるい風がカーテンを揺らした。

「アタ……シ、田淵たちに……襲わ……れたん……だ」

里恵が告白した。そのことを知らない直史は驚いた顔をした。

「マジかよ……」

そう言って唇を噛む。

「怖くて……。ここにいた……。ら……。殺され……。る」

「今井、もうあいつらは逮捕された。大丈夫だ」

担任が里恵の肩を持って言ったが、里恵は首を振って、

「仲間……。に……。殺される……。殺……。される」

里恵の身体は震えていた。気の強い里恵がこんなに怯えているなんて……。明はいたたまれない気持ちになった。

「大丈夫。私が、里恵を守るから」

そう言ったのは斐羅だった。

「私も守るよ。里恵のこと」

明もそう言った。

「今井は一人じゃねえんだぞ」

と、直史。

「今井、こんなに守ってくれろという友達がいて幸せじゃないか。先生たちだって、全力でお前を守る。だから、安心しろ」

担任がこんなに頼もしい存在だったなんて知らなかった。

「先……生」

「何だ？」

「サン……キユ」

「こういときはちゃんとありがとうと言っただぞ」

そう言いながらも担任は照れくさそうに笑った。

「江川も疲れたろ？ 今日はずっと休みよ」

病院を出てからの別れ際、直史が言った。

「うん。和泉もね」

「ああ」

「なおくん、ごめんね。その……里恵と本村くんのこと、黙ってて、気にすんな」

そう言って直史は自転車で帰っていった。

「じゃあ、私も帰るね」

「うん。気を付けてね」

「明ちゃんもね」

斐羅も帰っていった。明は一人、すっかり暗くなった空を見上げて深呼吸をした。

「もう、終わったんだ」

そう、もう終わったんだ。田淵たちの仲間もどうせ捕まるだろう、と担任は言っていた。もう怯える必要はない。大丈夫。あとは、里恵が精神的にも肉体的にも回復するのを待つだけだ。

「頑張れよ、里恵」

そう呟いて、明は帰路についた。

一週間後、里恵が登校してきた。杉沢と里恵の噂が立てられることもなく、学校は平和だった。やはり杉沢たちは薬をやっていた。その件で多くの杉沢の仲間が逮捕された。

「今井さん」

ナツキが声をかけた。

「何？」

「良かったら、うちのグループに入らない」

里恵は一瞬目を丸くしたあと、笑って、

「よせよ。今更、入れねーよ。それに、アタシは単独行動の方が好きなんだ」

「でも、入りたくなったらいつでも言っただろ」

と、紀子。二人の優しさに明は嬉しくなって、

「私は里恵の友達だから」

と言って里恵の手を握った。ナツキと紀子がトイレに行っているとき、

「もう……大丈夫なの？」

と尋ねると、里恵は、

「大丈夫にならなきゃいけないもん」

と言って、少し哀しげに笑った。

「辛かったら、いつでも言っただろ」

「ああ。サンキュ」

放課後、一週間ぶりに皆が集まった。

「なんで和泉までいるの？」

明が訊くと、

「別にいいだろ」

と直史が言った。やっぱり、里恵のことが心配なのだろうか。

「里恵、本当にごめんね。元はといえば私のせいだよ」

斐羅が言った。

「だから、斐羅のせいなんかじゃないって」

「そっだよ」

元をただせば自分のせいだから。自分が杉沢たちの話を聞かなければ、あんなことにはならなかっただろう。

「もう、恋愛はこりこりだな」

里恵が笑って言った。しかし、その瞳は哀しみの色を帯びていた。乱暴されたショックもあるだろうが、好きな人に裏切られた辛さもあるんだろうな。

「今井のことすら守れなかったなんて、男失格だよ」

直史が言った。

「今井があいつと付き合っていることに気付いた時点で、あいつをぶん殴っても別れさせるべきだったんだ」

「直史、そんなことしたらお前がボコボコにされてただろうよ」

里恵が言った。

「それでも引き離すべきだったんだ。幼なじみなんだから」
「例えアタシが殴られても、アタシの目は覚めなかったよ。杉沢の証言を得ない限り」

「そうかもしれない。それほど、里恵は杉沢のことが好きだったの
だろう。」

「でも……守りたかったよ」
「なおくんはやっぱり優しいね」

斐羅が言った。

「そんなことねえよ」
「アタシ、そろそろ帰るわ。帰りが遅いと親が心配するし」

里恵の言葉で解散となった。エレベーターに乗っているとき、直
史が、

「江川は大丈夫なのか？」
と訊いてきた。

「えっ、何が？」
「江川も色々と疲れたろ。矢野とも嫌々付き合ってたんだろ？」
「あー……。私は大丈夫だよ」

笑顔でそう返す。

「あんまり、無理すんなよ」

直史の言葉が、素直に嬉しかった。

「また、明日からは来れなくなりそうだから、江川、安藤、今井をよろしくな」

「うん」

「オツケー」

マンションを出てから、斐羅が言った。

「なおくんって、里恵のこと好きなのかな」

第65章 好き。

「えー、どうだろう」

直史は里恵のことを心配している。それは、ただの幼なじみだからだろうか。その手のことに鈍感な明には分からなかった。

「明ちゃんは？」

「え？」

「なおくんのこと、どう思ってる？」

「うーん……好きだよ。でも、ラブじゃなくてライクの方
「そっか」

しばらく沈黙が続いたあと、斐羅が言った。

「私、なおくんのこと好き」

明は驚いて、

「え？」

と聞き返した。

「なおくんのこと、好きなの」

「って、ラブの方？」

「うん」

斐羅が直史のことを好きだなんて、全く気付かなかった。

「斐羅ちゃん、杉沢のこと好きだったんじゃないの？」

「同じくらい好きな人がいる、って言ったじゃない。それが、なおくん」

「そうだったんだ……」

「私、明日なおくんに告白しようと思う」

告白。斐羅が直史のことを好きなら、素直に応援したいと思った。

「そっか。頑張って。いい結果になること、祈ってるから」

「ありがとう」

もし、直史が里恵のことを好きだったら。どうか、両思いでありますように。明はただ祈っていた。

次の日、屋上に行くとき里恵しかいなかった。

「あれ、斐羅ちゃんは？」

「まだ来てない。珍しいよな」

「告白はしたのかな……」

「告白？」

つい、口にしてしまった。明は慌てて口を噤むが、時は既に遅し、

「告白って何のことだよ」

と里恵が訊いてきた。この様子じゃ、斐羅は里恵に話してないのだろう。でも、どうして私に話したの？

「あ、もしかして斐羅のこと？」

「えっ」

「違うのか？」

「あー……」

明は隠しきれないと思った。

「好きな人に告白するって言ってた」

「てことは、直史か」

「どうして知ってるの？ 斐羅ちゃんが言ってたの？」

明は驚いた。

「見てりゃ分かるよ。付き合い長いんだから。そっか、斐羅思いきつたなあ」

「ちなみに、里恵は？」

「へ？」

「好きなの？ 和泉のこと」

里恵は一瞬きよとした顔になると、声を上げて笑った。

「ないない。アタシが直史を？ ねーって」

なら、斐羅に可能性はあるのかもしれない。

「アタシ、直史が誰を好きだか知ってるよ」

「え！ 誰誰？」

「明、知らないの？」

「知らないよ」

「お前って鈍……」

里恵が言いかけたとき、屋上のドアが開いた。そこには、斐羅が立っていた。

「斐羅」

斐羅はまっすぐ明の元まで来ると、少しだけ笑って言った。

「悔しいな」

「え？ 何が？」

「なおくん、下で待ってるよ。明ちゃんのこと」

「え？ 何の用？」

明は今置かれている状況が理解出来なかった。

「明って、本当鈍感」

里恵が呆れた顔をしている。

「ほら、早く行ってやれよ。流されるなよ？ 素直に自分の気持ち
を言っただけ」

里恵に背中を押されて、明は訳が分からないままエレベーターで降りていった。

「よ」

マンションの前には、斐羅の言った通り直史が待っていた。

「何？」

「安藤から訊いてないの？」

「何にも」

「何だよ、じゃあわざわざ言った意味ねーじゃないか……」

「斐羅ちゃんから、聞いた？」

明は表現をぼかして訊いてみた。

「ああ」

「何て答えたの？」

「俺には好きな人がいる、って」

「え、斐羅ちゃんふつたんだ！ 酷ーい」

斐羅が可哀想になった。もしかしたら、って思っていたのに。斐羅ちゃんと和泉の関係はよかったのになあ、と明は残念に思う。

「俺の好きな人、っていうのがお前なんだよ」

時間が止まったような気がした。

「……は？」

「俺、江川が好きだ」

明は混乱した。自分のことが好き？ 和泉が？ 斐羅ちゃんでも里恵でもなくて、私？

「……何をおっしゃっているのですか」
「友達思いで、優しくて。いつの間にか好きになってた」

斐羅の言っていた言葉の意味が分かった。直史が自分のことを好きだったからだ。

「江川は、俺のことどう思ってるの？」

「どうって……好きだけど、それは友達としてっていつか……そんな、恋愛対象として見たことないもん……」

明は戸惑っていた。

「すぐに恋人になりたいとかは思っていない。ただ、考えてみてほしいんだ」

直史の顔は、今まで見たことがないほど赤く染まっていた。

「ごめんね、斐羅ちゃん」

屋上に戻ってきた明は斐羅に謝った。

「謝る必要ない」

「和泉、馬鹿としか言いようがないよ。よりによって私？ 謎すぎる」

「いやー、斐羅も長年の思いを告げたんだな」

と、里恵。

「そうそう、何で今になってって告白したの？ 付き合い長いのに」

明が斐羅に訊いた。

「本村くんが好きじゃなくなって、本当になおくんが好きだって気付いたから」

「そっか……」

「思いを伝えてすっきりした。明ちゃん、私に気を使わなくていいんだからね。好きなら好きって言えばいい」

明は分からなかった。直史のことは嫌いじゃない。でも、恋愛感情なんて……。

そんな中、明たちは模試を受けて、初めて自分の偏差値を知ることになる。

第66章 頑張ろっせ。

「あんだ、こんな偏差値じゃ底辺しか行けないじゃないの。今まで何してきたのよ」

明は母親に説教されていた。

「私なんかいつもクラスで十番以内だったわよ。本当に私の子ども？」

「あーもー、うっさいなあ。まだ三ヶ月もあるじゃん」

「三ヶ月しかない、でしょ。その間に偏差値十上げられるの？ 上げられる訳ないわよね。取り返しのつかないことってこういうことを言うのよ」

「っげ……」

「今何て言った？ 親に向かって何て言った？」

「分かりました、これから勉強頑張りますから」

明だって、正直模試の結果には落胆していた。川田総合の合格確率、三〇パーセント。ナツキと紀子が行きたいと言っている進学校、市立川田にいたっては十パーセントだった。自分はナツキたちと同じ高校には行けない。分かってはいたけど、ちよっぴり寂しい気持ちだった。明は屋上へ向かった。模試の結果を発表し合う約束だった。

「お、期待の新人が来ましたよ」

里恵が言った。

「何それ、期待の新人って」

「お前たちは今はただの石ころかもしれない。でも、磨けばきらき

らと輝くん。宝石なんだよ。by担任」

里恵が担任の喋り方を真似しながら言った。物真似があまりにも似ていたので、明と直史は笑った。と、明と直史の視線が合う。告白されたんだよね、私。明は直史を意識していた。今まで、何とも思っていなかったのに。

「じゃあ、発表していいこうぜ」

直史が明から視線を逸らして言った。

「誰から？」

「こういうときは、頭いい順だろ。つまり、俺」

「はいっついで」

里恵の言葉を見殺して直史は紙を広げる。

「偏差値はー……七〇！ 国語が七十一、数学が六十七、英語が……」

「あー、もういいもういい。で？ 浦高の合格確率は？」

「六〇パーセントだよ」

「なおくん、やっぱりすごい」

斐羅が言った。

「次は、斐羅だな」

「私でいいの？」

「ああ、明は最後だから」

「え、待って、それおかしいっしょ」

明が突っ込んだ。

「じゃあ特別にアタシの前に発表させてやるよ」

「えっと、いいのかな」

と、斐羅。

「どうぞ」

「偏差値、五十九。最高は国語の七〇で、最低は英語の四十八。あはは、凄い差」

「斐羅ちゃん凄い……」

「さすが、アタシの親友」

「安藤ってそんなに頭よかったのか」

「学校行ってたなら、もっとよかったのかな」

斐羅はぼつりと呟いて、しかしすぐに笑顔になり、

「だから、もう二度とこうならないように高校で頑張るんだ」

と言った。

「合格確率は？」

「市立川田が六〇パーセントだって。さすがに浦高は十パーセント」
「県内トップの壁は厚いんだね……」

でも、斐羅は十分凄いと明は思っていた。斐羅は、最近調子がいよいよに見える。里恵も、もういつもの里恵だ。

「次は私ね。えっと……四十一。馬鹿ですんませんっ」

「……想像以上の馬鹿だった」

「里恵はオブラートに包むってことを知らないのかい？」
「オブラートって何だ？」

斐羅が呆れた顔で、

「里恵……あなたも馬……いや、何でもない」

と言った。

「私は馬鹿じゃないぜ？ 偏差値、八十三だもん」

「八十三かー。凄い。……って、そんな訳あるかあっ！」

明が言った。

「ノリ突っ込みかよ」

里恵は笑った。

「さっきのは反対で、三十八でしたとき。明、どう思っよ」

以前の明だったら、「大丈夫だよ。苦手なところが問題に出ただけだって。受かる高校なんてどこにでもあるよ」などと必死にフォローしていただろう。でも、もう今は違う。

「……やばいと思う」

「だよなー」

「よし、一緒に勉強頑張ろうよ」

「した方がいい？」

「した方がいいでしょう」

「私も勉強しないとな」

斐羅が言った。

「え、斐羅は勉強する必要ないだろ」

「私学校行つてないから内申悪いと思う。だから、筆記試験でポイント稼がないと」

「ま、皆頑張ろうぜ」

直史が言った。勉強も大切だが、直史との関係も考えないといけないと明は思っていた。顔はまあまあだし性格だって悪くない、でも自分は付き合いたいと思うか？ 分からない。

「江川」

「……何？」

「お前なら大丈夫だよ」

何でだろう、直史に言われると嬉しい。

「明ちゃんはもう志望校決まってるの？」

「一応、川田総合かな。近いからって理由だけけど」

「皆、ばらばらになっちゃうんだね」

斐羅は哀しそうに言った。高校生になっても、こつやっつて皆で集まってお喋り出来るのだろうか。人は、前に進む度何かを失ってゆく。そんな気がした。

第67章 悩み。

明は少しずつ、家で勉強をするようにした。里恵や斐羅と一緒に問題を解くこともあった。直史は屋上に来なくなり、明はちよっぴり寂しく感じていた。そろそろ告白の答えを出さなければいけない。

「なあ、江川」

学校で直史が話しかけてきた。

「何？」

「考えてくれたか？」

「あー……」

明はしばらくの沈黙のあと、

「ごめん。私、和泉とは付き合えない」

と言った。直史は頷いて、

「そっか」

と言った。

「私は、斐羅ちゃんや紀子ちゃんが大切だから」

二人を差し置いて付き合つたということはどうしても出来なかった。

「紀子って、新井？」

「うん」

「何、あいつ俺のこと好きなの？」

「あ」

つい言ってしまった。私は笑ってごまかそうとした。

「じゃあ、その二人が俺に興味がなくなったら付き合ってくれ
るわけ？」

「え？ え？」

明はあたふたした。そんなの、考えてなかった。

「俺は、お前の気持ちが知りたい」

「……。分かんないよ……」

それが本音だった。

「俺は、江川のこと好きでいていいのか？」

直史の目は真剣だった。

「いいけど……それに応えられるか分からないよ？」

「それでもいい」

直史は一途なんだな、と思った。いつか、自分の気持ちが分かる
日が来るのだろうか。

“夢”

黒板にはそう書かれていた。

「皆、将来の夢について書くんだ。何になりたいとか、なりたいと思っただきっかけとか」

担任が原稿用紙を配る。皆がシャープペンを走らせる中、明の手は止まっていた。思い付かない。何にも。担任が、

「ん、どうした江川。思い付かないのか？」

「はい」

「なら、興味のある分野でもいいぞ」

それすら明にはなかった。里恵の方を見ると、ちゃんと手を動かしている。前、夢なんてないと言っていたのに。結局作文は一文字も書けず、一週間以内に提出するように言われた。

屋上で明は訊いた。

「ねえ、里恵。将来の夢、何て書いたの？」

「カウンセラー」

明と斐羅は目を丸くさせた。

「実はアタシ、今カウンセリング通ってるんだ。あいつとのが結構こたえてね。で、アタシも自分のような思いをしている人を救いたいって思っただけ」

里恵の言葉だとは思えなかった。斐羅が、

「里恵、偉いね。そんな里恵大好き」

と言って里恵に抱きついた。里恵はバランスをくずし、倒れそうになる。

「私のカウンセリングもしてほしいよ」

と、斐羅。

「あ、じゃあ私も」

「明には悩みなんてないだろ」

「失礼な。私にもあるもん。和泉のこととか、和泉のこととか」

明は指を折った。

「全部直史のことじゃねえかつ」

里恵の突っ込みは今日もキレがいい。

「まだ、返事してないんだ」

「返事は一応したよ。付き合えないって。でも、分からない、自分の気持ち」

「本当か？ 実は、分かってんじゃないのか」
「いや……」

「斐羅や、紀子……だっけ？ 二人に遠慮しているんじゃないのか」

もしかしたら、自覚はないがそうなのかもしれない。

「私のことは気にしないでいいよ。好きなら、付き合いなよ」

「……」

自分は、直史のことが好きなのだろうか？

「とりあえず、一度デートしてみりゃいいじゃんかよ」

里恵が言った。

「え、でも和泉とは散々お話したし」

「二人きりで遊びに出かけたことはないだろ？」

「うん……そうだけど……」

「そうだね、一度二人で遊びに行ってくるといいよ」

と斐羅が言った。

「そうしてみよっかな……」

明も、デートしてみようという気持ちになってきた。でも、その前に直史の告白のことを言わなければいけない人がいる。

「紀子ちゃん、私、和泉に告白されたの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456a/>

15歳。

2011年12月2日00時49分発行